



昭和51年度

都倫研紀要

——テーマ学習を中心とした

わかりやすい授業展開——

第15集

東京都高等学校「倫理・社会」研究会



は し が き 東京都高等学校「倫理・社会」研究会

会 長 岡 本 武 男

つい一年ばかり前であったと思うが、当代高名の倫理学を担当しておられる大学の教授とお茶をすすっていた。その時この高名の先生は「あんな難しい倫理・社会はやめた方がいいんじゃないか。」と何気なく言われた。僕は全くびっくりしてしまって、「先生、生徒たちにとっては、数学も英語も理科も国語もなんだってみんな難しんですよ。難しいからやめるといふなら、全部やめてしまわねばなりませんね。」と笑いながら反論したことを思い出す。「倫理・社会」は難しくて生徒たちの身につけていないから、役に立たないという声はあちこちで耳にした。現場の学校にも、こういう意見がないわけではない。

昨年8月、全国「倫理・社会」研究会の大会が終わってから、教育課程の改善について、大会の意を受けて文部省に陳情にいった。高等学校教育課長や視学官や教科調査官等にお会いした。僕は「教育課程審議会の方々には、やはり倫理・社会は難しいからやめるといふ考えが強く働いているのではないですか。」と言ったら、課長さんは「絶対にそんなことはありません。審議会で決まったことですから一課長など何もできません」といふご返事が繰り返された。視学官や教科調査官の方々からは、「高校進学者が中学卒業生の90%以上にもなっている現状を踏まえて、これらの生徒に社会科教育をどう進めるかということを総合的に考えてほしい。」という意味の発言があった。文部省の課長さんが、「難しいからやめろ。」という考えは全くないといわれたけれども、先に書いたような高名の先生やちらほら耳に入ってくる世間の声を聞くとともになして聞いていると、僕はやはり「難しいからやめた方がいい、身につけていないし、役に立たないからやめた方がいい。」という考えが強く審議会の方々の意識に働いているように思えてならないのであ

る。そのほかに「倫理・社会」という科目をやめねばならぬ理由が不敏に見つからぬのである。

中学を卒業して高等学校に入ってきて、分数の加減乗除ができない生徒が数多くいることは、世間の常識である。そういう生徒に高等学校の指導要領に基づいて造られた教科書をもろにぶっつけている先生はまずいないであろう。やはりそれらの生徒の学習能力に応じて、教材を与え、わからせる工夫をするのが、教育現場の姿である。数学は難しいからやめる、90%以上のものが高校に入ってくるから、数学の総合科目をつくるなどという議論が成り立つであろうか。

身につかないとか役に立たないという考えは、分らぬわけではない。戦後は修身教育と言ったら、悪い教育の典型のように言われた。しかし僕は必ずしもそう思わない。修身の教科書にもあったし、先生からも教わった「よく遊び、よく学べ。」ということは、今も忘れることはできないし、年を重ねるごとにそのことがよく生きるためにどんなに大切なことかが、切実さをもって迫ってくる。しかし現実の僕はとてもじゃないが、よく遊びもしなければよく遊びもしないのである。いうならば身につけていないし、したがって行ってもいないのである。人からみると役に立っていないのだ。しかし僕はこの教えが僕をダメにしたとも悪い教育だったとも思えないのである。

ソクラテスは知行合一を説いた。それを僕は教えてきたし、この研究会の先生方も一生懸命教えてこられたに違いない。その結果、生徒の冒険が知行合一になったなどと誇らしげに語る先生は一人もいないであろうし、そういう生徒がいないからといって、ソクラテスの教えを取りあげることは役に立たないといったら、物笑いになるだろう。

今から15～6年前に「倫理・社会」という科目の独立について文部省は滔々たる論を組み立てて、全国の現場教師を説得して回った。今その論は不用になったとして、この科目はなくなろうとしている。しかし人類の教師の言説は、後にくる若い世代にどうしても伝えねばならない。このために努力し

ておられる先生方に心から敬意を表し、このための推進役をつとめておられる事務局の杉原先生を中心とするスタッフの先生方に、心から御礼を申しあげ、敬意を表する次第である。

目 次

はしがき	会長 岡本武男	1
研究分科会参加者名簿		7
Ⅰ 研究主題と研究体制および紀要の編集方針		9
Ⅱ 研究会の全般的活動の概要		12
Ⅲ 特別分科会 研究経過報告		14
将来の「倫理・社会」－教育課程審議会の経過をふまえて－		
Ⅳ 研究報告		

第1分科会 「社会と青年」

研究経過報告		19
チャップリンの「モダン・タイムス」と生徒の「モダン・タイムス」(現代)観		
両国高 小平 克		23
広告と私たちの生活	育山高 小川一郎	30
社会の退廃と民主主義の問題	王子工高 大木 洋	34
社会規範と遵法意識について	府中高 永上肆朗	38
小集団を考える	志村高 木村正雄	42
「劇」と「必然性」－「生きがい」をめぐる	板橋高 小河偕国	46

第2分科会 「愛・芸術と青年」

研究経過報告		53
「ゲーテのことば～愛と芸術について」葛飾商高	浅香育弘	55
「ドラクロワの日記」(二見書房)		
一面家の魂の記録	小金井工高 平沼千秋	59

「美と崇高」

—カントの『美と崇高との感情性に関する観察』(1764)より

	白鷗高 徳久 寛	63
板業における美—棟方志功「板極道」(中公文庫)	上野高 海野省治	67
高村光太郎 — その愛と美 —	江北高 宮崎宏一	71
P・ゴーギャンにおける「愛と芸術」	駒込高 鹿野貞一	75

第3分科会 「哲学と青年」

研究経過報告	目黒高 渡辺道子	81
倫・社の授業について思うこと	化学工高 矢島賢二	84
倫理・社会と哲学	駒場高 細谷 斉	88
利己心と利他心—ベンサム功利主義を通して	桜町高 佐藤 勲	93
合理論と経験論への導入の試み	小石川高 田中正彦	97

第4分科会 「宗教・自然と青年」

研究経過報告		103
宗教教育のむずかし		
— 特にキリスト教について —		105
— 仏陀のさとりについて —	十文字高 岡田春生	108
源流思想にみられる自然観	清瀬高 小川輝之	110
東洋と日本の見なおし — 人間と自然		
必修「社会」のわらい「自己探究と自然愛・人間愛」のための 教材研究へ	大森高 吉沢正晶	114
「宗教学習における親鸞の意味づけ」		
— 親鸞の授業における強調点、その一例	府中工高 関根荒正	118
「俗」の構造	高島高 葦名次夫	123

V 〔特集〕—『わたしはこのような課題を出している』

- | | | |
|-------------------------------|-----------|-----|
| (1) 「私の理想の生き方」と「ソクラテスの弁明」の読後感 | 清瀬高小川輝之 | 131 |
| (2) 昭和51' 倫社夏季課題 | 葛飾商高 浅香有弘 | 131 |
| (3) 夏休み課題—テーマ読書から小論文へ | 大森高 吉沢正品 | 132 |
| (4) 倫社学習のまとめにふさわしい考查問題の作成 | 国分寺高 菊地 堯 | 134 |
| (5) 「江戸時代以降の日本の思想」 | 白鷗高 徳久 寛 | 134 |
| (6) 写真課題 | 高島高 葦名次夫 | 135 |
| (7) 単位修得小論文 | 上野高 海野省治 | 135 |
| (8) 夏季読書課題 | 鷺宮高 佐々木誠明 | 136 |
| (9) 「現代社会と青年」の分野における課題 | 府中工高 関根荒正 | 136 |
| (10) 思想の源流についてのレポート | 桜町高 佐藤 勲 | 137 |
| (11) 「読書指導を併行した授業の展開」 | 成城高 野村 誠 | 137 |
| (12) 私の倫社課題 | 駒場高 細谷 斉 | 138 |
| (13) 研究発表・年間レポートなど | 志村高 木村正雄 | 140 |
| (14) わたしはこのような課題を出している | 両国高 小平 克 | 140 |
| (15) 倫社ノートと学位論文 | 府中高 永上肆朗 | 141 |
| (16) 高校生の意識・行動 | 本所高 勝田泰次 | 141 |
| (17) 読書課題と研究論文課題 | 育山高 小川一郎 | 142 |
| (18) 倫・社グループ研究報告書 | 江北高 宮崎宏一 | 142 |
| (19) 夏休み読書課題 | 盛宮高 井原茂幸 | 143 |
| (20) 卒業を前にして (作文) | 化学工高 矢島賢二 | 143 |
| (21) 読書課題 | 保谷高 杉原 安 | 144 |
| (22) 「倫・社」修了論文 | 板橋高 小河信国 | 145 |
| (23) 自習時の「課題」 | 羽田高津田信一郎 | 145 |
| 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約 | | 146 |
| 事務局より | | 147 |
| あとがき | | 148 |

研究分科会参加者名簿〔五十音順〕

※印は分会世話人

◎印は特別分科会世話人

〔第1分科会〕（社会と青年）

秋元正明（学芸大附）	葦名次夫（高島）	市川仏乗（駒大附）
泉谷まさ（江戸川）	内田君夫（攻玉社）	大木 洋（王子工）
小川一郎（育山）	香川 弘（安田学園）	勝田泰次（本所）
菊入三樹夫（家政大附）	木村正雄（志村）	河野速男（北）
小平 克（両国）	佐々木誠明（鷺宮）	鹿野貞一（駒込）
※渋谷紀雄（墨田川）	杉原 安（保谷）	鷺見美雄（駒場）
関根荒正（府中工）	高安要夫（市ヶ谷商）	田中正彦（小石川）
※津田信一郎（羽田）	永上輝朗（府中）	長沢幸男（育英工専）
野村先生（成城）	吉沢輝久（杉並）	

〔第2分科会〕（愛・芸術と青年）

浅香育弘（葛飾商）	新井 清（府中西）	石森 勇（竹早）
※海野省治（上野）	小笠原悦郎（日大二）	坂本清治（白鷗）
※徳久 寛（白鷗）	平沼千秋（小金井工）	宮崎宏一（江.北）
矢島賢二（化学工）	渡辺道子（目黒）	

〔第3分科会〕(哲学と青年)

井原茂幸(鷺宮)	五味誠(保谷)	佐藤勲(桜町)
田中正彦(小石川)	津田信一郎(羽田)	中村新吉(練馬区教委)
成瀬功(葛飾野)	深野良寛(秋川)	細谷斉(駒場)
※矢島賢二(化学工)	吉沢輝久(杉並)	※渡辺道子(目黒)

〔第4分科会〕(宗教・自然と青年)

※草名次夫(高島)	市川仏乗(駒大附)	岡田春生(十文字)
小川輝之(清瀬)	菊地堯(国分寺)	※木戸能史(育英工専)
佐藤哲男(江戸川)	鷺見美雄(駒場)	高野啓一郎(サレジオ)
寺島甲祐(大森)	長沢幸男(育英工専)	並木豊勝(育英工専)
沼田俊一(戸山)	藤田若男(帝京)	吉沢正晶(大森)

〔特別分科会〕

浅香育弘	草名次夫	石森勇	市川仏乗	内田君夫
海野省治	小笠原悦郎	岡田春生	小川輝之	◎菊地堯
木村正雄	佐々木誠明	坂本清治	佐藤勲	杉原安
津田信一郎	寺島甲祐	永上輝朗	◎中村新吉	中村佑二(三田)
◎細谷斉	御厨良一(三田)		宮崎宏一	村松悌二郎(府中西)
吉沢輝久	◎吉沢正晶	渡辺浩(江北)		

I. 研究主題と研究体制および紀要の編集方針

研究部長 宮崎 宏 一

研究副部長 市川 仏 乗 葦 名 次 夫

〔本年度の研究主題〕

テーマ学習を中心としたわかりやすい授業展開

〔研究主題設定の趣旨〕

(1) 都倫研は、発足以来現場の諸先生方の授業体験や実践を通して、指導内容の精選、教材内容の平易化などについて積極的、主体的に研究会活動がすすめられてきた。しかし今回の教育課程審議会では、現在の高等学校教育は一般に内容の程度が高く専門的に、分化しすぎているとして、教育内容を再構成すべきであるという声がある。これにもなって本年度は高等学校における各教科・科目の編成において「倫理・社会」は厳しい状況に置かれているといえる。

(2) これらのことから、現代の高校生の問題意識や行動の実態などをふまえて、わかりやすい「倫理・社会」の授業展開を考えていかねばならない。そのためには具体的に生き生きとした授業の実践的工夫が課題となる。高度の内容であっても、それを現代の高校生にふれさせ、いかに興味や関心をいだかせるか。われわれはそういった内容を精選したわかりやすい教材化の研究が必要であろう。本年度は昨年の研究主題「教材内容の平易化 — 今日の生徒に適合する倫理・社会へ」をさらにおしすすめ、わかりやすい新鮮な授業展開はどうあるべきかを研究テーマにしていきたい。

(3) そこで本年度は、これまでのような教科書の分野別の分科会やソク

ラテス・プラトンからはじまってサルトルまでといった思想史学習を中心とした分科会組織をとらずに新たな角度からアプローチしてみたい。これまでややもすると教材化しにくかった、人生の基本的主題を「テーマ学習」あるいは「主題別学習」と呼ばれてきた方式で、分科会構成を考えてみた。このテーマ学習を中心としたわかりやすい授業展開によって、現代の高校生に対応できる内容にしていきたい。

〔研究体制〕

- | | | | |
|-------|--|-------|----------|
| 第1分科会 | 社会と青年 | 第2分科会 | 愛・芸術と青年 |
| 第3分科会 | 哲学と青年 | 第4分科会 | 宗教・自然と青年 |
| 特別分科会 | 将来の「倫理・社会」－教育課程審議会の経過をふまえて－将来の「倫・社」の位置づけ、基本的性格、内容構成などについて検討していく。 | | |

〔特集－「わたしはこのような課題を出している」〕

夏休み、冬休み、あるいは平常時の際に、どのような課題を出されているか、先生方の課題実践例を紙上で交換し合うというねらいで本年度研究部が計画を立てたものである。

- ①課題のねらい ②課題の内容・方法 ③評価・授業における活用のしかた

〔紀要の執筆要項〕

〈執筆のねらい〉

本年度研究主題「テーマ学習を中心としたわかりやすい授業展開」について、各分科会における共同研究、また個人分担研究の結果を具体的に紙上に報告する。あまり型にこだわらず、自由に研究成果を発表する。

〈各分科会の研究経過報告〉

各分科会の世話人は、従来通り、各会の研究活動の経過を簡単にまとめる。分科会の雰囲気やどのようであったか、また文献の読み合せ、研究発表や研究交換、あるいは討論の重要な部分についてはわかりやすく筆録報告をする。

〈個人分担研究報告〉

テーマ (主要事項・サブタイトルなど)

1. このテーマをとりあげる理由、又はこのテーマの学習のねらい。(0.5 P)
2. 小項目をいくつか立てて、それについてできるだけ平易な文献資料の抜萃などを示す。なお紙幅のつごうですべてにわたって引用できないときは〇〇本〇ページ〇行目より〇行目までと出典を示すように心がける。また視聴覚器材を使用する場合は、できるだけ具体的に説明を加える。(3.0 P)
3. まとめ 失敗とくふう、指導上の留意点、問題点などをもってまとめとする。(0.5 P)

＜付 記＞

本年度の研究体制は、年度当初①社会と青年、②愛と青年、③哲学と青年④宗教と青年、⑤自然と青年、⑥芸術と青年の六つの分科会を設置し、参加希望の数をみて、特に少ない分科会ができた場合は、統合整理しようではないかということでスタートいたしました。その結果、上記の通り、②の「愛と青年」と⑥の「芸術と青年」が合併され、④の「宗教と青年」と⑤の「自然と青年」とが合併されたわけです。

本年も1人一分科会所属を原則としましたが、希望により他分科会への出席も歓迎されるより配慮いたしました。分科会世話人は、研究例会などで次の分科会開催の日時・場所等を紹介し合っていたようでした。

以上

Ⅱ 研究会の全般的活動の概要

〔第1回〕 5月28日(金) 総会・研究発表大会 於 東京都教育会館

1) 総会

挨拶

前会長 中村義之氏

新会長 岡本武男氏

会務・決算の報告および承認

都立白鷗高 坂本清治氏

事業計画・予算・新役員の選出

都立保谷高 杉原 安氏

研究事業計画・研究主題の提案承認

都立江北高 宮崎宏一氏

駒沢大附高 市川仏乗氏

都立高島高 葦名次夫氏

2) 研究発表ならびに研究協議

「昭和50年度の研究活動の総括」

都立大森高 吉沢正晶氏

「全倫研全国調査を終えて」

都立清瀬高 小川輝之氏

「共同協議 — 教育課程改訂の現在までの経過と今後の動向について — 」

教育課程審議会委員

中村義之氏

昭和女子大学 講師

都立大森高 吉沢正晶氏

3) 講演

「ニイチエの学問批判をめぐって」 東京電気通信大学助教授 西尾幹二氏

〔第2回〕 6月18日(金) 第1回例会 於 都立上野高

1) 公開授業

「仏陀の思想」 — 3分間スピーチをまじえて — 都立上野高 海野省治氏

2) 講演

「聖書における人間像」 東京大学教授 前田驥郎氏

3) 分科会

分科会の結成・世話人選出・分科会年間計画の協議決定

〔第3回〕10月29日(金)第2回例会 於東京学芸大学附属高等学校

1) 公開授業

「モンテニユについて」 東京学芸大附属高 秋元正明氏

2) 研究発表

「道徳形而上学原論からの一考察」 都立白鷺高 徳久 寛氏

3) 講演

「人間存在のおもしろさ」 元法政大学教授・評論家 福田定良氏

〔第4回〕11月22日(月)・11月23日(火) 全倫研秋季大会と共催
(第3回例会於駒沢大学
高等学校)

1) 公開授業

「イエスの思想について」 駒沢大高 市川仏乗氏

2) 坐禅の実習 — 坐禅堂にて —

駒沢大高 広野義成氏

同 大山定隆氏

3) 全体協議「教育課程審議会の審議のまとめをうけて」

4) 記念講演

「大乘仏教の倫理観」如来蔵の思想を通して—東京大学教授
高崎直道氏
駒沢大学講師

5) 臨地見学 大森曹玄老師道場(坐禅と講話) — 立正佼成会大聖堂 —

— 東京カテドラル聖マリア大聖堂 — イスラム寺院 (貸切バスにて見学)

〔第5回〕2月8日(火)第4回例会 於都立府中西高

1) 公開授業

「内村鑑三について」 都立府中西高 新井 清氏

2) 研究報告 「イギリスの中等学校における道徳教育について」

都立保谷高等学校長 吉田道雄氏

3) 講演

「イエスと現代」 東京工業大学教授 八木誠一氏

Ⅲ 特別分科会 将来の「倫理・社会」— 教育課程審議会の経過をふまえて —

研究経過報告

文部省教課審の昨年度における経過は、10月6日「教育課程の改善について」（審議のまとめ）が発表され、12月18日永井文相に答申された。この間の教課審の動向に注目しながら、本特別分科会は以下のような活動を展開した。

1. 都倫研総会（5.1.5.28）に、昨年度特別分科会の経過報告とともに、教育課程改善をめぐる諸問題につき問題提起を行い、共同協議を行う。
2. 全倫研夏季大会における全体協議の結果をうけて、全倫研事務局とともに協議し、「高等学校の『倫理・社会』存置と道徳教育の充実に関する要望書」の作成に協力する。

3. 第1回分科会（5.1.1.4）於大森高校 出席14名

中村義之前会長（教課審委員）よりの報告、御厨三田高校教頭より協力者会議報告を承け、「審議のまとめ」を検討の結果、次のような認識に達した。

i) 必修の「社会」— ねらいとして：— ①良識ある公民としての基礎的な教養 ②自己探究を深めること ③自然愛、人間愛 ④日本文化についての認識 ⑤国際社会に生きる現代の日本人としての在り方

内容について：— ①人間の生き方に関する倫理的な内容 ②現代社会の政治や経済に関する内容のほか、例えば、③人間と環境 ④現代社会と科学技術 ⑤日本の文化と伝統などにかかわる内容を効果的に取り入れる工夫をし、広い視野に立って社会についての考え方や学び方などの基礎が習得できるように配慮する。（以上「審議のまとめ」より整理）

ii) 「現行の『倫理・社会』及び『政治・教済』の内容を中心として、中学校の社会科の内容や他の科目との関連を考慮しながら、新しい広領域的な科目を設け、全員に履修させる方向で検討する」と、「中間まとめ」に述べら

れており、「審議のまとめ」もこれと同一の線に沿っている。

iii) 選択「倫理」は、大学受験体制の強い今日の状況では、選択する生徒は極めて少なく、実際には履修されずに終わるものと予想される。

iv) したがって、必修「社会」の中に、高校における道德教育の中核を考えねばならない。

v) 必修「社会」は、5科目の寄せ集めではなく、必修科目としての新しいいわば学際的な内容が予想されてくる。

4. 第2回分科会(5.1.1.1.3) 於駒場高校 出席14名

第1回会合における認識の上に立って、「審議のまとめ」の趣旨をふまえて、必修「社会」の内容構成の試案を検討する。なお、「政・経」担当教諭の出席を得て、連帯した協議を行う。これまでに構想された内容構成案はつぎのようなものであった。

○A案(昨年度提出されたもの)

(1)青年期の課題 / (2)人間と自然 / (3)人間と社会(経済生活、日本の政治と国際社会) / (4)人間と歴史(人間と文化、伝統と日本人) / (5)人間とはなにか(生命と精神、感情と意志、宗教と人間、芸術と人間、科学と人間)

○B案

1.現代社会と人間 (1)現代社会の特色(民主主義と日本国憲法、日本の経済と社会福祉、国際関係と日本の役割) (2)現代文化の特色(文化の創造と継承、環境と人間、産業社会化と大衆社会、日本の伝統と文化の特色)
2.思索と人生 (1)青年と人生(青年期の課題、真理の探究) (2)人生の考え方と生き方(人生の指針、人生の基本的問題、現代に生きるわれわれの課題)

○C案

1.現代社会と人間 (1)現代社会の特徴と課題(政治的課題、経済的課題、国際社会における日本の課題) (2)現代文化の特徴(環境と文化、現代社

会と科学文明，日本文化とその伝統)

2現代社会と青年 (1)青年と人生 (青年期の課題，真理の探究) (2)思索と人生 (人間観の追求，ものの考え方の基本的問題，現代の倫理的課題)

OD案

1人間とはなにか (1)人間と自然 (2)人間と歴史 (3)人間と社会 (4)人間と文化

2現代とはなにか (1)日本の社会の現状と課題 (2)日本の政治現状と課題 (3)日本の経済の現状と課題 (4)日本の文化の現状と課題 (5)国際政治・経済・文化の現状と課題

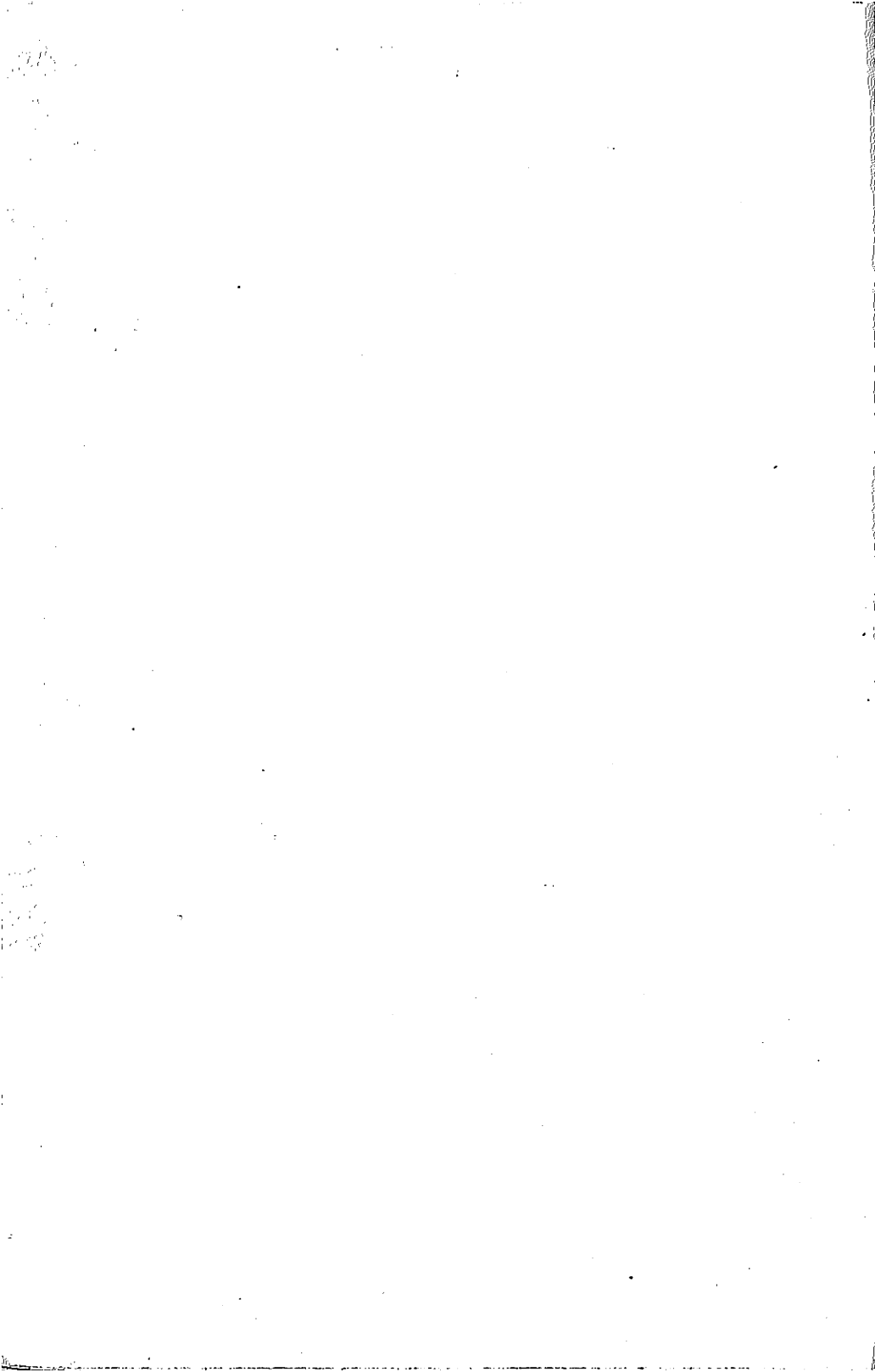
3. 青年期をどう生きるべきか (1)現代青年の特質 (2)自己形成の課題 (3)現代日本の思想的課題 (4)新しい文化 (学問・芸術・宗教) の創造

5. 全倫研秋季大会における全体協議「教育課程審議会の審議のまとめをうけて」に，本分科会の研究経過報告とともに問題提起を行う。

(吉沢 記)

第 1 分 科 会

〔 社 会 と 青 年 〕



第1分科会「社会と青年」

研究経過報告

「社会と青年」をテーマとする第1分科会、しばしば本題から逸脱し、倫社の本質論、あるいは倫社教師あり方等が問われたことはあったものの（勿論それはそれで意味があった。むしろこちらの方がタメになった？）終始、量的にも質的にも、活発で充実した論議が展開されました。世話人としては例会を研究会的雰囲気にするのではなく、徹底した論議の場にするのを（例え不毛なこともあるにせよ）常に念頭におき、運営をしてきました。

1. 経過

6月18日都倫研例会で世話人を決め発足した第1分科会は盛夏の沈黙のあと、9月14日（火）教育会館13名参加、10月7日（木）都立駒場12名参加、11月9日（火）都立墨田川12名参加、12月10日（金）品川労政19名参加、1月14日（金）うずら荘17名参加、と転々と場所をかえながら5回の例会をもってきました。

○6月の都倫研例会 ここで生徒の意識、実態調査を1分科会として実施しようということが提起。

○9月例会 意識調査に関して、調査の形式、実施方法については一応タナアゲした上で、その必要性、意義、位置づけの問題論が展開されました。

（倫社の教師として何をすることも我々は高校生を知らなければならない、そのための方法の一つとして客観的な調査は意義をもつ、また、ひとつの分科会として“何かのこるもの。を実施してみるのもいいではないか。日々の接触で我々は生徒を知ることができる、客観的な調査など今さら必要ないし、逆に何かがぬけおちてしまったり、事実を歪曲してとらえてしまうおそれがある）結果として1分科会としては、“具体的な社会問題。を通して、高校生の社会観、価値観に関する意識調査をする、ということに決定。

また、倫社の授業において、対象をつきはなして分析する、つまり客観主義的なアプローチと「倫理」の問題、対立するものではないにしてもやはりとまどいを感じる、という事、「倫理」への違和感、そしてリアルに人間・社会をみる所から出発すべきだなどが話題となりました。

○10月例会 “社会と青年。というテーマからはなれて、Aさんの提案をうけ倫社の目的をどうおさえるか、ついて意見の交換。ここでは“人間、や「生き方」を対象とする科目だろうといった「共通点」を除いて、予想されていた相違点が明確にきぼりにされ、あらためてこの科目の難しさを知らされました。

また意識調査に関しては、実施の有無についての議論がむしかえされ、各自、それぞれの方法で生徒へアプローチする、とはなりましたが、分科会としてとりくむことはづいに見送りに決定。

○11月例会 前の例会で今回は「アンケート、作文、ふれあいその他いかなる方法にせよ我々が知ったところの、生徒の社会やできごとに対する関心や意見をとまかく出しあう」ことが確認されていましたが、それをうけてBさん、Cさんがまず口火をきります。Bさんは生徒が日常的に使っているゴトバ（例えば何でオレだけが注意されるんだ皆やっているじゃねえか等）に生徒がどう反応するか、をとっかかりにして意識にせまった実践例、またCさんは、チャップリンの「モダンタイムズ」のシーンの説明文を生徒に提示し、それぞれに対し“こんにもあてはまるか。を生徒に問うといった形の意識調査の例、ともに豊富な経験に裏打ちされた報告で、質問が集中しました。他に世話人の方から、現代高校生の社会的問題に対する無関心、あるいは意識の低下が報告。

自由討論に移り、「倫理的アプローチと社会科学的アプローチ」をめぐって、あるいは「事実」とは何か等の意見交換をくぐりぬけた後、分科会のテーマへむかって集約され、今後「マスコミの高校生に対する影響（その具体例、問題点など）」を話題として行く事を確認、一定の方向が打ちだされま

した。

○12月例会 19名参加と1分科会はじまって以来の盛況の下、「マスコミ」の高校生に対する影響・問題点をテーマに討論が展開しました。(討論に入る前にDさんから豊富なアンケート調査結果をもとに、生徒のTV、ラジオ、新聞などや、その内容に対する関心、あるいは影響の実態について報告)

マスコミを否定的にとらえる立場と、全面的に肯定ではないにせよ、むしろ利用して行くべきだ(批判力をつけながら)という立場の相違がはっきり出てきました。他に「深夜放送」をどうみるか、生徒と我々が接触する時のマスコミの「役割」などで意見が対立、しかし、「マスコミの力が大きいこと」に関してほぼ確認され「だとするならば、我々はどうあるべきか」について今後論議して行く事に決定。なお今の生徒は活字で育った我々と思の型が違うという認識のもと思いきって教材を視覚化した実践例(ホッブスの思想など)がEさんから出され、反響をよびました。

○1月例会 年を越してもエネルギーはおとろえず、論議は集約不可能になるほど文字通り「白熱」。Fさんに代表される、もはやマスコミから逃げていたのではだめ、影響のプラスマイナスを論じている時代ではなく、批判的なマナコを持ちながら、積極的に活用して行かなければという意見、Gさんに代表される、マスコミの悪影響ははかり知れないものがある、むしろ遮断させるべきだという意見が有り、このあたりを軸に論議が展開しました。会としては前者の立場の人が多かったようですが、いろいろな方から「マスコミに対する批判力を」「マスコミの対象化に全力を」といった意見が出されました。残り時間が少なくなった頃、倫社では「人間をこえた世界を求めなければ」という立場から、マスコミをどうとらえるかも、何を選択するかも、そもそも我々の立場＝「原点」が明確でないが無意味かつ不可能だ、という強い意見が出され、その「原点」をめぐる一部紛糾する事態も有りましたが、マスコミの圧倒的な影響を受けている現代高校生と日々接触してい

る我々のあり方が問われている、という事を暗黙のうちに再確認し散会しました。

2 課題（世話人の反省にかえて）

「いたいことを言う」がモットーの第1分科会、倫社の目的をどうとらえるか（倫社観）をめぐって、倫社の教師のあり方をめぐって、マスコミの影響と問題点をめぐって（その他にもいたるところで）鋭く論議が展開されました。しかし時間の制約と司会の不手際により、まだ十分に深化したとはいえません。またそもそも現代社会をどうとらえるのか、個々の社会問題をどうとらえるのかという観点が欠落していたように思えます。“社会と青年”がテーマなのに「倫理」や「生き方」に傾斜しすぎているという意見も有りました。

ところで、他分科会からの参加者等もふくめのべ73人が集まり、回を追うごとに白熱していったこの分科会、「これでよかったのかな」と今卒直に思っています。会として残されたものは何もないのです。議論を集約し高めで行くこと、あるいは会として何か実践すること……これらのことが世話人にはできませんでした。いたるところで火花がとびましたが、それが例えば私にとってどう生かされて行ったか、がわからないのです。より生産的な方向で、会のあり方・方針を規定し運営できなかつたものか、と思っています。もっとも論点、対立点が明確になった事に関して一定の意義を認めますが、

なお運営に関してはサロンの雰囲気を作るべく払拭させる方向で、連絡や宣伝、それに例会時の司会を行ないましたが、これは難しい問題でした。

ともあれこの大世帯の分科会、まごまごしている世話人をささえた方々、あるいはほぼ毎回出席されて会を盛りあげた何人かの方々に対し、また寛大なる研究部の方に対し感謝の念にたえません。1年間に難うございました。

（津田信一郎記）

チャップリンの「モダン・タイムス」と生徒の 「モダン・タイムス（現代）」観

都立両国高等学校 小平 克

◎ はじめに

「倫理・社会」という教科の眼目は、現代社会に生きる人間のあり方を考えることにあるとすると、現代社会とは何かということについて、おおよその理解をさせる必要があるが、このテーマを授業化することは大変困難である。第一に、現代特有の社会現象が、「政治・経済」の分野と深く結びついているので、そうした背景の理解なしにとり上げることには問題を感じるのであるが、現代社会を全体的な視野からとらえる社会認識は、生徒の個人的な体験を通して得ている社会認識と相当なズレがあるということ、また、説明が一般的・抽象的になるため、生徒の関心をひきつけることが難しいということもその理由である。現代社会の様々な問題を集約して、しかも生徒の関心をひきつけられる教材が見つければ、このテーマの授業化はかなりうまくいくと思うのであるが、それが仲々見つからないのである。

そうした苦慮のすえ、私は、チャップリンの「モダン・タイムス」が現代社会とは何かを考えさせる導入として使えるのではないかと考え、実際に映画を見て、ストーリーを文章化してもみた。しかし、ふんぎりがつかず、放棄していたのである。ところが、昨年10月4日、TBSで放映するということを知ったので、二年生全員に、「倫理・社会」の授業の一環として、できるだけ鑑賞するように伝達し、参考資料として、作成しておいた「モダン・タイムス」の解説とあらすじを記したプリントを配布した。

たまたま、私が所属した第一分科会で、生徒の社会意識を調査することになっていたので、この映画の感想を通して生徒の「モダン・タイムス（現代）」観を調べ、あわせて、チャップリンの「モダン・タイムス」が教材とし

て使えるかどうかを確かめたいと思った。

調査結果の概要は、11月の例会で発表し、先生方のご意見をうかがった。

◎ 調査について

調査は、まず、「モダン・タイムス」のなかで、とくに「現代」をイメージ化しているシーンを13箇所とりあげ、「現代」のイメージ化として今日もそのままではまると思いか、それとも、今日からみて時代のへだたりに感ずるか、を確かめてみた。(質問I)

各シーンについて、どのような文章化をしたのかということ、その回答結果については、別表をご覧頂きたいが、おおよその結果を報告する。

1番(警察による取締りが強まっている)、12番(貧富の差が拡大している)、2番(労働者・大衆は従順で盲目的である)、6番(労働者の人間性を無視した生産第一主義になっている)、といった項目に時代のへだたりに感ずる生徒が多かった。これは、「大衆社会的状況」といわれる現代社会の世相からみて不思議ではない。したがって、生徒は、高度資本主義としての今日の社会状態を、直観的ではあっても、かなりの確につかんでいるといってもいいのかもしれない。

しかし、例会では、青山高校の小川先生が、生徒は彼らの生活体験と密着している事柄に反応しているのではないか、という指摘をされた。たしかに1番(あわただしい時代)、9番(ストレス過剰が精神異常を生み出している)、8番(他人の不幸に冷淡で無関心になっている)、5番(監理体制がいきわたっている)、などの項目に、今日もそのままではまっているという意見が多いのは、各シーンについてのチャップリンの意味づけを理解することは、生徒の生活体験の範囲でしかできないのではないか、ということを物語るようにも思われる。この点は結果分析の困難な所である。

次に、この映画のラストは、チャーリーと少女が寄り添って、長い影をひきながら、広い野原の彼方につづく白い道を去っていくシーンであるが、これは、これからだんだん明るくなっていく朝のイメージなのか、だんだん暗

くなっていく夕方のイメージか、という質問である。(質問Ⅱ)

さらに、このラストシーンの印象を四つに分類し、映画「モダン・タイムス」に対する生徒の解釈と、生徒自身の「モダン・タイムス(現代)」に対する態度を確かめてみた。(質問Ⅲ)、分類の視点は下記の通りである。

1. 現代社会に対して前向きの姿勢で立ち向かり強い適応(同調)の姿勢。
2. 方向転換をして現代社会に順応しようとする弱い適応(同調)の姿勢。
3. 現代社会に背を向けて反逆しようとする強い不適応(離脱)の姿勢。
4. 現代社会に背を向けて逃避しようとする弱い不適応(離脱)の姿勢。

これらの質問に対する生徒の反応については別表を見て頂きたい。この結果についての私自身の感想は、チャップリンの「モダン・タイムス」についての私の解釈を含めて、多々あるが、紙面の都合で省かざるを得ない。

◎ まとめ

この調査をしてみて、予想通り、生徒の「モダン・タイムス(現代)」観が多様であることがわかった。このことを数量的に確かめ得たことは意味のないことではない。現代社会とは何かを授業でとり上げる際には、まず、このことをふまえる必要があるからである。さらに、多様な結果のなかから、ある程度の傾向性をひき出すことができたが、これも、現代社会とは何かを考えるうえで有用な資料になっている。したがって、チャップリンの「モダン・タイムス」を教材として使う場合には、高島高校の葦名先生からも示唆を頂いたが、この調査結果もあわせてとりあげた方がよいと思う。さらに授業の効果をねらうならば、チャップリンその人を現代史のなかに位置づけて説明しておく必要がある。ただし、映像を通して訴えるチャップリンの「モダン・タイムス(現代)」観を、文字化して教材として使うことは、いかんともし難い限界がある。望むらくは — わたくしは千載一遇のチャンスを見逃してしまったが — ビデオテープ化できれば、と思うのであるが……。

以上の報告は、第一分科会の先生方が、マスコミの影響を、主として、否定的にとらえていたので、積極的に活用した実例として、提示してみた。

質問I 「モダン・タイムス」で描かれるシーンについての説明文を読み、「モダン・タイムス（現代）のイメージ化として、今日もそのままあてはまると思うものに○印を、今日からみて時代のへだたりを感じさせると思うものに◎印をつけなさい。（テレビで見た人、330人）

	「モダン・タイムス」のシーンの説明文	人数	%	○印は約90%
1	タイトルのバックスクリーンに映し出される時計が示すように、現代は一秒きざみで動くあわたたしい時代である。	○ 180	55	○○○○○○ 肯定圧倒的
		○ 4	0	
		○ 146	44	
2	大工場へ向う労働者が羊の姿に変わり、突然わけもわからず走り出すシーンが示すように、労働者、および大衆は、従順であり、また、盲目的な存在である。	○ 82	25	○○○○○○ 肯定否定同程度
		○ 98	30	
		○ 150	45	
3	ベルトコンベヤーで運ばれてくる部品のネジをしめるだけの作業が示すように、今や人間自体が部品化され、歯車化されている。	○ 144	44	○○○○○○ 肯定多数
		○ 36	11	
		○ 150	45	
4	チャーリーの手が勝手に動いて、ひねる動作をしてしまうシーンが暗示しているように、人間が自動化し、機械化してきている。	○ 80	24	○○○○○ 肯定やや多い
		○ 50	15	
		○ 200	61	
5	巨大なテレビで、社内のすみずみまで監視されているシーンが示すように、職場あるいは社会の管理体制がいきわたってきている。	○ 104	31	○○○○○ 肯定多数
		○ 40	12	
		○ 186	56	
6	社長の指令一つでベルトコンベヤーが早くなったり遅くなったりするシーンが示すように、労働者の人間性を無視した生産第一主義になっている。	○ 103	31	○○○○○○○ 肯定否定同程度
		○ 83	25	
		○ 144	44	
7	チャーリーが「自動飲食器」の実験で散々を目に合うシーンにみられるように、今や人間は機械に従属し、機械に人間が動かされる状態になっている。	○ 107	32	○○○○○○○ 肯定多数
		○ 51	15	
		○ 172	52	
8	「自動飲食器」の実験で散々な目に合ったチャーリーを誰もなぐさめようとしないこととわかるように、現代の人間は、他人の不幸に全く冷淡で無関心になっている。	○ 129	39	○○○○○ 肯定多数
		○ 31	9	
		○ 170	52	

9	チャーリーが発狂して精神病院に運び込まれたシーンが示しているように、ストレス(刺激)の過剰が、精神異常やノローゼを生み出させている	○ 153 48 ○ 11 3 ○ 166 50	○○○○○○ 肯定圧倒的
10	トラックから落ちた危険表示旗をかついで走っていたチャーリーに群がり集まってきたシーンにみられるように、現代人は附和雷同しやすくになっている。	○ 96 29 ○ 77 23 ○ 157 48	○○○○○○ 肯定否定同程度
11	チャーリーをデモの煽動者と誤解して刑務所に放り込むなどちょっとしたことで警察官が出動するシーンが出てくるように、警察による取締りが強まっている。	○ 12 4 ○ 180 55 ○ 137 42	○○○○○○○ 否定圧倒的
12	チャーリーがデパートの夜番になって見たぜい沢な商品の山と、そこへ押し入ったかつての工場仲間との再会のシーンが暗示するように、貧富の差が拡大している。	○ 51 15 ○ 116 35 ○ 163 49	○○○○○○○ 否定多数
13	チャーリーと少女がスイートホームを夢みながら、それがつきつぎにこわされていくシーンが示すように、家庭の幸せを求めることすら難しくなっている。	○ 68 21 ○ 68 21 ○ 194 59	○○○○○ 肯定否定同程度

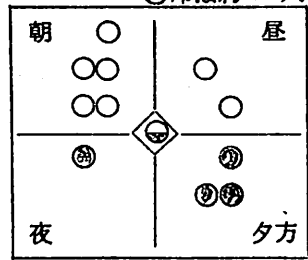
質問Ⅱ 「モダン・タイムス」のラストシーンは、チャーリーと少女が寄り添って、長い影をひきながら、広い野原の彼方につづく白い道を去っていくシーンであるが、これからだんだん明るくなっていく朝のイメージと感じた人は○印、これからだんだん暗くなっていく夕方のイメージと感じた人は◎印を記しなさい。

	イメージ	人数	%	○印は約 30人
1	朝のイメージだと思う	○ 264	80	○○○○○○○○○○
2	夕方のイメージだと思う	○ 54	16	○○
3	無解答	○ 12	4	

質問Ⅲ あなた自身の「モダン・タイムス(現代)」のイメージとしては、朝と夕方のどちらが適当か、どちらでもないという人は、さらに、昼、夜、わからない、を記しなさい。

○印は約 30 人

朝のイメージ	135人	40%		
どちらでもない	昼のイメージ		47人	14%
	わからない		29	9
	夜のイメージ		24	7
夕方のイメージ	91	27		



無回答 4

質問Ⅳ 次のラストシーンについての解説文のうち、自分の感想に一番近いものを選びなさい。

	ラストシーンについての解説文	人数	%
1	愛し合う少女を得たチャーリーは、「わが道」をいく勇気を得て、これからの人生の困難を予想させる「荒野」を出発していく。愛し合うことができればどんな困難をもり越えられる。観客のみなさんも、このチャーリーについて「わが道」を行こう、とよびかけている。	134	40
2	この機械文明に毒された都会生活のなかでは、二人は幸せに生きることはできない、ということがわかり、自然とともに生きる田舎の生活を求めて旅立っていった。機械化されることの少ない農村であれば、彼らは人間らしく生きることができるであろう。	39	12
3	チャーリーが現代社会に背を向けて歩き去っていくラストシーンは、現代社会からはじき出され、ついていくことのできない人々に限りない同情をよせることによって非人間的で夢も希望も持つことができない機械文明に対する拒否を訴えているのである。	76	23
4	観客に背を向けておどけた格好で歩いていく二人の後姿には孤独なかけがえを感じられる。二人が歩く白い道の行手には、山々が重なり合っていて、これからどんな困難があるかを予想させる。どこへ二人は行くのだろうか、愛し合うだけで生きていけるのだろうか。誰もわからない。	74	22

質問Ⅲ あなた自身の「モダン・タイムス（現代）」のイメージとしては、朝と夕方のどちらが適当か、どちらでもないという人は、さらに、昼、夜、わからない、を記しなさい。

（その他）とし、同じぐらいの字数の短文で「モダン・タイムス（現代）」に対する感想を述べなさい。

「その他」の例文、（文章は多少書き直している）

	人数	%
1	86	26
2	34	10
3	75	22
4	93	28
5	32	10

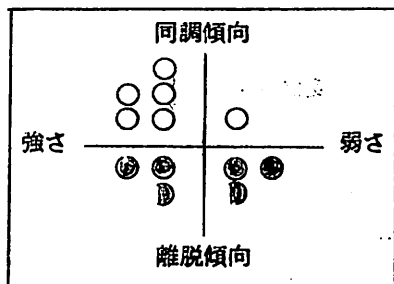
1. 現代は、日のあたる所と日の当たらない所があり、僕自身が日なたと日かげの境に立っているのです。日のあたる所だけを見れば前途は洋々と感じられ、日かげのところを見ると前途は限られていて暗く感じるので。だから僕自身の現代の見方はその時々で変わります。
（A組8番）

2. もう少し前の時代ならこのような悲劇がふつうに見られたのかもしれませんが、今の時代はこんなひどい状態ではないと思います。たしかに機械化されていますが、機械化の方向に流されてはいけなという考えが現代人の心に強まり、機械に隷属することが少なくなってきていると思います。
（C組44番）

3. 現代は本当に暮しにくい世の中である。しかし、現実から逃避してはいけなと思う。これからの社会を築くのは私達なのだから、次の世代に、これから生まれてくる人々に、よりよい社会をのこしてあげられるように、できるかぎりの努力をして、精一杯に生きることが大切だと思ふ。
（F組36番）

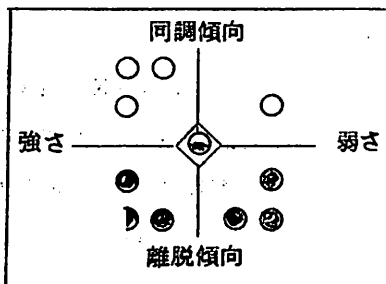
質問Ⅳ

生徒が感じた、チャップリンの「現代」に対する姿勢 ○印約30人



質問Ⅴ

生徒自身の「現代」に対する姿勢



広告と私たちの生活

都立青山高等学校 小川 一郎

1. このテーマをとりあげる理由

毎日配達される新聞には、ドッサリ広告がはさまれている。テレビから流れるコマーシャル・ソングは幼児まで口ずさむ。電車に乗って窓外に目をやればやたらに広告・看板が目につく。私たちは広告にとりまかれて生活している。私たちは商品を消費して生活しているが、その商品を買う動機にどれほど広告が影響を与えているのだろうか。私たちの生活自体が広告に左右されていることが意外に多いのではないだろうか。主体的に生活を営むためには商品の選択も主体的でなければならない。その意味で現代社会における広告のもつ意味・役割など考えてみたい。

2. 展 開

(1) マスメディアと広告の関係

ほとんどの商業的な新聞・雑誌は広告と記事内容とから構成され、たとえば新聞全紙面に対する広告比率は、1967年では38.0%であった。また……67年下期における全国日刊紙平均の収入内訳は、販売収入39.1%、広告収入50.2%、その他の営業収入3.3%となり、新聞事業の大部分（9割）は販売収入と広告収入によっていることが解る。さらに販売・広告収入構成比率を算出すると、販売43.4%に対して広告56.6%となる。……

放送の場合には、NHKの経営は主として受信料収入によっており、広告活動はいっさい行なわれていないが、全国にある民放ラジオ46社と民放テレビ46社は、その経営活動のための財源のほとんどすべてを広告収入に依存しているのである。……

ここから、コミュニケーション論的視点から広告を考察する場合に

無視することのできない、現代社会における広告がもっている二つの大きな特質が引き出されてくることになる。第1に広告収入がマス・メディアの活動を支えているという事実である。マス・コミ活動のなかで、広告の要素が占めている位置は大きい。……第2に、77.7%が4媒体(テレビ・ラジオ・新聞・雑誌)に支出されていることは、現代における広告活動が、マス・メディアを媒体とすることによって成立する側面を強くもっているという事情を示している。(千葉雄次郎編「マス・コミュニケーション要論」有斐閣双書・P 174 ~ P 176)

以上資料に見る通り、マス・コミに占める広告の位置は極めて大きい。経営自体が広告収入によって成り立ってといっても過言ではない。反面、広告自体もマス・コミによって成り立っている。まず、これらのことを頭の中に入れておく必要がある。

(2) 広告の意味

広告は死んだ自然を生きた自然へ、あるいは死んだ労働を生きた労働へ、転換させようとする商品所有者の意思表示にほかならない。商品所有者の意思が、広告というまなざしで、ぼくたちの生活空間を見つめ、そのいささかのほころびを見逃さずに侵入しようとする。広告は、ここで二重の機能をもつ。一つには、まなざしとして商品所有者の目をかくす機能。もう一つは、先兵としてぼくたち他者の生活空間に侵入する機能である。

ぼくたちが広告を見たときの抵抗には、この二面がある。一つには、侵入しようとするものへの抵抗。そしてもう一つには、広告というまなざしが商品自身の目を、つまりは商品所有者の目を隠蔽しているという虚飾への抵抗である。(稲葉三千雄著「現代マスコミ論、青木書店、P 111 ~ P 112」)

広告は大量生産と大量消費の結節点となっている。すなわち、それは大量に生産され、大量に販売され、大量に消費される商品の存在を前提としている。広告はこうした商品を販売するのに適した方法なのである。商品社会に住む私たちにとって、外はすべて商品で満ちている。私たち自身の内部さえ商品で満ちている、と考えなければならぬ。商品が私たちの生活に侵入しようとするその先兵をつとめるのが広告なのである。

(3) 広告は新しい生活の意味を指定する

××スープは単においしいだけでなく、その使用が、あたたかい家庭の雰囲気を作り出すことを示さねばならぬ。○○シャツは生地がよく、その他さまざまな効用をもつばかりでなく、それを着ることが現代のカッコよさにつながるものでなければならぬ。本来は、消費者が各自の生活の中で、商品に対して意味を付与すべきであった。新製品に対しては、消費者はとまどいながらも、まだこうした力を発揮することが可能である。しかし製品差別化が困難な商品については、消費者は彼の慣性によってそれを処理してしまふであろう。消費者にとっては、もともとはそれで十分なのである。しかし、商品を売る側にとっては、それでは大量生産の論理を貫徹することはむずかしい。ここから、売る側で、広告によって、商品が消費者の生活において演ずる意味を指定する必要が生じてくるのである。(千葉雄次郎編「マス・コミュニケーション要論」有斐閣双書、P 184)

広告が作る新しい意味は、あくまでも商品を売り込むためにある。生活の新しい興味は商品とともに、あるいは商品のために売り込まねばならないものであり、その商品が生活のなかに導入されることによって、はじめて充足されるものとして広告のなかに描かれていなければならぬのである。レジャーでさえも商品として売り込まれる。広告によって一日の行楽がセット

として売りに出され、社会で公認された有意義な一日とされる。このような社会環境に溶けこんでいる広告にとりまかれている私たちの生活はどのような特質をもっているのであろうか。広告によって新しい意味の生活が示されても、それらをすべて手に入れることはできない。それらをすべて手に入れなければ幸福になれないとするならば、私たちは欲求不満の状態にあるといえよう。私たちは、これらの環境にどのように対処したらよいのだろうか。

3. まとめ

現代社会に生きる私たちは、現代社会の特質をよく理解する必要がある。その学習にあたって適切な方法は、具体的な興味や関心を生徒自身が持つ問題を題材にすることだろう。広告は、適切な題材である。本のベストセラーづくりの名人といわれた神吉晴夫は、ベストセラーは偶然につくられるのではなく、つくり出すものだと言ったそうだが、広告の特質を見事に言い得ている。

ここでは、生徒に資料として引用した部分を読ませ、いろいろな感想を引き出した。

私たちが毎日の生活においてもつ欲望も、外からつくりだされる場合があることを気づかせたい。あまり性急に人間疎外について抽象的に説明するよりも、このような学習方法のほうが、自分たちの生活を見つめさせるにはよいであろう。このように、いくつかの具体的なものの学習から現代社会のしくみについて理解させるよう心がけている。「深夜放送」のもつ意味など、分科会で話題になったが、面白い題材の一つであると思う。

社会の退廃と民主主義の問題

都立王子工業高等学校 大木 洋

1. はじめに

我々を取り巻く社会環境は様々な新しい問題に直面しつつ、大きな変化を迎えているように見える。高度成長の終りと共に雇用不安、インフレが押し寄せている。所得の増大、ささやかな福祉の向上は一応人間を飢えから解放し、高学歴化等人間の文化水準を高めたが、最近の世相をみると一方では根深い退廃現象を見せている。政治の腐敗を頂点に麻薬、犯罪、嬰兒殺し、非行のローティーン化等枚挙につきない。もちろんこれらは日本ばかりに見られる現象でなく、資本主義の末期的症状の一つであるかもしれない。資本主義が巨大化すればするほど、組織の中では人間は無力になり疎外され、このはげ口として退廃は始まるのかもしれない。又性すら容易に商品化してしまふ営利第一主義の世相、金権政治の横行はこれに一層拍車をかけるのかもしれない。しかし、最近の一連の現象は日本の民主主義の未熟さが退廃現象の要因の一つとして加わっているのではないかという事を想起させる。一家心中で簡単に子供の生命を奪ってしまったたりする事一つを見ても、生命の尊重人間の尊厳等に於ての日本人の意識の未熟さを示しているのではないか。こういう民主主義の未熟さが、資本主義の末期的症状と結びついて道徳的危機と退廃を一層深刻化させているように思われる。何より退廃の最大の犠牲者は青年であり、明日を担う青年を直接取り扱い責任を持つ我々は、日本の民主主義の問題を放置しておく事はできない。

2. 民主主義と市民道徳

昨年暮の総選挙の結果は、注目されたロッキード汚職に関わる黒色、灰色高官が続々再選された。ここにも日本の民主主義の後進性があるとは多々指摘された。「ニクソンは逮捕されなかったが政治的生命を失った。田中は逮

捕されたが政治生命を保持している」とは一アメリカ人の指摘であるが、正にこの言葉は日本の民主主義の状況をよく指摘していると思う。今や日本の民主主義のレベルアップは我々の大きな課題である。この点で日本の民主主義の形成過程が相当問題となる。「基本的人権の問題についても、日本国憲法流にいえば、西欧において多年の努力によってかちとられたその成果だけをいわばあたえられたものとして享受しているのであって、それをみずからの努力でかちとったのではないといってよい。そこにはこの基本権がいかにか貴重であり、いかに不断の意識と努力によって守らなければならないかの真の意味の人権感覚は生じない。権利であるからには、契約によるにせよ、法によるにせよ、その基礎に普遍的なよりどころがなくてはならない。自己の利益や立場を守るためにも、つねにこれと対立する相手方の立場をも考慮して、普遍的な基礎に立つ相互諒解の努力を抛棄してはならないであろう」(1)ここに近代西欧民主主義思想に於ける新しい社会秩序と市民道德についての考え方の一つを知る事ができる。近代民主主義が「契約」という新しい秩序原理をもって登場した時、道德規範も又全くの価値転換をとげた。それは、身分相応に振まう事ではなく、自由・平等・生存の民主主義的な新しい秩序原理を守る事、これらを奪い破壊しおびやかそうとするものと闘う事が市民的道德となった。この根底には自由、平等、生存の民主主義的の新しい社会秩序は自分達がたたかいとってきたものであり、この秩序は自分達自身のものであり、自分達自身がこの秩序の形成者であり、担い手であるという厳しい自覚、市民意識がある。この市民意識こそ市民的道德を支えているものであり市民意識が弱いと、市民的道德も薄くなる。日本人は公共心がないとか、新憲法を始め制度的変革を行ったにかかわらず、A級戦犯を首相の座にすえて怪しまないとか奇怪な事態が生ずるのも、我国では自由・平等・生存の新しい秩序をたたかいとったという意識がうすいためではないか。現代日本の道德的危機と退廃は、資本主義的末期症状にもよるが、かかる日本人の市民意識の弱さが市民的道德の未確立となって表われ、これが退廃の影響を一層深

刻化させていると思われる。自分達自身が新しい市民的秩序の形成者であり、担い手であるという厳しい自覚こそ、外からこの秩序をおびやかそうとするものへの抵抗の原動力であろう。この厳しい自覚は、自らの権利についての明確な意識と自己主張と共に、他人の権利の尊重のうえになり立つ。この自他の権利の相互主張と相互尊重の上に新しい秩序原理としての「契約」は成り立つものであり、この権利の相互意識の上になつて市民的連帯が成立する。相互の権利の主張という事は日本的義理人情とも無縁であり、計算高いつながらりのようにも見えるが、相互の権利の尊重のうえに成り立つものであるから、弱者にたいする不正やごまかしをゆるさないものである。

我々は権利意識を明確にし、市民的道德を確立し民主主義的後進性を克服して行かねばならない。このプロセスをめぐって又かかる視点の設定自体をもめぐって種々論議のおこる分野とも思われる。

(1) 東大社研「基本的人権の研究」3 歴史 P. 73

3. 今後への課題

本分科会の討議に於て、篤見先生が特に強調された近代民主主義思想の形成過程に於けるキリスト教の影響についても、その伝統のない日本でキリスト教ぬきで果してどこまで真実の思想としての近代民主主義が理解できるのか。民主主義思想は、所有権を媒介とした特殊西欧近代の思想であり、所有権の否定の上に成り立つ社会主義に於ても普遍性はあるのか。抵抗権や自由権は国家や階級の消滅という共産主義社会へも解消し切れない問題であり、この意味で逆に現在の社会主義諸国に於ける基本権を問題にしよう。等種々の論議があり、この面で今後一層の解明が要求されており、又自分の課題でもある。ともかくはっきりしている事は、今日の我々の課題が近代民主主義と市民的道德の遺産を受け継ぎながら、これをいっそう民主主義的に徹底させる方向をもつものでなければならない、という事である。そのため、教育という実践の場で教室で職場で何をなさねばならないかが問われていると思う。

4. まとめにかえて

前述の如く民主主義とキリスト教の関係が本科会で討議されたが、その問題を整理して小論のまとめにかえたい。周知のように近代民主主義の思想は身分制の思想に代って平等の思想をその本旨としている。この点で大きな役割を果たしたのが「人はただ信仰によってのみ義認される。」とするルターの宗教改革の思想である。救済の必要条件として、身分も地位も富も権威も一切は否定され、唯信仰のみによるという事はいいかえれば人は信仰をもちうる限りに於て全て平等という事につながる。ルターの平等は神の前の平等であったがこれを「地上の平等にうつしかえようとするれば、体力知能判断力等全てに異なる人間が一体どういう意味で平等になるか。それは人間が人間として生きているという点に於てのみ平等という事になる。ここから全ての人が生きているという事実を認め、この事を尊重しなければならない。こうして生存権の思想が生まれたがこれを確立したのがトマス・ホブズである。生存権からはいくつかの基本権が導き出されるが、特に重要なのは基本権としての自由である。生存権を守るためにも、生命を危険にさらす程他人の思いのままにされないという意味での自由である。こうして平等生存自由という近代民主主義の諸原理はブルジョア革命のイデオロギーとなり、封建制、絶対主義を打倒した。更に近代民主主義は古い社会を破壊するのみでなく、それによって新しい社会を樹立せねばならなかったし、新しい社会に対して秩序の原理を提供しなければならなかった。道徳規範でいえば、目上の者へは従え、身分相応に行動せよという身分制的封建道徳に代って新しい市民的道徳を創出せねばならなかった。今や人間の平等をもととして新たな秩序原理を組み立てる必要があった。ここに於て登場するのが「契約」という考え方である。歴史的には「社会契約説」として体系づけられているが、この新しい秩序を守る事こそ、市民的秩序とされたという点は先に述べた通りである。

社会規範と遵法意識について

都立府中等高等学校 永上 肆朗

1. 主題設定の理由

高校生(中間少年)の飲酒・喫煙については、なぜか『青少年白書』(50年版)にも調査がない。教育現場にまかせられているのが実状ではなからうか。『現代の高校生像』(第一法規)P.91によるとT高校では学校内外での喫煙が1年で7%,3年では30%,飲酒にいたっては1年で24%,3年では約半数が経験者となっていることが報告されている。高校生は、おとなに対しては、公德心・秩序・公明正大などの社会的公共との価値系列を強く要求しているが、反面で個人的自律的価値系列が自分たちに重視されていない。また1972年の『世界青年意識調査』では、日本青年の特殊性が大きな反響をよんだが、その中で社会や学校への不満が異常な高率であることが示されている。また松原氏は、青年が個人の自由や権利義務、順法意識について無関心が無視型が多く、このズレを社会に求めていることをのべている。(『日本青年の意識構造』P134)これらはいずれも生徒指導上考えねばならない切実な問題であるが、私はこれまた倫社学習上の実践的課題であると思う。表記のテーマ設定はこのような実態をふまえなければ意味がない。そこで展開にあたっては、「法と道徳」を骨子として「現代と人間」および「近代の思想」のところでふれる必要がある。

2. 展開の概要

①社会集団の維持には、個々人の行動をしめす役割期待の全体を示す社会規範があること。これには法と道徳が習俗とともに代表的なものである。

②道徳は個人個人が義務や良心にもとづいて内面から遵守するもの。「汝なすべきがゆえになし能り」(道徳性)ーカント

③法(実定法)は、公権力によって服従強制をせまり、個人個人の逸脱を

防止しようとするもの。「汝なしうるがゆえになしうる」(合法性)

④法の外面性、道徳の内面性といわれるが、自然法の概念理念から、本来共通の構造領域を基底としている(法哲学)

⑤とくに現代においては、たとえば「無過失責任主義」のように、道徳上免れても公共の福祉を確保する立場から当然「法」の適用を免れ得ないことも多い。「法は最大限の道徳」(イエリネック)。他面、日本は法万能主義が支配的であるため、法の過大評価が個人のモラルを後退せしめ、市民道徳や公共心の欠如が問題にされ、いわゆるタテマエ主義が横行し易い。(軽犯罪法)。青年の意識も実はこのような日本風土と無関係ではない。

<検討資料>

① 法意識にみる日本人(S.48.2.6 朝日) 違反と知りながらあえて犯した例では、やはり道交法違反がトップで140人、次が列車や電車の「キセル」乗車36人、3位が「立ち小便」の24人で、その理由は「みんながやっているから」が約10%という……。林博士は日本人が「制度(きまり)については厳格でも運用には融通性を(大岡裁き)望んでいる」ことを明かし、「金と暇をかけて勝っても損」という裁判よりも示談を好む「まあまあ主義」が示されている。

② 市民のモラル 『酔っぱらい取締法』は「すべて国民は飲酒を強要する等の悪習を排除し、飲酒についての節度を保つように努めなければならない」(第2条)と規定する。私も個人的意見として飲酒を強要するのが悪習であることを認めるにやぶさかでない。しかしこのようなことが相互につつしむべき社会内部のモラルであって、国家法によって教えられ、強要されることではあるまい。それとも日本人は酒の飲み方一つに至るまで「おかみ」の指示を仰がねばならないほど、自律性のない情けない国民ということになるのであろうか。(渡辺洋三 S.41.6.30 朝日)

青年期の葛藤状態は、たんに特有の身体的・生理的な発達心理から説明されるべきものではなく、むしろ文明社会においてはより多く社会や文化構造

に根ざしている (M. ミード)。青年の主体性や自己同一性 (アイデンティティ) を考える上では多く日本人の通有性にかかわっているものと考えざるをえないであろう。昨年私がグループ研究で発表させた「道徳とは何か」のテーマで生徒が取り上げたものでは、国電のシルバー・シートにおける中年への怒りであったことは皮肉であった。「大人だってルールを守らないじゃないか。みんな平気で無視している」という発言には、卒直な若者の大人への不信がのぞかれた。そこで以下若干の比較文化論の立場に立つ労作を紹介して日本人の生き方を考えさせたい。

③ 人間平等主義 かつて私が米国に留学していたころ、職場から許されて留学生として、交換教授としてやってきた人びとが口をそろえて訴えていたのは、職場における妨害と疎外の事実であった。その口実になっているものは、人間平等主義と個性否定の原則である。まさに出る杭は打たれるで集団と同じレベルまで引きずりおろされる。……この類型化の力学は、日本人のコア・パーソナリティとして集団のあるところ存在する。(『日本人の行動様式』 講現新, 荒木博之 P. 81)

この類型志向的人間平等主義は、中根千枝氏いうところの「場」と「資格」という文脈で指摘した「プリミティブな人間平等主義」に通ずるものである。中根氏は、タテ社会に閉ざされている集団の中では、社会成員は、エモーショナルな全面参加が行われ、一体感が作られ集団としての強い機能を発揮するが、ソトに対してはヨソ者意識をもち、排他的で敵意が示されるとのべている。また森氏は『いかに生きるか』(講現新)の中でヨーロッパでは、個が確立しているが、日本人は「私が自分として独立していない。自分と別な人間がいることを忘れて、自分と同じ関係でしか他の人を見ない。しかも互いに一方が一方を保護し、一方が保護されている、お互いに甘え、甘えられという関係によりかかっています」P. 146 とのべ日本にはほんとうの社会がない。三人称が支配しない社会とも指摘している。

④ 内と外 ……これとは別に、個人的付き合いはよいが、自分と関係の

ない外の者に対してはそれこそ傍若無人のふるまいをするという場合もある。旅の恥は掻き棄てと云って、自分の住んでいるところは人目を憚って自重しているのに、見知らぬ土地に行くとなんげか勝手にふるまうというのも、同じことである。このような傾向は日本人一般の特徴であるとして、しばしば外国人に非難される場所である……。『甘えの構造』P. 39。

もちろんタテ社会の人間関係論にしても、甘えの構造論にしても、すべての社会構造や精神構造を一元的な原理によって解釈しようとするのは科学的一元論であるともいえるが、それなりに「個と集団」を考えさせる上での明確な問題点を示している。

3. 発展的まとめ

元来、わが国の倫理観は、家族道徳と国家道徳の二元的構造から成り立っており、市民社会の道徳観はふじゅうぶんである。民主主義の倫理はもと近代の市民社会を母胎として生まれたものである。上記資料は、これらの問題を分析こそすれ、解決の手がかりを与えるものではないかも知れない。西尾氏は『ヨーロッパの個人主義』の中で、西洋の倫理観を無媒介に、即自的に受け入れている日本人の安易さに懐疑と警告を行っている。お互いの国々が隣続きであったヨーロッパ諸国では早くから国家間の試練にさらされてきた。「自由」は「城郭の中の自由」なのだ。と。「日本人社会において、人間相互のつながりをなしている倫理の基盤が、いかに小集団内部の情緒的紐帯によるしかない。そこからは「個人」というものは出て来ない」(P. 144)これに対して日本は島国という恵まれた孤立ゆえに、対立やきびしさに欠けた。家族の甘えがストレートに社会に拡大されている。この点で日本の社会は寛大であるとも言えそうだ。しかし、今日、比較文化論をのりこえる努力が、つまりコミュニティ構想や努力で実を結びつゝあることも事実である。『青少年白書』では、考え方に一番強い影響を与えたもののうち、法律や公衆道徳に関しては学校の教師から37.3%で1位となっている。どのような形であれ、倫社教育の役割の重さには変らない。

小集団を考える

都立志村高等学校 木村正雄

〔主題設定の理由〕 最近、高校生の孤立化傾向が目立つ一方、クラブ活動に熱中していた生徒が急にクラブをやめる。同僚、先輩との関係がうまくいかないからだという。ホームルームでもフォーマルグループは勿論、インフォーマルグループでさえもふと、アウトプットしていく生徒が多い。友人グループもまた同様である。

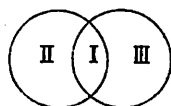
グループが人間形成に及ぼす影響は青年期にとっては殊さらに大きい。相互に求め合いながらも離れていく生徒。そのような個人と集団との関係を科学的に分析し、考えさせ理解させていくことは大切なことと思う。また、一般に大衆社会についての理解に重点がおかれ、生徒に最も身近な小集団については軽く扱われる傾向がある。態度や行動への影響・変容ばかりでなく人間回復のベースでもあるのがこの集団である。一方、この学習はクラブ活動やホームルーム活動の諸問題の基礎的理論を学習する場でもあると考える。教科で学んだ理論が特活で実践され、その実践によってまた、たしかな理論になっていく。すなわち、両者が補完的な関係となってはじめて生きた学習となる。また、小集団活動はさまざまな発想を生みやすい。硬直した社会から柔軟で人間的な社会をめざすためにもこの学習は欠かせないと考える。

- 〔指導目標〕
- (1)小集団とは何か。集団の特徴と意義を理解させる。
 - (2)小集団とパーソナリティとの関係を理解させる。
 - (3)小集団のコミュニケーション構造や役割構造、地位構造、感情構造を理解させる。
 - (4)小集団のモラル、凝集力、長短などを理解させる。
 - (5)自分たちが問題としていることを積極的に解決しようとする意欲を養なう。
 - (6)資料の蒐集、分析、整理などの技術を身につけさせる。

〔指導内容〕

1. 小集団を学ぶ意義 人間生活の最低限を支える、社会生活の単位、個人の原理に基づくもの
2. 小集団の定義 対面的関係にあること、成員間に相互関係が行なわれていること、成員間に個人的な印象や知覚を有することの三条件が必要。

3. 小集団とパーソナリティ (1)パーソナリティ構造の三領域は左の図の通
自我像 行動 一致する領域。Ⅱは自分ではそうだと思っても他人からはそうは見えない領域。Ⅲは自分には意識されないが他人には自分の行動を通じてよくわかる領域。



Ⅰの領域が大きくなってⅡⅢの領域が小さくなるほど、より正常な人間だということになる。Ⅰの領域を拡げるためにはⅢの領域を自然のうちに本人の自我像の中に取り入れさせる。そのためには親身になって自分の悩みを聞いてくれる人がいること。

(2)恐怖に基づく超自我

↓ 一 集団規範を身につける (同輩集団で、創造的活動を通して)

自発性に基づく超自我 ヒューマニテックな良心へと成熟する。

- (3)態度の変容 受容的態度で接し、民主的にコントロールする。

4. 小集団のコミュニケーション構造 「集団・組織・リーダーシップ」

P. 99 培風館

5. 小集団の構造

- (1)役割構造 { 環境への適応 ———— 象徴の享受化 — 経済的側面
目標達成への努力 ———— 利益の受益化 — 政治的側面
集団の統合 ———— 利益の組織化 — 社会統制的側面
緊張の処理と動機づけ — 象徴の統合化 — 教育的側面

- (2)地位構造: 完全連結から不完全連結に進むにつれてコンセンサスに達する時間も長くなる。

- (3)感情構造: ツシオメトリ、集団の深層心理

6. 集団の目標

(1)目標が明確である (2)成員のモチベーションが強い (3)成員のコミュニケーションがスムーズである (4)成員の意見が一致している (5)資源の入手が容易である

7. 集団のモラル

(1)仕事への満足 (2)仕事への意義の自覚 (3)集団への帰属意識 (4)集団の団結力

8. 集団の凝聚力

(1)保護、安全、愛情といった共通の個人的欲求が満足されている (2)情緒的結びつきが優勢である (3)理想や利害が共通している (4)平等と正義の雰囲気がある (5)象徴的な集団内儀礼および活動 (6)集団外部における共通の敵の存在

9. 小集団の長所と短所

- (1)長所 個人の喜び、驚き、悩みがみんなのものとなる。個人の考えが公共性のある確信に高められる。要求、満足が学習、行動の意欲をふるいたたせる。諸能力ばかりでなく、発想法までも自分のものとする能力。
- (2)短所 系統的知識が得られない。時間的不足、学習が不徹底になりやすい。グループ間の競争が激化する。責任の所在が不明確になる。

10. 小集団の変革

成員の自発性と能動性、インフォーマルな人間関係、許容的な人間関係

[指導方法]

- まず、インフォーマルなグループをつくらせ、それから、そのグループの研究テーマをきめさせる。
- 研究テーマを例示してから、そのテーマに関心のある生徒を集め、研究グループをつくらせることもできる。
- 研究グループそのものが集団の学習対象にもなる。そのため、一人ひとり

がはっきりとした役割を分担し、チームとして編成し、そこには民主的リーダーが存在し、それぞれの役割を交替する。

○テーマによっては性差を考える。

○上下関係や評価的態度はなくし、メンバー全員が自由に発言できる雰囲気をつくる。

○現在、クラブ活動やホームルーム活動、友人グループなどで問題になっている点を取りあげる。

○問題点がどこにあるかを予測し、資料の蒐集、検討、整理（評価）を行なう。

○その場合、自由な雰囲気の中で、KJ法等を用いて、よりよい発想が生まれるよう工夫する。

○資料の蒐集は録音テープによる取材、スライド、8ミリ映画等の自作自演、調査統計類、作文、新聞雑誌等から適切なものを精選する。

○研究発表は「教えることによって、より確実な理解に達する」ことが目的である。板書、模造紙で図示、OHP、スライド、8ミリ映画、録音テープなど立体的に発表を行なう。寸劇やロールプレイも積極的に行なう。

○教師はできるだけカウンセリング的態度で指導する。

〔まとめ〕

官僚制組織の内部における小集団の再発見という意味で取り上げてみたがなお、組織・リーダーシップについては今後、教材化につとめなくてはならないと思う。また、方法として「学習のコースの中に故意に失敗させたり、矛盾や葛藤に悩まされるような問題場面を設定して生徒自身に解決を迫るようなプロットを組立てる」ことが大切と考える。

倫社は暗記科目ではない。正に思索、思考の時間である。それはさまざまな発想ができるように自由な雰囲気を持ち続けたい。科学的分析のきびしさも忘れずに、少しでもそのような契機になれば僅かながら目的を果しつつあると思う。

「劇」と「必然性」

— 「生きがい」をめぐって —

都立板橋高等学校 小河 信 国

1. はじめに

現行の「倫・社」教科書で扱う「現代社会」は、おしなべて図式化され、鳥瞰図として描かれた社会の姿であり、ある場合にはほとんど理念と化している。無論、このような形で社会を把握することにはそれなりの十分な意味がある。何よりもそれは社会の全体像を与えてくれる。しかし、それは要するに眺められた全体像であり、それが生きた具体的なものとして把握されるためには、全体と部分の接点、言いかえれば部分にとり込まれた全体、即ち部分（個）が部分（個）として全体につながっていく回路に照明を当てることが不可欠のものとなる。生徒の背の高さ、眼の位置、心の射程距離から、具体的な生きた社会との回路の発見、洞察へと導く方途はないだろうか？ 本稿の関心の所在はそこに在る。

2. 「生きがい」への関心

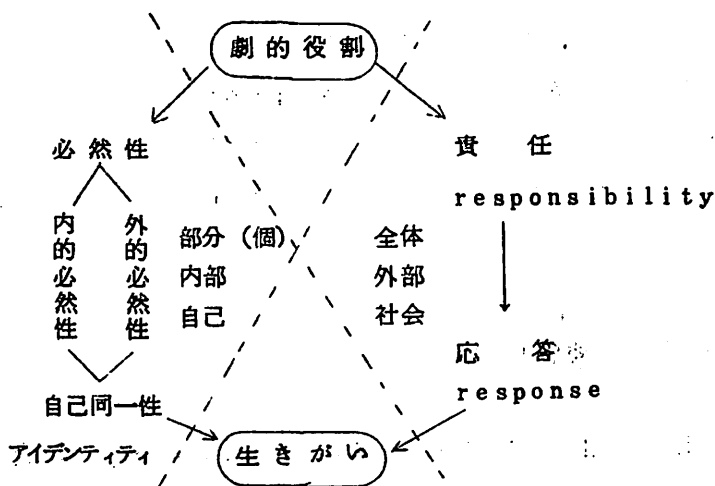
3年間の授業実践を通じて注目したことの一つは、今日の高校生達が「生きがい」の問題に極めてシャープな反応を示すということである。これは「三無主義」などと評されることと重ね合せると興味深い。実はそこにも「生きがい」への関心が実は裏返しの形で表現されているとも言える。誤解を恐れず言えば、それは私には<異常>とさえ感じられる。子を育て終えた親な

どではない、言わば<疾走する>速度で生きている筈の彼等が示す「生きがい」への関心は、何か特殊な今日の性格を表わしているように思われてならない。ところで、社会心理学的に、或いは人生論、エッセイ風に、現今社会に行われている多種多様の「生きがい論」を関連するものも含めて試みにリスト・アップしたならば恐らく汗牛充棟もただならぬものがある。ここでは実際に高校生達がかなりの反響を示したと思われる一つの視角から<生きがい>の問題を考えてみたい。

3. 「劇」と「必然性」

「生きがい」はどこからやって来るのであろう。無論、その人の「生きかた」から来るであろう。では、どんな「生きかた」から？ 問題提起として一人の演劇人の言葉を示そう。「生きがいは、必然性のうちに生きているという実感から生じる。その必然性を味あうこと、それが生きがいだ」（福田恒存『人間・この劇的なもの』以下、引用は同書のみ）それは更にこのように説明されよう。「私たちが欲するのは、事が起るべくして起っているということだ。そして、そのなかに登場して一定の役割をつとめ、なさねばならぬことをしているという実感だ。なにをしてもよく、なんでも出来る状態など、私たちは欲していない。ある役を演じなければならず、その役を投げれば、他に支障が生じ、時間が停滞する — ほしいのは、そういう実感だ。」このような問題提起をぶつけて、生徒達の反応をじっくりと見てみよう。討論させてもよい。教師になってはじめての授業で生徒達に寄せた作文を私は思い出す。課題は『小野田さんについて私はこう考える』だった。マス・コミ論調を犬よりも忠実になぞった無惨なものが多かったが、しかし「張りつめて生きた」その生存の在り方に、無邪気なそしてかけねのない羨望を表明したものがかなり多く、それが私の注目を惹いたのだった。

ここで一つの図式を提示してみたい。



生徒達には当然、疑問があろう。

「だが、ひとびとは、なぜそこまで必然性を身につけたがるか。いうまでもなく、それは自己確認のためである。私たちは、自己がそこに在ることの実感ほしいのだ。その自己の実在感は、自分が居るべくところに居るときに、はじめて得られる。いいかえれば、自己が外部の現実と過不足なく一致しているときに、あるいは自己表現が、自己の内部の心情と過不足なく一致しているときに、が、この二つは同じことを意味する。」

ここで漱石が苦悶した自我の問題に触れても良い。それはまさに自己と外部の不一致がひき起したものであり、序でにデカルト的コギトとの間に本質的な相違があり、それは日本の近代化そのものに深くかかわる問題であることも注意するとよい。そして漱石が何故、執拗に自己表現に向かったか、またビートルズやフォーク等も含めて、一般に行動としての自己表現の意味についても触れておきたい。

さて、「自己が外部の現実と過不足なく一致しているとき」とは、どんな時なのか？ それは図式において外的必然性と内的必然性との一一致、つまり

自己同一性の実現として現わされる。

ところで「私たちは二重に生きている。役者が舞台のうえで、つねにそうであるように。」「劇においては、つねに現在が躍動しながら、時間の進行にともない、過去と未来とを同時に明してゆく。現在のうちにすべてがある。いま起りつつあるものうちに、すでに起ったものと、これから起こるであろうものが。この二重性が劇における時間の法則である。」「現在は一瞬一瞬、あらゆる方向への可能性を蔵しながらも、依然としてそこには法則がある。劇の進行とともに推積されてきた現在は、それ自身を完全燃焼しなければならないのだ。」「人間存在そのものが、すでに二重性をもっているのだ。人間はただ生きることを欲しているのではない。生の豊かさを欲しているのではない。ひとは生きる。同時に、それを味わうこと、それを欲している。」

さて、「劇的役割」は必らず相応の対外的責任を担う。責任は英語で responsibilityだが、要するにこれは応答する能力 (response+ability) のことである。現実社会の中で一定の役割をひき受け、為さねばならぬことを為すことである。それは現実の排戦 (チャレンジ) に対して応答 (レスポンス) することでもある。そこに「生きがい」が実現される。

4. まとめ

こうしてみると、「生きがい」は、外部、全体たる社会と、内部、部分(個)たる自己をつないでいる重大な回路であると言える。それは一定の「劇的役割」を果たすことによって得られる。しかし、この役割は、よしんば外的必然性として自己にふりかかったかに見えても同時に、それが内的必然性としてとらえかえされぬ限り、言いかえれば、自発的積極的な生きる決意として再び選びとられない限り、〈生きがい〉を実現するものとなり得ないであろう。

< 附 記 >

紙数の関係で本稿では割愛したが、十分な奥行きと広がりを与えるためには、「劇」そのものの構造や、ギリシヤ悲劇や「悲劇の誕生」(ニーチェ)等にも触れることが不可欠であり、さもなくばわざわざ「劇的役割」を持出した意味が失われる。殊に、ヘーゲル、ニーチェ、マルクスを見てもわかるように西欧思想に<劇>の概念(ギリシヤ悲劇)が果たした影響と役割は決定的であると言える。しかし又、そのことが我々、日本人の人生論の中に、無差別に<劇>概念を導入することへの「ためらい」「反省」を生むことも事実である。たとえば宮城音弥氏の著書の一つが「日本人の生きがい」という書名を持っているのは、そういう民族的伝統的エトスの相違への深い配感から来ているのであろう。

又、引用した福田氏の著書(中公文庫)は、高校生の参考文献として使用することは主として次のような理由で無理かと思われるので一言しておく。

- a. 爾介不羈の密度の高い思索で、難解とは言えないが内容が意外に高度である。
- b. 舊世的啓蒙家として踏みとどまろうとする典型的知識人の苦渋と自ら呑んだ毒が吐露されていて、テキストの性格になじまない。

最後に、本稿への質疑、御教示、感想、批評を下記宛にお願い申し上げます。

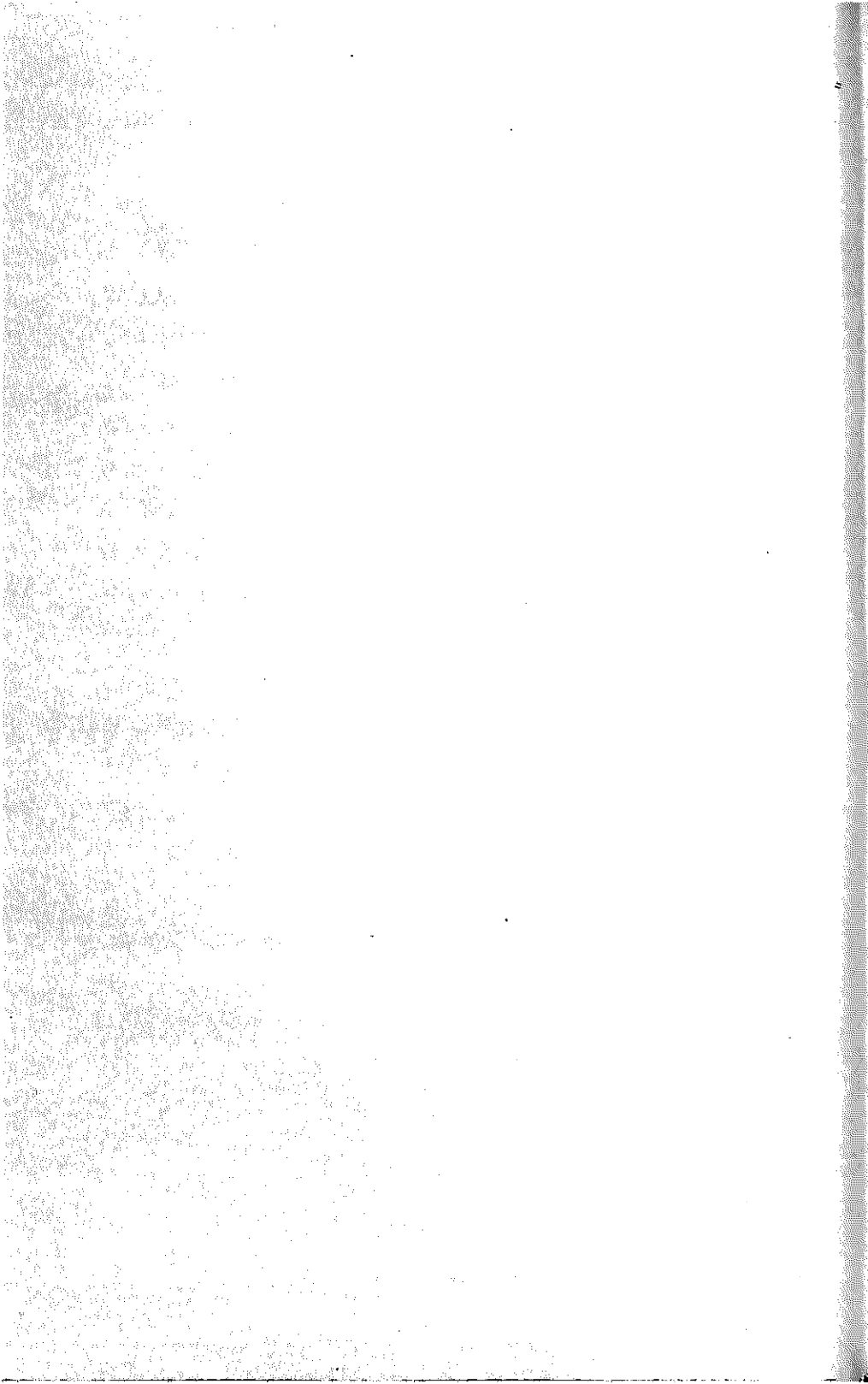
〒186

国立市東2-3-4

小河信国

第 2 分 科 会

〔 愛 ・ 芸 術 と 青 年 〕



第2分科会「愛・芸術と青年」

研究経過報告

「愛と青年」「芸術と青年」の二分科会を合併して発足したこの第二分科会は、メンバー14名であった。世話人が連絡を徹底させなかったことも手伝って集まりは良くなかったが、顔合せを含めて4回会合が持たれ、小粒ではあってもピリッとした会合が持てた。以下は経過報告である。かなりの部分を記憶に頼って書くことになるので、不十分さはお許し願いたい。

①顔合せ 6月18日に上野高校で今年度第1回の都倫研例会が行なわれたが、この際分科会毎に顔合せがあった。メンバー自己紹介、世話人決定、今後の活動方向について話しあわれた。この席で、既成のものにとらわれずに、倫・社で扱ってみよう、又は現に扱っている新しい教材を各自が持ち寄ってその検討を進めてみては、ということになり、具体的には、愛又は芸術に関する参考図書をメンバー各自が探してプリント一枚に内容をまとめ、夏休み中に世話人の方へ送るという形態を決めて散会した。この時の参加者は宮崎、坂本、菊入、鹿野の各先生方。

さて8月中に世話人（海野）の方へ集まったレポートは都合5枚。次回への準備もあり、これらをコピーしてメンバーへ送り、第2回目を迎える。

②9月24日 白鷗高校で分科会を持った。参加者は5名。この日は宮崎先生が「高村光太郎—その愛と美—」、徳久（寛）先生がカントの「美と崇高との感情性に関する考察」、それと海野が「高橋竹山」「棟方志功」の芸術論について発表し、それぞれについて意見交換が行なわれた。美というものが主観的なものでありながらもそこに普遍性を見出させるためにはカントの作品などは有効であるとか、海外の芸術ではなくて、もっと日本の土着の芸術芸能などにも生徒の眼を向けさせることがいいのではないか、芸術作品を觀賞しながらその人物の考え方、文章を追っていくことも面白いのではない

かなどの点が出てきた。次回は浅香先生の「ゲーテ論」を研究することで散会した。

③10月23日 同じく白鷺高校で2時半頃から6時頃迄長時間に渡ってゲーテの言葉を引用したプリントなども参考にして浅香先生の説明があり、意見交換へと移った。ゲーテなどは倫社の教科書では取り上げているのが少ない訳だが、内容から見てもっと取り上げて良い思想家ではないか。ゲーテの反理性主義、人間の感情に訴える立場ということから理性を見直して見るのがいいのでは、今の高校生には感激する機会が少ない。情感に訴え感激するものとしてゲーテの言葉を使えるのではないかなどや、教材化に当ってゲーテの箴言を生徒に示すのがいいのか、一冊の本を集中的に読ますのがいいのか、生徒が言葉を通して身近に感じ、自分の生き方の一つの素材にしてくれる方がいいのではないかなど々が話しあわれた。充実した会合であった。この日は小河、宮崎、浅香、徳久、坂本の各先生と海野が参加した。

④12月9日 この日も白鷺高校で開いた。当初の期日を変更したり、連絡が不十分であったためなどで小人数の集まり（4名）となった。この日は久しぶりに小笠原先生の参加があり、内容はかなり濃いものとなった。坂本先生が世阿弥の「花伝書」についてレポをし、芸道について、「花」とは一体何を意味するのか、「花は無」というのはいかなることかなどについて意見の交換がなされた。世阿弥などは、教科書で扱っているところはほとんどなく、又生徒にも理解させるためには、送り手の我々が、理解が深まっていなくてはならないが、こうした芸道の世界に興味、関心がわくには年齢が関係してくるのではなどということも話しの中に出た。私などはこの会においては専ら聞くことに終始したわけで、年齢、経験の相違ということに気づかせられた会合であった。会の後には「愛」というスナックに寄って第二部を行くなど毎回小人数ではあったが楽しい充実した分科会であった。

(海野省治記)

「ゲーテのことば ~ 愛と芸術について」

都立葛飾商業高等学校 浅香育弘

このテーマをとりあげる理由

現代の日本人は、一方で西欧の近代思想を吸収・継承しているが、他方で批判・超克していかなければならないという矛盾・多様性の中に生きている。現行倫社の教科書でも、「近代思想」はかなり重視され、しかも批判的に扱っているものより、憧憬をもって書かれているものの方が多い。

しかし石油ショック・公害問題・政治汚職等を契機に物質主義的幸福観にうかれていた日本人も、改めて西欧近代思想の根底をなす個人主義や合理主義の弊を思い知らされた筈である。高校生の中にも、このような問題の所在に気付く者が出たが、まだ利己主義・打算主義・悪平等主義等に慣らされ奪われている者が多い。また競争社会の中で、やる気十分の者がいる一方で、五無主義的傾向に墜ち入っていく者も少なくない。

このような現状の中で、ゲーテを取り上げるのは彼が近代ルネサンス期の人々が理想とした全人（Ganz Mensch—人間のあらゆる能力を最高度に発揮した人）をまさに体現した人であり、時代を反映した人であると同時に、利己的個人主義や理性主義におぼえ、過信した近代人をきびしく批判し、近代を超克した人であり、近代がもたらした混乱と困難に悩む現代の高校生にも大きな示唆と光明を与えてくれる人であると思うからである。

倫社の現行指導要領に「人生における芸術の価値」を教えるべきことがあげられながら、今の倫社教育で一番欠けているのがこの分野だと思う。そして現行倫社の教科書中ゲーテを取り上げている本がいかにも少なく至極残念である。こゝ数年、私は年間5~6人の思想家を重点的に取り上げ、その1人として「人間について~ゲーテのことば」（教養文庫）を資料にゲーテを扱っているのは、せめてもその穴埋めとしたいからである。

1. ゲーテの芸術観

○美は知に走る心に生命とあたたかさを与えてくれる（教養文庫本P. 54）

歌石の言葉に「智にはたれば角が立つ」というのがあるがゲーテのこのことばは☆（「理知は結局自然にはとどかない」（P. 60）と共に）人間の主知主義的・理性主義的生き方の偏向性つまり理性的生き方こそ最高であると思ひ込み、傾きがちな人間の誤り、それがもたらす危険と欠陥を指摘すると共に、そうした偏向性に救いを与えてくれるのが美を求める心・美に感動する心であり、それによって人間は生き生きとした息吹き（生命のリズム）と人間的情味・暖か味をもつことができると指摘し、人生における芸術の意義・価値を強調しているといえよう。自然環境が次々と破壊され、人間の心までが益々潤いを失っていく現状を省りみる時、この言葉が痛く感じられると共に、救いと示唆を与えてくれるように思われる。

○私たちは自然のただ中で生活しながら自然を知らない。（P. 8）

人間は理屈・理性では自然の真姿・人間の自然を解することはできない。ゲーテは理知や意志にわずらわされず、古代人のように自由で純な心情をもちえたからこそ、自然の生命を生き生きと感得しえたのだろう。宣長が日本の古典に見出し強調した“もののあわれを知る心”にも通じようが、われわれもゲーテのようにナイーブでゆたかな感受性、暖かな愛情をもって自然に接していけば、もっともっと自然の美にふれられるのではないかと教えられる。

そして「あらゆる芸術にとって自然は汲みつくせない泉」（P. 133）であり、「芸術は第二の自然」（P. 132）なのである。ゲーテは自ら多くの詩・戯曲等を書いた他、広く芸術全般を愛好した人だった。そして偉大なものについてまでも新鮮な興味・関心を持続けることが若さを失なわぬ秘訣だとし、（P. 211）、そして人にもよきもの・最善のものを求めよとすすめ（P. 143・186）、日常生活の中で一つのよき習慣・一つの芸術を身につけるようすすめている（P. 186・201）のも大変参考になる。

2 ゲーテ ~ 愛について

○自然の極地は愛である。愛によってのみ、人は自然に近づくことができる。(P.15)

○私たちをつねに結びつけるものはなにか — 愛。(P.43)

○いつも変らなくてこそ本当の愛だ。(P.46)

○ひとりの人を愛する心はどんな人をも憎むことができません。(P.50)

ゲーテは深く自然を愛し、人間を愛し、芸術そして自然科学の研究を愛した。すべて生あるものは — 自然も(小鳥も花も)人間も愛によってのみはぐくまれる。そういう意味で自然の極地は愛である。また愛なくして自然の神秘や美に近づくことはできない。逆にいえば、生あるものをはぐくむことによって愛は育っていく。エゴの殻に閉じ込まれたままだったら、人間は孤独でバラバラのままに終ってしまう。人間がもし結び合えらしたら、愛の心をもって接する他ない。しかしその愛は利己心や憎しみと背中合せの愛であってはならない。それは仏教でいう愛染・愛欲・盲愛・執愛と同じであろう。真に愛することを知った人は、どんな人をも憎むことができなくなる。人でも花でも小鳥でもすべてを愛することのできる人となる。そして気まぐれの身勝手になく、いつも変わらない愛をもちえてこそ(東洋の仁や慈悲に通じるような)、本当の愛であることをゲーテはうたいあげている。

若き日に「ウエルテルの悩み」を書き、70過ぎて若きウルリーケを恋し、「マリエンバード・エレジー」を書き、更に「ファスト」に反映させたゲーテは、生涯において多くの女性を愛し、恋の遍歴者の如く思われがちである。しかしその時その時相手に純な心を捧げたゲーテにドンファン的ないや味は感じられない。むしろ晩年、「ファスト」の終りの方で、「なるほどこの馬鹿さは容易なものではない」(第2部、11842行)として、ギリシヤ的なエロスも、キリスト教な愛をも否定し、超越していることこそ貴重であり、注目すべきであろう。

ま と め

この本（関泰祐訳編）の編者もいっているように、ゲーテのような高い知性と、深い直観と、あたたかい心情と、高貴な道義心とを一身にかねそなえた偉大な人間が、80年の生涯の経験や観察からのべた言葉一つ一つが深い見識と知恵を蔵し、珠玉のような美しさをもっている。

それは哲学者・宗教者・社会学者とまと違った角度から「人間とはなにか」「人間はどうあればいいか」の問題について、鋭いユニークな発言をしている。われわれは謙虚にそれらの言葉に耳を傾け、その感動を生徒に伝える義務があると思う。

そして「頭がすべてだと考える人間のあわれさよ」（P.205）等人間のあり方について、その他美や愛についてのべたゲーテの言葉は、今の高校生にも入りやすく、わかりやすく、魂にふれるものをもっているようだ。

また「古典的なものは健康、ローマン的なものは病的」（P.142）とした彼は、時代を超越してわれわれに語りかけてくれる。人それぞれ好みが違うから強制するつもりはないが、私などには30才前後で死んだイエスより、80才まで生き人生経験豊かな、そしてただ経験が豊かというのでなく、生涯真実を求め、人間の本当のあり方がわかったと思われるゲーテの方が、はるかに人間的に深みがあり、興味があるように思われる。孔子が「徳に拠り仁に依り芸に由る」つまり人間の真（徳・仁—真のヒューマニズムの体現）を通して六芸（礼楽射御書教—道徳・芸術・技術・スポーツ・文学・科学等）が正しく発揮されることを強調したように、「真実を愛し真実を感じ」ゲーテもただ天性の詩人的資質を存分に発揮したというのでなく、人間としてのWharhait（真実・人間形成）があり、それに裏打されて始めてDichtung（詩・創作）の向上・完成が、また「二つの魂」つまり「心情」と「精神」の類まれな調和があったことを見のがしてはならないと思う。「地上の子の最高の幸福は人格である」（P.206）

一人でも多くの生徒がゲーテを学ぶようになることを期待したい。

「ドラクロワの日記」(二見書房)

一画家の魂の記録

都立小金井工業高等学校 平 沼 千 秋

1. このテーマをとりあげる理由

ドラクロワは1798年から1863年までの65年の生涯を芸術に捧げたフランスの画家である。10才にならないうちからルーブル美術館に出かけてルーベンスやティツィアーノらの作品にふれ、深く感動して自分も画家になろうと思ひ、その後死ぬまでの実に60年近くを衰えることのない芸術への探究心と情熱を持ち続けて生きた。この日記には絵画にかける驚くべき情熱と自制心と青春の悩みがくり返し書かれている。野性的な性格、芸術に打ち込むための孤独志向などありながら、社交人でもあるため交友に多くの時間をとられる矛盾と、それに伴う困惑や喜び、女性に対して内気なために、窓の下をうろつくだけで愛を打明けることもできなかつたり、嫉妬に苦しんだり、女性で悩むよりそのエネルギーを芸術に注ぐべきだと何度も決意したり……この日記には、天才といわれた人のとても人間的な側面がみられる。読む者に、芸術とは何か、芸術活動のきびしさについて、また芸術活動にひかれる魂について、考えさせるものがあり、さらに、現に芸術をめざす青年には励ましとなるだろう。また同時代の芸術家、ジュリコー、ボードレール、ジョルジュ・サンド、ショパンらとの交流の様子も興味ある者には面白く、ドラクロワがなかなかの思想家、芸術論者であることをうかがわせる。

2. 日記の抜粋

◎美と効用の区別 「自然はしばしば目的なくその豪華な偉観を展開するし、またしばしば自然の効用を説く徒党が浪費と称する程の華美をもって自己の姿を現わす。自然は人類の生存に必要な野菜には気をかけず、かえって野の草花や、森の草木に一層の美観を与えて喜悅しているかのようである。もしも『効用』が自然における首位を占めるべきものであるとしたら、栄養にな

る野菜の方が、ただ美しいというよりほかに取柄のないバラよりも、ずっと魅力があるはずではなからうか。それに、神の祭壇を飾るのに野菜を用いなくて、無用の美しい花を求めるのはどうい理由だろうか」

◎ 想像力と芸術的衝動 「私のうちには何かがあって、それはしばしば肉体よりも強く、また元気を回復させる。内なる影響をまるで受けない人もあるが、私にはそれがほかの人よりずっと強いらしい。私はそれなしでは死んでしまふだろう—と言ってもそれが私を消耗させるかもしれないのだ（これは言いまでもなく想像力のことで、私を支配し導くものである。）」

「おまえはまちがっている。おまえの空想がおまえを狂わせる。—音楽が私に偉大な空想をふきこむことがよくある。私は音楽を聞いていると非常な制作欲を感じる。残念ながら私には忍耐が欠けている。もし制作にあたって自分で承知している忍耐をいくらでも保持したら私は全く別人のようになるだろう。成果を生もうと私は性急に過ぎるのだ」（かつてドラクロワ展を見たとき、想像力が先走りすぎて技術が追いつかない感じのぎこちなさが、彼の作品の一部には確かにあると思ったことがある。）

◎ 美しいものとの出会いを大切にするための自制 「どんなものも平穏な心をもってやろう。立派な作品と美しい行為の前でしか情感を動かすまい。静かにあせらず仕事をやろう。汗が出そうになったり血がいらいらしはじめたと思ったら、すぐ用心して自制すること。だらしのない絵とは、だらしのない人の描いたものことだ」

「わざわざいなるかなノみながみな凡俗なものといつまでも交わっていて、どうして立派なものをつくれるだろう？ 偉大なるミケランジェロを思う。魂を養うような壮大にして峻厳な美によっておのれを養うこと。私はいつもばかげた気附らして勉強をそらしている。孤独を求めよ。」

◎ 仕事への集中を求めて 「孤独にかえり、しかもプラトンのように簡素な生活をする必要がある。いつも遊樂に走りやすく、いつも友達仲間がほしいのだが、どうしたらじっとひとつのことに熱中し続けることができるだろう

るか。私が孤独で味わったことの方がずっと強く、汚されていない。……私も一人でアトリエを守り、孤独に暮らす必要を十分認めるから、今からこれを習慣づけよう。」

「私の生涯の最も美しく最も尊い刹那が、その奥底には倦怠しかもたらさない気晴らしのなかに流れていく。……くだらないことを思いめぐらすのは相変わらずさかんで、無用の計画に自分の精力をまぎらす。数多い尊い考えも熟さずに、あいづく失策を早産し、それが私を食いつくし、奪っていく。敵は内心にあって、いたるところに手を広げている。」

「叡知は大部分の人にとって、ほとんど一生涯耕やさずに荒れたままになっている土地のようなものである。神はその被造物に対して、理性、想像、判断、構成などの能力を与えてくださったのに、ただ座食するだけでほとんど成果をあげずに生きているようにみえる下らない人々の群れや、少なくとも平々凡々な一群を見て、我々にはふしぎに思ふ権利がある。怠惰と無知、それから偶然に投げ入れられた境遇とが、ほとんど全ての人間を、その場の受動的機械にする。そして我々は、我々みずから手に入れることのできるものをめったにわきまえない。怠惰はいうまでもなく我々の才能を発展させる上での最大の敵である。だからこそ『汝自身を知れ』は、どんな社会においても根本的原理なのである。」

◎ 創造の苦しみ 「人間に与えられた省察力と想像力。これはいたましい贈りものである。人が才智を持つと力が持つまいが、自然はいっこう気にしない。人間が知恵をとぎ、思想とともにそれを表現する方法を進歩させて様々の要求を手に入れるや、たちまち自然が何事につけても彼に逆いはじめる。…しかし人間自身も、その本性である本能のままになる時には、彼もまた立派な作品を粉々に壊すことを企てはしないだろうか。…シジフォスが山の頂上まで石を転がして運ぶのを持っている復讐の神にも似た暴力が、ほとんど定期的にはこないだろうか。そして獣よりもすぐれた知恵を人間に与えた、何かわからないあるものが、この知恵そのもののために、人間を罰し

で喜んでいるようではないか。……その天分において、果敢において、不撓不屈において、最も偉大な者は、一般に最も迫害されるばかりでなく、彼みずからも天分と想像の重荷に疲れ、苦しめられるのである。……ほとんどすべての偉人は、ほかの人々よりもずっと屈折のある悲惨な生涯を送ったのだ」

◎ 絵と音楽（リズム） 「色彩は目の音楽である。……絵画には、色彩や光や影などの配合が招く一つの印象がある。それが絵画の音楽であり、そこに何が描かれているかを知る前に、たとえば大聖堂に入ったときのように、何が描かれているのかわからないほど画面から離れて見ていたまえ。すると君たちはじきにこの魔術的な調和に心を奪われてしまうだろう。」

3. まとめ

この種のものは、余計な解説をつけるよりも、よいものをじかに見たり読んだりする方がよいと思ひ、適当に小見出しをつけただけで主に抜粋だけさせたが、授業で使うときも原則としてそれでよいのではないかと思ひ。わかりにくいところは説明し、こちらの感想や感動した部分を伝え、この例の場合は画家であるからその作品も鑑賞できると一層よい。特にドラクロワは文学作品にテーマをとったものが多く、訴えるものがわかりやすくしかも感動的だ。彼の詩人的直観はすぐれていて、ファウストの場面を描いたものなど老ゲーテをして「私だってこんなに完全にこの場面を想像することは出来なかった」と言させたほどだ。「民衆を率いる自由の女神」という作品は、生徒には世界史の教科書でもおなじみであって近づきやすい。シェークスピアに題材をとったものにも深い味わいがあると思ひ。「オフェリアの死」という作品を始めて見たとき思わず画面に吸い寄せられて、これを描いた画家の心に思いを巡らせ、しばらくその絵の前を動けなかった記憶がある。「ハムレット」の一連の作品、オセロの「デステモーナ」なども興味深く、ギリシア悲劇に題材をとった「激怒のメデ」にも複雑な感動を呼びおこされた。

「美と崇高」

一カントの『美と崇高との感情性に関する観察』（1764）より一

都立白鷗高等学校 徳久 寛

I このテーマをとりあげる理由

- (1) 高校倫理社会では美や芸術についての考察が少ないので、ひとつの試みとしたい。
- (2) カントについては認識論や倫理学のみ強調されているが、本著により人間の幅は広く多様であることを知ってもらいたい。
- (3) 本著は小冊子で、入手しやすく、比較的読みやすいので、古典に親しむ練習としては手ごろである。

II 本論

(1) カント美学の方法

古来、今日まで数多くの芸術作品や、又人々の心に感動を与えるような自然の風物があった。我々が芸術的とよんだり美的と評価してきたものは過去にも、今日にも、又多数ある。それらの作品や情景の中から芸術や美の本質を探り出し、類型化し、芸術や美の究極に迫ろうと多くの先哲は試みてきたのである。

だが、同じ作品、同じ情景であっても、ある人々にはそれが喜びであるものが他の人々にはそう感じられないというようなことがよくあるから、又、美しいと感じられるものが、他の人々には無関心であったり、醜と感じられたりするから、喜びや美を感じさせるものそのものを探し出そうとしても仲々大変なことである。それよりも、それを美しいと感じたり、喜びと感じたりする人間の側の心を観察し、分析し、美や芸術の本質に迫ろうではないか。美や醜を感じさせる外界の対象物によってではなく、それを感じる人間の心のあり方、感情の示す特質を分析することによって美の問題を考えようとするのである。（注）「満足や嫌悪やいろいろの感じは、それを起す外物の

性状によるよりも、むしろ、それによって快、不快を感じさせられる各人に固有の感情性に基づくものである。」この固有の感情性に崇高の感情性と美の感情性との2種類がカントには区別されたのである。

(注) このように人間の美的感情の分析による美の考察方法は、ディルタイが『近代美学史』(岩波文庫)の中で述べている近代美学の第2期「美的印象の分析と18世紀美学の方法」の特徴である。

(2) 美と崇高

崇高の感情性とは「怖ろしさを伴なりもの」であり、又「強い印象で我々に迫るもの」である。例えば「雪を戴いて雲上にそびゆる連山のながめ」「荒れ狂ひ嵐の描写」「地獄の叙述」「聖い森林の中の槍の樹と寂靜たる影」等がそれであり、これらは「俗世間の蔑視」「永劫」「厳しゆく」等の感情を我々におこさせるものである。又、この崇高の感情はさらに3つの種類に区別される。ひろびろとした中央アジアの砂漠のように我々の心に深く戦慄の感情をおこさせ、怖ろしさや憂うつを伴なり「恐怖入りの崇高」とエジプトのピラミッドのように高く我々の心に感嘆をおこさせ、落ちついた嘆賞を伴なり「高貴さ」と聖ペテロ寺院、武器庫、宮城のように高い崇高の土台の上に美の飾りを伴なり「立派さ」とである。

一方、美の感情性は「楽しく微笑を誘うもの」「享樂するもの」である。「花多き草原の景色」「曲りくねった小川の流るる谷間を家畜の群が草を食いながら散在する光景」「極樂の記述」「花だん」「低い恒根」等がそれであり、これ等は、「旺盛な元気」「快活な感情」「輝く眼光」「愉快な顔つき」等を我々におこさせるものである。

「夜は崇高であり、昼は美である。崇高の感情を有するよりの性質の心意は、輝く星の光がたちこめる薄暗い夜のとばりを通して輝き、寂しい月が大空にかかるとき、夏の夜の平穩な静けさによって友情や現世の蔑視や永遠といふような高尚な感情に次第々々に引き込まれる。崇高に対する豊かな感情を有する人間の容貌は真摯であり、時として動ぜず、時として感動する。こ

れに対し、美の生氣はつつたる感情は、眼の中に輝くすがすがしさにより笑顔により、又しばしば空っ放しの陽気さによってあらわれる。」友情は崇高の感情をおこさせ、恋愛は美の特徴をもつ。悲劇は崇高であるが、喜劇は美である。

(3) 人間性にあらわれる美と崇高

崇高なタイプの人には悟性的であり、勇猛、偉人、慎重、誠実となって表われるが、彼等は高貴すぎて打ちとけにくいものである。美のタイプの人には機智に富み、諧謔、丁寧、行儀、洗練、鄭重となって表われ、彼等は愛をおこさせ、日常の交際にはよい社交家である。崇高の感情はそれだけでは永続させず、所々に美の感情が加わった方がよい。逆に美の感情も幾分崇高さが加わるとひきたつものである。例えば、若者の特徴は美であるが、幾分崇高さを持たないと気さに写るものである。美しさのない崇高なだけの若者は空想家か妄想家である。老人の特徴は崇高であるが、幾分美が加われれば親しみがでてくる。もっとも崇高さのない美だけの老人はいや味であるが。その性格が崇高なタイプの人でも、互いに他の要素を幾らかずつでも含んだ方がその性格がきわだつものである。これは他のことにもあてはまる。美である恋愛も、これに優しさや尊重の崇高さが加わると美の姿が一層引き立つだろうし、崇高である悲劇も美的要素のある喜劇的な面が加われれば、一層効果を表わすだろう。

(4) 道徳的氣質が表現される美と崇高

崇高な人は、普遍的道徳感情を行為の動機とする人で、彼の氣質は憂うつ質である。「憂うつ質の人は、すぐれて崇高に対する感情性をもっている。彼は頑固である。そのために彼は彼の感情を根本原理のもとに従属させ、この根本原理が普遍的であればある程、ますます彼の感情は事情に伴なって変化することが少ない。彼は他人の判断を気にせず自分自身の原則に従う。彼は流行の変化を冷淡にながめ、その虚飾を軽蔑する。彼は人間本性の尊厳についての氣高い感情をもつ。」

一方、美的な人は善性への情熱だけにたよる同情やその場限りの倫理性を保つための迎合性を行為の動機とする人で、彼の気質は多血質である。「多血質の心性を有する人は、美に対する感情性が支配している。多様は美である。故に彼は変化を好む。自己の内と自己の周囲とに喜びを求め、他人を面白がらせる。かくて彼はよき社交家である。彼は豊かな道徳的同情心をもつ。他人の楽しさが彼を喜ばせる。彼の道徳的感情は美しいが、根本原理が欠けている。直接に対象が彼におこす印象に依存している。彼は決して裁判官となることはない。法律は彼にとっては厳格すぎる。彼は涙で買収される。彼は親切への感情を有するが、正義の感情がない。」

(5) 男女両性にあらわれる美と崇高

女性の特徴は美であり、彼女に備わるその他の諸性質はすべて美を高めるためにのみある。彼女の有する優美さ、可愛らしさ、飾られたものに対する感情等の美的要素は生得的なものであり、彼女の関心は人間、特に男であり彼女の哲学は理屈ではなく、感ずることである。他方、男性の特徴は崇高であり、この崇高さの前に彼は謙遜を知り、この謙遜が他人に対する尊敬と公平な自己評価とを生み出す。そして大事なことは、「男は男として、女は女としてより完全になることであり、この両性間の特徴の相違が両性間の魅力となり両性間に欲情をおこさせる。結婚生活においては、結ばれた二人は、男子の悟性と女子の趣味とで生かされ、支配された、単一の精神的人格をなしているのである。」男女両性の特徴の相違は人類の全体的統一と繁栄、そしてその背後にある自然の大きな目的と秩序のためによるものであるわけである。

Ⅱ 指導上の留意点

本見解はひとつの立場であって、反論も予想されるので、生徒の見解を討論形式、レポート等で表明する場を取り入れる必要があると思われる。なお原典に即して項目ごとに発表させる方法もあるかと思われる。

板業における美

一 榎方志功「板極道」(中公文庫)

都立上野高等学校 海野省治

1. このテーマを取りあげる理由

榎方志功は昭和50年9月に亡った。彼については私は個人的な関心があり、テレビや作品を通して彼の人となりを想像し、好ましい人物という印象があった。今回第二分科会で美・愛について扱うことが決り、そこに参加してから志功についてやってみようと思い、「板極道」を読んだ。彼のエネルギッシュな製作風景はその独特の作風と共に私の眼からはなれない。人と対談をすれば話をするのが楽しくてしょうがない様子がテレビから伝わってくる。志功の生き方はどんなものであったか。彼の美意識は？彼の製作のころは？といったことを解明してみようというのがテーマ設定の理由である。尚ここでは、資料の引用を中心にすえて書いていくことにする。

2. 「板極道」

① 志功の芸術の下地

彼が絵を始めるようになったのは、青森、弘前などの凧の絵を見ていたからである。「そのころ(郷里の青森にいた少年時代)私が惹かれたものに凧の絵がありました。……いまでもこの凧絵が、からだの中に入っていてわたくしの絵や板面の魂を入れているのには、かわりありません」(P. 23~24) 又凧と並ぶもう一つのもの、それは「七夕祭のネブタでありました。……このネブタの色、これこそ絶対まじりけのないわたくしの色彩でもあります」(P. 24~25) ネブタについては、彼が好んでする話の一つである。芸術家からの影響という点ではゴッホである。ゴッホの話は夢中になって聞いたという。そして彼は「『ようし、日本のゴッホになる』、『ヨーシゴッホになる』」(P. 37) と決意する。彼が板面に自分の置きどころを見つけ

た時もゴッホであった。彼は言う「ひところわたくしの絵を赤一色に塗らせたゴッホが、このときも先達であったのです。ゴッホが発見し、高く評価して、讚美をおしまなかつた日本の木版画があるではないか。よし版画で、それを表現しよう。自分の全部をそのことに展開させよう。これこそ、現代の世界画壇に贈る一本の太い道だ。その橋を架けよう、日本木版の大橋を。わたくしは、こう心の中で叫喚しました。」(P.60) このようにして彼は版画の道を歩みはじめる。

彼の作風の下地を作ったもう一つのもの、それは宗教である。彼の家は禅宗であった。彼が仕事に徹することができたのも禅の故であろう。この禅宗ともう一つ真宗を彼は宗教としてあげている。真宗について彼は言う。「いままではただの、自力で来た世界をかけずりまわっていたのですが、その足が自然に他力の世界へ向けられ、富山という真宗王国なればこそ、このよりの大きな仏意の大きさに包まれていたのでした。真宗妙好の宗根、在家仏人として、身をもって阿弥陀仏に南無する道こそ、版画にも、すべてにも通ずる道だったのだ、ということを知られ始めました」(P.110~111)晩年の記録のところで彼は更にこのように言っている。「このごろわたくしは、宗教の在り方というもの、一 わたくしは禅宗ですから、禅の在り方というのからはいりまして、それからこんど、戦さのうち、真宗の在り方一 いわゆる禅は自力で真宗は他力なのですが、この他力の世界というものを非常にいただきました。いままでの自分もっている、一つの自力の世界、自分というものは、自分の力で仕事をするというようなことから、いや自分というものは小さいことだ、自分というものは、なんという無力のものか、………そういうようなことを、この真宗の教律から教わったような気がします」……(P.280~281)そして宗教と美との関係について「美と宗教、いいかえれば版画と宗教とは同律の道にあるということがわかってきたような気がします」(P.61)と語っている。彼の作品の宗教関係のものが多いのどころか、その考えから出ているといえる。

② 志功の美意識。板業のころ

宵森から始めて上京したときに見たギリシヤ彫刻のトルソーの前で彼は美についてこう感じた。「絵の勉強というものは、人のことばや情では得られません。あなた自身が先生になり、弟子になることです。絵は口を聞くものではありませんから、ところを聞かなくてはいけません。ことばはわたくし（トルソー）にも出来ませんが、美は、生きつづけています。美しさは無言ですが、美しい世界をいつも知らせています」（P.48）更に彼は「美というものは、たしかにみんなに分け与えているものだという」（P.258）ことを理解する。美というものの永遠、普遍性を語っているのではないだろうか。彼は又別の角度から、つまり美の鑑賞という角度からこのように語る。「……しかしこういう作品（外国のいい作品）の本当の良さがわかるからだをもたなくては、行っても意味がないと思います。…その絵の本当のものと、自分のもっている本当のものが融合して、その中から出てくる感情の密接さ、感情の美しさというものが拮がってくるところに、こういう絵の前にきたという喜び、悲しみが、驚ろきわくのではないでしょうか」

（P.260）美の鑑賞力は人間性の裏づけが必要だという論と言える。彼は勿論、美の評論家ではない。美を創り出す人である。そこからこんな言葉が生まれてくる。やや長い文であるが、引用してみる。「板画にはもう一歩、板画から生まれて進行する一つの真実というものがあるんじゃないかとわたくしは思います。……板画だけがもっている絶対界があるように思うのです。……板画でなくてはわいてこない、あふれてこない、命と懸命を、わたくしは望んで仕事していくのです。いや、仕事していくということよりも、わたくしは、『生んでいる』という仕事を願ひ、したいと思っているのです。自分の手とか、腕とか、からだを使うということよりも、板画がひとりりで板画をなして行く、……板画が板画を生んでいる、そういうありさまを、わたくしは非常に大切だと思ひます。そして、それにこそ、どの仕事よりも、より仕業への真実というものがあるのではないかと思ひます。わたくしは

……板画のことになると、鬼にもなり、蛇にもなり、仏にもなり、神にもなってもらいたいのです。わたくしの板画にそういうものを表現してもらいたいのです。自分でするのではなく、してもらいたいのです。ですから、わたくしがした仕事ではなく板画がした仕事になってもらいたいのです」(P. 126~7) 彼自身が作るのではなく、板画が仕事をするのだという言い方の中に、禅宗の「無」のころがあると言えるのではないだろうか。この「作るのではない」というとらえ方は「大島・沖縄への旅」にも出てくる。205頁を見ていただきたい。彼の姿勢は別言すれば「仕事が他愛のないもの」(P. 280)になりたいたとも言える。板画の天才と言ってしまえばそれ迄だが彼は多くのものを吸収し、多くの人の助力を得て美の世界を悟ったと言うことができる。

3. まとめ

一人の芸術家の生き方がこの一冊に集約されているという感じをこの本を読むと受ける。まだふれたい言葉も沢山あったのだが、紙面の関係で省略した。この作品については、私はまだ扱っていないので、展開をしてみたい問題点などについては書くことができない。でもこれをまとめていて、芸術関係のものを扱かうのは大変むずかしいのではないかと言う気がした。こうした著作を読む前に作品(板画)を見て、志功のことを知りたいという気持ちになることがまず必要だと思うからである。大原美術館のような常設の展示場が近くにあれば、そこへ生徒をまず連れていって、そして授業ということもできよう。でもここは東京だ。せいぜい写真を見せる程度になってしまう。原面でなければあの圧倒される雰囲気はつかめない。でも視点をかえて芸術論ではなくて一つの人生観としてこれを扱かうとすればこの作品においては人生や人間(志功自身、周囲の人々)を多く描いているので教材として使える。とも角これを扱かう場合には他の多くのものがそうであるように、本を持たせるか、多くのコピーを作って生徒に読ませ、考えさせることが授業形態となると思う。

高村光太郎 —その愛と美—

都立江北高等学校 官崎 宏一

1. このテーマをとりあげた理由

日本近代彫刻の確立者の一人、高村光太郎はまた「智恵子抄」の詩人としてもあまりに名高いが、その没後20年（智恵子没後38年）を記念して、高村光太郎芸術の軌跡を、妻智恵子との愛の世界まで織り込んだ総合的な、『高村光太郎展』が、昨年の夏、東京セントラル美術館で開催された。

私は小躍りして、会場に入ったのである。……………出品は彫刻作品をはじめ、油彩、デッサン、書のほかに、詩稿、著書、関係雑誌、装幀本、香筒、日記、周辺資料などと共に、晩年心を病んだ智恵子が、光太郎にだけ見せるためにつくったという門外不出の紙絵、「智恵子抄」ゆかりの地の写真パネルなど、まさにその愛と芸術の生涯を浮き彫りにする充実した内容であった。私はこの『光太郎展』を通して、いま一度彼の峻烈な芸術的生涯をふりかえってみたい気持ちになったのである。つよい愛のきづなで結ばれた智恵子とのその愛の絶唱は、いまなお私の心にやきついてはなれません。そこでなんとか「倫理・社会」のテーマ学習である『愛と芸術』の分科会個人研究にとりあげ、新鮮で生き生きとした授業展開にするためのひとつの例として試みたのである。

2. 長沼智恵子との宿命的な出会い

高村光太郎は明治16年（1883年）、高名な木彫家の父光雲の長男として、東京下谷区に生まれた。当時の光雲は生活苦にあえいでいたが、程なく東京美術学校教授となり、帝室技芸員となった。光太郎は幼時よりこの父に木彫を学び、「小学時代に、彫刻をやることは自然に決まっていた」といわれる。30年14才で東京美術学校予科に入学、翌年本科彫刻科に進んだ。35年、同卒業。引き続き研究科に進む。ロダンの彫刻を知り、傾倒。さら

に西洋画科にも学ぶ。40年、農商務省海外実業練習生として渡欧。42年に帰国後は“二代目光雲”の木彫家として期待されながらこれに背き、北原白秋らの「パンの会」などの耽美・退廃の世界に身を投じると共に、わが国最初の近代主義宣言とされる評論、「緑色の太陽」を「スバル」誌上に発表一躍注目を浴びる。だがヨーロッパで悟った、解放された芸術家として生きる願いと現実との矛盾に悩み、本気で詩を書き始めた。高村光太郎がはじめて智恵子に会ったのは、帰国後の孤独と傷心に襲われた明治44年の末ごろである。そこに智恵子が女子大先輩の柳八重の紹介で訪ねてきたのである。

翌年夏、大吠崎で偶然再会する。これは光太郎と智恵子との宿命的な出会いである。当時智恵子は両親を説得して東京に下宿し、太平洋画会研究所に通って油絵を学び、平塚らいてうらの女性解放運動に加わり、その雑誌『青箱』創刊号の表紙絵を描いている。智恵子26才・光太郎29才の出会いである。……………大正2年、秋の生活社展出品制作のため光太郎が滞在していた信州上高地に、あとから智恵子がひとりやってきて、2人は結ばれ、婚約をする。「山上の窓」などとゴシップされ翌大正3年結婚、光太郎32才・智恵子29才。光太郎の本郷駒込林町のアトリエが、2人だけの愛の巣と仕事場になる。いわゆる“光太郎・智恵子的愛”の日々の中から、彫塑、木彫などに不朽の傑作が生み出されたのである。

3. 『智恵子抄』の絶唱

しかし、不幸にも昭和4年、智恵子に精神異常の徴候が現れ、以後一進一退を続ける。昭和6年、光太郎が東北紀行取材ではじめて1カ月家を空けた留守に、智恵子の最初の精神分裂症状があらわれる。翌7年、常用の睡眠薬アダリンで自殺未遂、九段坂病院に入院。昭和8年、光太郎は智恵子を正式に入籍、いまは故郷に帰る家（昭和4年・長沼家が破産）もない妻をつれて裏磐梯から東北の温泉めぐりに出る。むろん智恵子の療養のためだったが、いわば法律上の「新婚旅行」であった。病状はしかし悪化していった。

昭和9年、千葉県九十九里浜に転地。「人間商売さりとやめて、もう天

然の向うへ行ってしまった智恵子」は、群れる千鳥や尾長鳥になったつもりで、「光太郎、智恵子」と叫びながら、無心にさまよう。その姿を追って、防風林の夕陽の中に立ちつくす光太郎。「千鳥と遊ぶ智恵子」「風にのる智恵子」の詩篇は、やはり絶唱というほかはない。

風にのる智恵子

狂った智恵子は口をきかない
ただ尾長や千鳥と相図する
防風林の丘つづき
いちめんの松の花粉は黄いろく流れ
五月晴の風に九十九里の浜はけむる
智恵子の浴衣が松にかくれ又あらはれ
白い砂には松露がある。
わたしは松露をひろひながら
ゆっくり智恵子のあとをおふ
尾長や千鳥が智恵子の友だち
もう人間であることをやめた智恵子に
恐ろしくきれいな朝の天空は
絶好の遊歩場 智恵子は飛ぶ

千鳥と遊ぶ智恵子

ちい、ちい、ちい
両手の貝を千鳥がねだる
智恵子はそれをばらばら投げる
群れ立つ千鳥が智恵子をよぶ
ちい、ちい、ちい
人間商売さらりとやめて
も天然の向うへ行ってしまった
た智恵子の
うしろ姿がぼつんと見える
二丁も離れた防風林の夕日の
中で
松の花粉をあびながら
私はいつまでも立ち尽す

昭和12年になって智恵子は、南品川セームス坂病院の15号室で見舞に来る光太郎を待ちながら独特の「紙絵」をつくり始める。そして2年間に、純粹無垢な紙絵作品千数百点をこの世に残し、天女のように永眠したのである。

4. 智恵子なきあとの光太郎

愛するひととの死別後、その心を『智恵子抄』に託し、出版されたのが昭

和16年8月であった。その年の12月8日、中国への侵略戦争を収拾しきれないまま、日本は真珠湾への奇襲攻撃から太平洋戦争へ突入する。いわば智恵子の死で空っぽになった明治16年生れの高村光太郎の現世に、いきなり戦争が居座るのである。昭和20年4月、智恵子との愛がしみつくアトリエが空襲で灰燼に帰し、多くの作品、資料が焼け、持ち出したのは、父からゆずられた彫刀と砥石だけであった。智恵子の紙絵だけは疎開して、焼亡をまぬがれたのであった。のち岩手県花巻の雪深い山小屋に、孤絶の隠棲生活を送る。そのきびしい孤境に、あらためて智恵子が生きつづける。

昭和28年になって十和田国立公園功労者顕彰記念碑のための裸婦像に心血を注いだ。翌年より、積年の肺結核が悪化し病臥。病状進み昭和31年にお彫刻制作のために上京中、中野の仮寓で74才の生涯を閉じたのである。

5. まとめ

「僕は前に道はない、僕の後ろに道は出来る……」詩集『道程』でうめくように叫んだ光太郎は、芸術においても愛においても、そのことばのままに類いまれな人生を実践したのであった。私は光太郎の次の言葉に感動をおぼえずにはいられなかった。『自分の作ったものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人があるといふ意識ほど、美術家にとって力となるものはない。作りたいたいのを必ず作り上げる潜力となるものはない。製作の結果は或は万人の為のものとなることがある。けれども製作するものの心はその一人の人にまでもらいたいだけで、既に一ぱいなのが常である。私はさういふ人を妻の智恵子に持ってみた。その智恵子が死んでしまった当座の空虚感はその故殆ど無の世界に等しかった。……』愛に生き、美に生きぬいた光太郎の人生を現代の高校生はどう受け入れるだろうか。中公文庫「日本の詩歌—高村光太郎」あるいは新潮文庫「智恵子抄」などを文献資料として、読んでみるのもテーマ学習の展開としてふさわしいのではないだろうか。「芸術家の生涯」を各自が選び、積極的な研究をするように進めることも興味をもてる方法ではないだろうか。愛と芸術についてのささやかな試みの一つである。

P. ゴーギャンにおける「愛と芸術」

私立駒込高等学校 鹿野貞一

〔1〕はじめに

まずことわっておかなければならないことは、この拙論は本年度主題＝テーマ学習を中心としたわかりやすい授業展開＝に直接応えるものではなく、その前段階の机上の作業報告にとどまるということである。未知なる「愛と芸術」の授業実践に挑戦するには、まず教師である私自身が「愛と芸術」の基本認識を確立しておく必要がある。

学習のねらいとしては、＜P. ゴーギャンの「野蛮人」的生き方を通して「文明と未開」、「芸術生活と社会生活」、「愛と性」を問い直してみる＞こととした。

〔2〕芸術生活と社会生活

◎妻と五人の子どもや、社会的経済的にも安定した株式仲買人としての生活を楽しんで、ゴーギャンは原始社会へと出発つ。^{たびだ}「私は一人の野蛮人として生きるために、パナマへ出かけて行くんだよ。絵の具と筆を持って出かけていって人間どもから遠く離れて新しい力を手に入れるんだ。」その手紙を受け取る妻メットは、「ボールの自分勝手なふるまいがいかに罪深いものかを思うたびに私の心は苦しい思いでいっぱいになります」と友人にその不満を告げる。理性・倫理・社会との協調を生活信条とする妻メットと、芸術の魅力にとりつかれた「野蛮」な夫ゴーギャンとの非和解的な緊張の悲劇的結合は、遠からず分解する運命にあった。

「私を非難する連中は芸術家というものの性質を知らないのだ。われわれは自分たちの義務を彼らに押しつけたりはしないのに、なぜ、あの連中は自分たちと同じ義務をわれわれに押しつけようとするのだろう。」(1)と彼は反駁する。このような主張の背景の一つに彼独特の芸術観、すなわち印象主義との対決から生じたサンテティスムがある。

◎「芸術とは一つの抽象作用である。」眼前の風景、事物をそのまま写すのではなく、それらを超えて伸びていこうとするおのれの視覚と観念の運動を具象化することが大事である。この考えは、遠近法にとらわれぬ大胆で装飾的な構図と、強くあざやかな色彩となって彼のカンヴァスに現われる。すなわち、絵画という手段でおのれの感性と観念を表出したいと欲求する彼にとっては、描くことが即、生きること、自己を解放することだったのである。

◎そのような芸術生活者であった彼が、繁雑な都市文明やそれに縛られている都会人たちに無関心であったのは、当然ともいえよう。しかしながら、あれだけ徹底した個人主義者ゴーギャンもやがて変わっていく。51歳で地方行政官との紛争を生じ、『ル・スーリール（微笑）』紙を刊行して原住民の擁護にあたるのである。抗争は彼の死の直前まで続き、最後は一憲兵の名譽毀損罪で徴役3ヶ月、罰金500フランを言い渡され、告訴中であった。死を目前にした彼の念頭には、〈原住民との永遠に続く愛と芸術の生活〉と同時に、〈野蛮な文明人に対する未開人の連合〉という、固と社会の統合的なイメージがあったように思えてならない。

◎芸術至上主義か芸術・社会統一主義かという従来の論争を、現代的に一般化すれば、「集団と個人」という問題として考察することができよう。近年政党や組合離れ、若者の組織ざらい、孤独と虚無は相当深刻である。こうした現代的状況を突破しうるカギは何か？「ゴーギャンに学べ」である。他の人間への深い共感、自己の欲求の徹底的追求を通じて、自己の客観化がなされていく過程でのみ可能となる。まず個人的欲求（芸術的欲求）。次に社会連帯的欲求、である。

『汝の行為が普遍的法則でありうる如く行為せよ』というカントの命題に対して、「愚の骨頂だよ」(2)と言いきるゴーギャン流の強さが現代人、とりわけ若者に欲しい。

〔3〕 性と愛

◎ゴージャンと生活を共にした女性は、文明人の妻メット以外に、タヒチのチチ、テフラ、ジャヴァ女アンナ、ブナアヴィア地方のパフラなどがあげられる。「利害の念に敏い」ヨーロッパ人と違って、「あらゆるタヒチの女たちにとっては、恋愛は損得如何にかかわらず、常に『恋愛』である程、生命的であり、本質的である。」「この目や口は、決して嘘をつくことができない」(3)ことを発見した彼は、偉大な未開地で思う存分愛と性を享受する。愛の永遠性などクソくrais、その瞬時の一回性的愛のみが真実なのだ、という彼の挑戦的な言辭が聞こえてくるようだ。

◎現代においても、パプアニューギニアの高地原住民の一夫多妻制を見よ。しかし、未開社会と文明社会とでは歴史社会的状況が違うというかもしれない。では単婚家族制といわれる文明社会の実態はどうであろうか。それは、ゴージャンにいわせれば「金銭ずくの売笑婦の親切」(4)の上に成り立つ「単婚家族」形態ではないのか。もしこの世から、バー・キャバレー・ストリップ劇場が一瞬のうちに消え去ったとしたら、停電がもたらすと同様の、一大パニック状況が生まれるであろうことは想像にかたくない。

◎もう一つの問題は、「先進」諸国における最近のハイティーンの動向である。アメリカでは、毎年百万人に近い未婚のティーンエイジャーが妊娠しているという。(5)日本でも総理府統計によれば、性交経験者は高三男子で14%、女子で7%に達していると報告されている。(6)こうした実態を前に、従来の道徳的・医学的な性教育はその存在理由を見失なう。私の下手な授業でさえ、「性と愛」の資料の大胆な呈示と海外性教育の紹介を行なった時(昨年春、二時間。プリント2枚)は、すべての生徒が真剣になって聞いたのである。

男女が全く対等な形で、その性的欲求を充足しうる社会状況に達するまでは、女性解放運動(基本的人権の未解決部分)として、今後も展開されてゆくであろう。我々教師は、性行為=不純異性行為というイドラを捨て、性は高校生=人間にとっても、すばらしいもの、という発想の転換が必要なので

はないだろうか。

◎家族と遠く離れた地にあって、娘アリーヌの死の知らせは、ゴーギャンに多大な打撃を与えた。その直後、妻メットにあてた手紙で彼はこういつている。「娘は私の母と同じアリーヌという名前だった。人はみなそれぞれ、自分流に愛するものだ。ある人にとっては、愛とは棺を前にして高まるものであり、他の人々にとっては……私は知らぬ。彼女の墓は遠いかなたで花に飾られているが、そんなものは見せかけだ。彼女の墓はここに、私のすぐそばにある。私の涙こそ、生きた花なのだ。」(7)そのショックから立ち直れないでいる彼はその後、遺作「われらどこから来たのか？何者なのか？どこへ行くのか？」を描き、ついに自殺未遂を行なう。我々はまちがっても彼を非人道主義者ときめつけてはならないだろう。

またゴーギャンの「野蛮人」的な性愛行動は、男女差別、障害者、部落民、朝鮮人問題等における「差別意識と人間愛」の問題を考えさせていく一導入、契機ともなろう。未開・文明を貫ぬく人間の普遍性とは何か。

〔4〕最後に

55歳の死ぬまで貧乏と偏見のもとで生きなければならなかったゴーギャンは、果して一生を樺にふってしまったのだろうか？そうではあるまい。かつて、金銭の鎖につながれた都市生活を呪い、「人々が太陽のもとで暮らし恋をする」原始生活を渴望し、現実にはそれを享受しえた彼こそ、この世の幸福者といえるのではないだろうか。

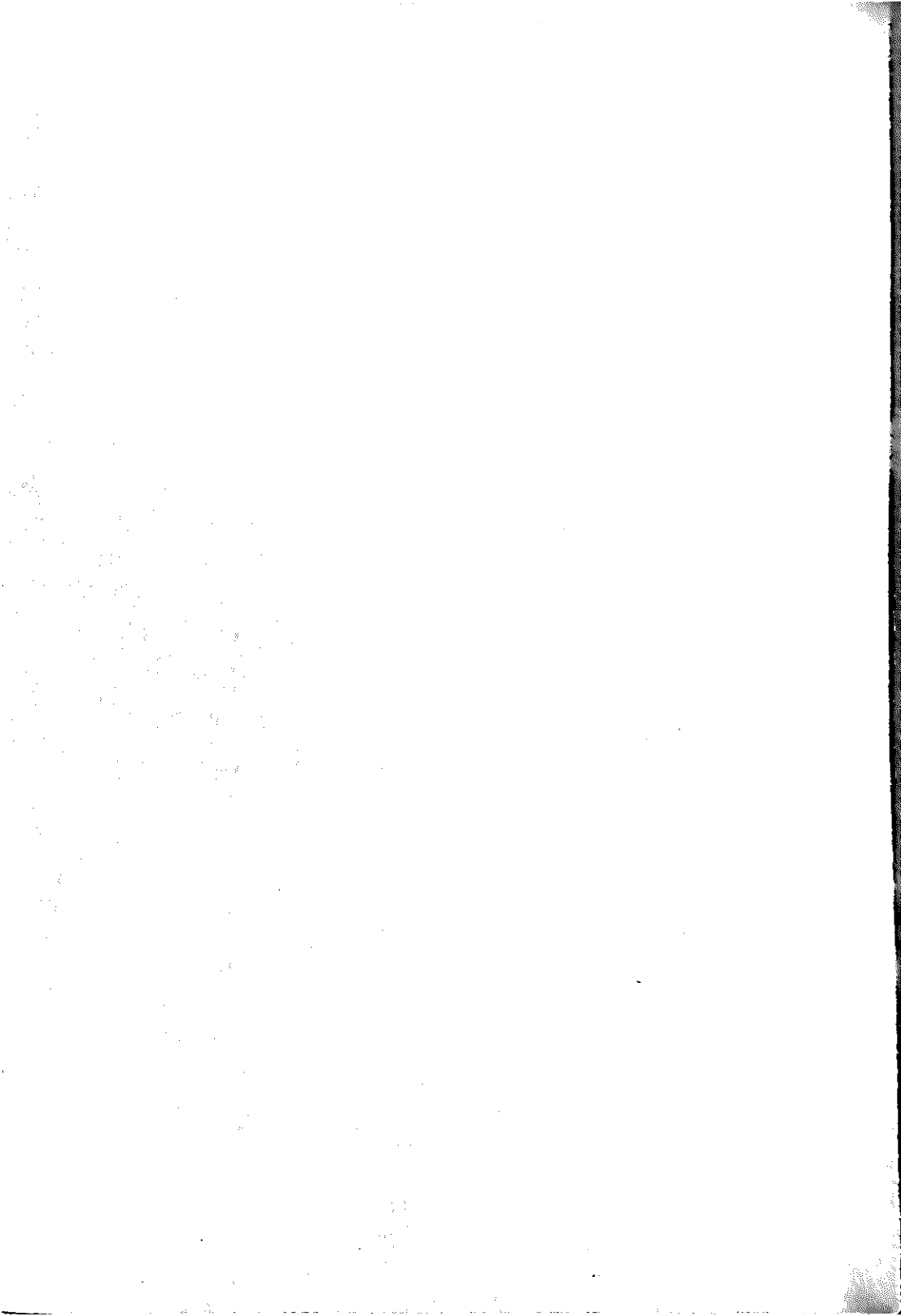
さて、これらをどう教材化するか。単なる未開万歳ではなく、未開・文明の両者を貫ぬく人間の尊厳を見つけ出し、それらを教材化してゆかなければならない。課題の荷は重い。「私はゴーギャンになりたい！」

参照(1)『ゴーギャン現代世界美術全集』(集英社)粟津則雄解説P.86

(2)『月と六ペンス』W.S.モーム(新潮文庫)P.86 (3)(4)『ノアノアタヒチ紀行』P.ゴーガン(岩波文庫)P.15 (5)「十代の妊娠」F.M.サレル『現代のエスプリ』101性教育(至文堂)P.147 (6)総理府『青少年の性に関する意識調査』1971年5月実施(15~24才未婚男女) (7)(1)同

第 3 分 科 会

〔 哲 学 と 青 年 〕



第三分科会・「哲学と青年」

〔研究経過報告〕

六月、上野高校での第一回例会後より一月迄、六回に渡って開かれた第三分科会。世話人の経験不足により、明確な方針もたてず、行きあたりばったりに進めてしまい、まとまった研究成果が上げられたとは言い難い。しかし、小規模であった為か、誰でもが自由に気楽に話せる雰囲気があり、互いの経験・当面している問題点などを交流し合い、理解を深める場となった事が成果と言えようか。

第1回：上野高校での例会後 — 6月18日（金） —

出席者五名。初めて顔を合わせた人も多く、殆どが若いメンバー。簡単な自己紹介の後、兎角、世話人を選出し、テーマの扱い方が話し合われた。「哲学と青年」 — 魅力的なテーマなのだが、いざ取り組む段になると難しい。先ず、思想史をどのように教えているか、また「哲学」という言葉を授業で取り扱うかどうか等という事が話し合われ、詳しい進め方は次回に持ちこす事にし、夕暮れの公園に消えて行った。

第2回：駒場高校にて — 7月6日（火） —

出席者七名。授業実践報告（授業に用いたプリント類の紹介、授業時間の生徒の問題などが話される — どうしたら生徒を授業に惹きつけられるのだろうかという事が共通する問題だった様である — ）の後、分科会としての取り組みが再度話し合われ、授業との絡み合わせは困難だが、先ず「哲学とは何か」を考えてみる上で『哲学講義1』（P.フルキエ 筑摩書房）を読み合わせしてみようという事になった。

第3回：駒場高校にて — 9月7日（火） —

出席者九名。夏休み明けのこの日は出席率70%と活気があった。夏休み

中に各自で読んでおく事になっていた前記『哲学講義 1』の「序説第二章：哲学への導き」をもとに話し合いが展開された。特にレポーターも決めていなかったのに、大体の印象を自由に話し合う形式となり、様々な意見が出された。

- a. この本について。(文科系の為の哲学で読みやすく、生徒にもとりつき易いのではないか)
- b. フランスとドイツの哲学の比較。
- c. 倫社の教科書の問題。
- d. 人生観の取り扱い方について。(情念から訴えて論理に入る、感じさせて考えさせる授業のあり方と客観性の問題 etc …)

おおよそ以上の様な点で意見が交換されたが、もう少し授業に密着した論議が必要ではないかという事になり、今回は具体的な授業紹介をすることに決定した。その際、「哲学と青年」のテーマを忘れずに、また倫社をどの様な目的でやっているのか問いつつ進めようということになった。

第 4 回：駒場高校にて — 10 月 12 日 (火) —

出席者七名。先回の決定に基づき、河野先生(北高校)からプラグマティズムのとり上げ方が発表された。河野先生の年間計画の中で「先哲の生き方を考える」と位置づけられた二学期は「プラグマティズム」。「実存主義」。「社会主義」。そしてまとめとして「ヒューマニズム」を扱っている。この日は、O・ヘンリーの『最後の一葉』を用いた授業実践を中心に話が進められた。

第 5 回：目黒高校にて — 11 月 16 日 (火) —

この日は病気や校務の多忙で、出席者 3 名と、実質的には分科会としての取り組みは出来ず、集まった者で、授業や生徒指導の問題を話し合った。

第 6 回：駒場高校にて — 1 月 20 日 (木) —

研究部の宮崎先生を含めて出席者六名。秋の終わり頃より低調になってしまった分科会、この日は各自紀要の原稿を持ち寄るといふ事で開かれた。紀要をめぐる話や一年間の反省などが簡単に話し合われ、第三分科会も、一応一

年の暮を閉じることになった。

以上が経過報告である。分科会としての反省など思いつく儘に記してみることになります。

- ・テーマが非常に魅力的だったが、焦点を絞れず散漫になって分科会としての一貫した流れがなかった。
- ・共通の基盤（それは授業ということになるだろうか）を見出すのは難しいが、折角読み始めた『哲学講義』、もう少し続けて読み、更に授業の話とくっきり二本立てにしても良かったのではないだろうか。
- ・一年と固く考えず、もう少し長い目で同じテーマを継続的に取り組んでみることも良いかもしれない。
- ・「倫社」で、この分科会でいえば思想・人生観の所で、「何を教えたい（？）」のか「どんな意味・目的でやっているのか」など、常に問い続けて行く大切な問題だと思う。

最後に、世話人の一人が定時制で、途中で抜けることが多く、分科会での話の展開に不正確不十分な所があることをお詫びします。

(渡辺道子記)

倫社の授業について思うこと

都立化学工業高等学校 矢島賢二

〔はじめに〕

都倫研の活動に実質的に参加したのは、今年が初めてだと思ふ。それに、ひんなことから世話人になってしまい、行きがかり上、こうして原稿を書くはめになってしまった。誠に残念である。

書くこととてないので、感想ということになったのだが、これは、この頃考えること。

しかし、実際には、学期の真ん中^中には、ただ忙しく慌しく過ぎていくように、充分に自分で考えることができない。教師が、考えるゆとりもない生活をしているのだから、生徒に考えてもらおうという魂胆は出すぎたことなのだ。教師は考えるに足る程、楽をしなければならないのだが、こんな論法はなかなか通らない。あいつサボッテいやがるというのが、大方の評になるだろうから、自分でも、この論法を実際に通すには、長い時間と多大の努力を必要としなければならないと思うのだ。

〔考えること〕

考えるといえば、マルクスニアウレリウスは、陣中で哲学をしたという。僕は昔、この話をどこかでちらっと知って、いたくがっかりしたことを覚えている。なにも戦争中、哲学しなくてもいいのに、というのがその時の思いであるが、それ以来一貫して考えることに不本意である性分だと、自分のことを観念した。

倫社の授業の第一目的は、考えることにあるといわれるが、そういうわけで、自分はこの事に疑問を持っているのだ。

大学卒業前の思いは、ちと大げさだが、「悩み疲れた」という感慨だった。僕には、とにかく、考えることと悩むこととがどうしても不可分のように思

えた。今もそうだと思う。ただ、訓練すれば、思考することを楽しむという
ことは、できるし、また倫社の教師たるものは、そうでなければならぬとい
う点で、自分の存在を頷くわけだ。

できれば倫社の授業は、エピクロスのように死の苦痛をやわらげるために
考えるようでありたい。「わたしがある時は死はなく、死がある時は、わた
しはない」(わたしは死ぬことはない、ということの証明として)という言
ほど自分には愉快なものはないと思うのだが、生徒は、それでどうなの、と
真面目に聞くので、また幾倍も教えるのが嫌になったりする。エピクロスが
わざわざ、死後のことなど不安に思って、恐れ煩うことのないように、せ
かく考えてくれたのに、この諧謔を理解してくれないなんて。……それで
精神の主観的作用と物質界の世界との表現における取り扱いの違いについて
説明するのも授業の一方法なのだろうが、とにかく、あの言葉を聞いた時、
最初に笑ってくれない者に説明するのは困難である。何か精神的負担を
感じる。

[考えないこと]

考えるということの中には、ある事柄について、考えない、ということも
入っていないわけではない。悩み疲れた人間にとって、考えないということ
は唯一の救いである。キリストも明日のことを思い煩うなどいっている。だ
から、神の前で考える人間など、どうも矛盾してしまふように僕には思われ
る。倫社の授業で、キリスト教を扱うのは、だから本当は大いに難があるの
だ。ただ、僕はこんなことを生徒に話さないのは、話すに足る生徒でないか
らだ。(残念だが)

キリスト教を扱うにしろ、他の宗教を扱うにしろ、また時に芸術を扱うに
しろ、考えるということは、それらの前では、万能ではないばかりか、むしろ
障害ですらある。

しかし、僕は、信仰を信仰として悟るべき信仰家ではないから、どのよう
に処するべきだろうか。

僕は、それで、「解説」という一語で — よくよくいままでの自分を顧み捕えてみると — 片付けてきたのだと了解する。これを教師になった当初は、自分の知識主義だと理解していたのだが、今ではできれば、時事解説者のように、自分の意見を控えて、多くの思想現象を解説してみたいのだと願望し続けたのだと思う。

孔子も、死後のこと、神のこと、心靈現象のこと（鬼事・怪事）、を語らなかつたというのではないか。また仏陀も、毒矢のたとえをもって形而上学に踏み込むことを諫めたではないか。

だから考えないという第二の点は、考えただけでは済まない分野が倫社にあるという前者の指摘とは違つて、ある種の事柄、領域に関しては、考えないことが積極的に擁護される世界だと思ふ。判断中止は、哲学の大事な心構えであり、これなくして、考えるという作業はできない。

〔倫社の教師に課せられていること〕

さて、しかし、倫社の教師が多く担わされている課題は、まず考えるために、他人の身になれ、時代の中に身を置け、その民族個有の問題を自ら、いったん引き受けた気になれ、といったことであろう。考えるために、こうしていままで自分の考えていた世界を抜け出て別世界に入り込むことを要求されるのだが、これがなかなかできない。できないばかりか、それが一体何になる、といった抗議が湧くことすらある。それで教師は、ギョッとなるのだが……。本当に、これはどうにかならないものか。

ソクラテスが、街頭で、人をとつかまえて問答をするのも、これに一種似ている。考えるということは、とにかく重荷だ。人間は、きっと考えることを嫌がるものだ。まして我々倫社の教師は、ソクラテスが問いかけた同時代、同環境の問題を問題にするのではなく、別の時代、別の環境をである。

そういうわけで、人々をとつかまえて、考えることを要求する人間は、きっと反撃される。反撃を乗り越える信念のある人間や、ソクラテスのように潰れてしまう気である人間はそれができる。しかし僕には、それが両方と

も馬鹿馬鹿しいことのように思えた。

〔 覚えること 〕

かようなわけで、生徒に僕は、考えることを積極的に要求したくなかった。だから僕は、覚えろ、とやってきた。他人がどんなことを考えたのか覚えること、これがまず先決であると。覚えたことから、それについて考えることがあったら、それは付録として喜ばしいことだという考えであった。

僕としては、覚えやすいように、適切に解説してやりたかった。基礎的な知識なしに考えるということは、無暴なことのように思えた。また豊富な知識を与えていき、その知識を整理していく過程で、どうしても整理する方法がでてくるわけで、それが考えることの始まりであると将来の設計として心の中で思った。ただ、現状の生徒を相手にしていく限り、僕はまるで小学校の先生のように思えたので、難しいことを易しく、複雑なことは捨象していく傾向にあった。抽象的なことをすべて捨て去って、具体的に話をするための例話を切に欲した。次に、数分にもわたる寓話は、生徒に忍耐力がないからこれも座礁するのだとわかった。それで結局、わからなくてもなんでも、強引に思想の世界を紹介していった。今僕は、それも虚しいものだと思う。

〔 結 語 〕

授業は、生徒と僕の総合力であろうから、現状において何ができるかを見なければならぬ。僕は今、化学工業高校の現状からみて、自分にできることは、やはり手短かに解説してやることだと思う。生徒の気を引くような例話を集める一方、生徒に辛抱を要求できる程のこわさが必要であるし、何よりも落着かない生徒の呼吸を取り扱うに足る勘を養いたいと思うのだ。英語の訳を覚えることはできるが、英文の構造を解剖したり、ある単語の訳が、訳文の中でどれにあっているのか、ついにわからぬような生徒を相手にしていると、「考える」ということは、至難なことだと痛切に思えてくるこの頃である。

倫理・社会と哲学

都立駒場高等学校 細谷 斉

1. 倫理社会と哲学 「哲学と青年」というテーマを与えられ、いかにも倫社の研究に相応しい問題ではあるが、具体的に考察する段になって、あまりに問題が大きくて、どこから切り込んでいったらいいのか考えてしまった。

思案の末、哲学と青年といっても、ここで青年とは私達の対象である高校生であるから、生徒にとって初めて哲学的な思想内容を学習する教科である「倫理社会」の哲学的性格について考えてみることにした。倫理社会を考える時、哲学を意識しないわけにはいかない。勿論あくまで高校の一教科としての倫社と大学の講壇アカデミズムの学問としての「哲学」とは同次元、同質のものではない。しかし、倫理社会の根底には、「哲学」の学問的精神がなければならぬし、あると思うのである。倫理社会の哲学的性格と意味内容はいかなるものか、若干考えてみたい。

2. 日本人にとっての哲学—哲学青年という言葉

自ら哲学の落第教師を自認公言し、大学教授の職を辞し去って、ユニークな著作と評論で活躍しておられる福田定良氏はその著「哲学のすすめ」(法政大学出版会)の中で次のように指摘している。「哲学青年という言葉がある。学生時代に哲学に夢中になっていた人が、社会人になるといつのまにか哲学に対する興味を失ってしまい、学生時代の彼からは想像できなかったような俗物になる。こういう人物によると、哲学をやったのは若気のあやまちで、ということになりかねない。(a)日本には、哲学青年と同じような言葉がある。文学青年、新劇青年といったたぐいのものだが、この種の言葉は私達が若いときに哲学や芸術にそそいだ情熱を、社会人として成長するとともに失ってゆく、という事実から生まれたものである。これと似たことは外国でもみられるかもしれないが、日本ではこの傾向が特に強いように見える。

どうしてこういうことになるだろうか。(b) いったい哲学というものは学生時代にやれば満足できるものだろうか。もっと皮肉な言い方をすれば、学生時代にやった哲学は哲学だったのだろうか。中略。(a)の問題は、私達日本人にとっては、すでにひとつの哲学問題だ、云々」と。これらの指摘は正鵠を突いていると思うのだが、倫理社会の奇木細工的総合の人生観学習からは、真の哲学する精神は生まれにくいであろうし、ひいては倫理社会のバックボーンが何であるのか不明確になったままでいることになる。

3. フランスのリセーの哲学教科書、哲学教育に学びたい

このように泡つぶのように消えていく哲学青年や日本の哲学教育に比し、強力な伝統に根ざして実施されていると聞くフランスの哲学教育には教えられる点があると思う。昨年筑摩書房からリセーの哲学教科書が翻訳出版された(P.フルキエ「哲学辭義」全四巻)が、第一巻の中で推薦文を書いている故森有正氏は、リセーの哲学教育について次のように言っている。「フランスにおける哲学教育は……中等教育の完成、更に大学への道を拓くものとして重要な地位を占めてきた。……私の知っている地方の音楽院の教授は音楽について次のように語った。「ベートーヴェンの何が弾ける、バッハの何が弾ける等というようなことは実にうわついたことなのである。自分の中に音楽の世界が形成され、それを通して自分の魂を表現する。それは素材に過ぎないのである。」それはそのまま、哲学の教育にもあて嵌めて考えることができる。この考え方を立証するものは、バカロレアであって、哲学科に課されるものは正に作文なのであり、それは正確に定義された用語を用い、厳格に文法、修辞の訓練を経た文章を用いて、自己の思考を組織することなのであり、いれ以外に思想というものはありえない、という確信に基づくのである」「表現されてみなければ、思想とは水の泡のようなものであり、表現されてみて、ある思想の意味もその欠陥も明らかになるのである。このことが我国ではまだ十分に理解されていないのみならず、日本語そのものが未だ十分にこの目的に向って訓練されていないように思われる。学校教育におい

て、自由作文はかなり盛んなようであるが、一定の課題と方式と制約の下に自己の思想を表現する訓練は全く行われていない」また、「私自身がフランスへ行って、はじめて出会った一番大きな問題は、哲学科の教育の徹底ということでした。非常に徹底した中等・高等の哲学教育があって、みんなその基礎の上に立って、デカルトでもパスカルでも、カントでも勉強する。これが日本の場合はほとんどない」（森有正著「いかに生きるか」講談社新書）と。これらの森氏の言葉は、図らずも、福田氏が指摘した問題にも答えているように思える。単に感覚的・情緒的な「触り」としての哲学ではなく、どこまでも思想的・論理性を追求する、別に言えば、人生の〈経験〉〔私たちが抽象的に知っている言葉に本当に内容を与え、本当にそれを定義するものを私たちに与えてくれる場所、それを私は経験と呼ぶ。森有正著、前掲書〕としての哲学が私達には殆んど皆無だという指摘は厳しいが当たっているであろう。これらの森氏の指摘するところは、水準と内容をひき下して考えるならば倫理社会の場合にも該当するのではないかと思う。すなわち、生徒の意識や経験を思想的な問題に問い直し、高めていくための方法論が倫社の場合には欠けている。少なくとも私の場合には欠けているのを感じるのである。デカルトやカントをとり扱っても単に上辺の片々たる二、三の知識に終わってしまうもどかしさを感じないわけにはいかないのであり、愛知の精神をひき出し、育て上げることは殆ど出来得ていないのである。歴史や文化の伝統をはじめすべてが異なるリセーの哲学教育を真似るとしても無理なこと倫社には倫社なりの独自性や存在事由があるわけでそれを更に追求すべきであるが倫社のねらいと哲学とのかかわりを考える時参考にすべきものと思っている。以上にみた通り、現在の倫理社会は哲学ではないし、そのための努力も十分とは言えない。倫社を哲学に近づけることがあるべき方向なのか否かも問題であろう。しかし、私は前述のリセーの教科書を見て、この方が本当ではないか、という気持がしているのである。

4. 生徒の小作文にみる意識と問題点

森氏が言うような厳密な文法や内容をもつものではないが、平常時の授業において私も小作文や小アンケートを書かせるように努めている。自分が体験したことを問い直して、経験にまで高めていくために（森氏の指摘）、書きながら考える、逆に考えるために書く、という作業は必要なものである。以下、今年度の小作文のテーマとその作文からいくつか紹介してみたい。

④テーマ：自己について 「君のことをわかっているとはどういうことなのだろうか。君のことを知っているって何を知っているのが、信じているって何を信じているのか。もし相手の行動や言動から、その気持がわかってもそれは氷山の一角にすぎないのだ。それがわかるだけでも、まあたいしたものだが、だからあいつのことは知っているだなんてすましていないで、もう一度たちどまって相手をつつみなおすことも必要なのではないだろうか。話をしていればわかるだろうけど、その相手が自分と同じ世界を持つ同じ穴のむじなならば、少しは安心してよかるう。でも別の穴のむじなであつたら、多少の緊張をもって見つめなければならぬ。別の穴の者だから自分の穴からの見方だけで見ていると見聞違いという危険をももたらすことになる。相手の穴の見方で見ることだ。しかしそうすると最悪の場合は相手と同化してしまいかもしれないので、自分も見失わないようにするという配慮も忘れてはならない。」（コメント）本文を書いた生徒は、友人関係で一時かなり悩んだが、その悩みを一応克服した時点で書いたのが本文であり、人間を理解することの困難さを自分なりにつかんだように思われる。このような意識をいかに指導していくのか、むずかしい問題である。

⑤テーマ：宗教について「旅行記（夏休み課題旅行記のこと）にも書いたが、夏休みの終わりに、寺で修行してきた。寺の作法に従いお経も読んだ。しかし、仏教を勉強してきたのではない。宗教って何んだらう。お経にうたわれている文句は、何度もよんでいると、おぼろげながらその意味がわかる部

分もある。なるほどと思う。「二度とない人生だから」という詩の一節、つゆ草のつゆにもめぐりあいのふしぎを思い足をとどめてみつめて行こう、という箇所には感動に似た共感を覚える。でも仏教信者ではない、神様もおがむ。聖書の教えを生活に取り入れている。いろんな宗教の、いろんな教えにそれぞれ感銘を受ける。父は、米英人は一週間に一度教会へ行って心を清らかにする。それが精神にひいては生活にいい影響があるんじゃないか、と言う。人間とは何かを考えたり、すなおに自分を反省したりすることが、宗教心なのかもしれない。(コメント)本文は夏休み中に青少年座禅道場に参加した生徒の作文であるが、実に素直に考えていると思う。このような素直さはこのまま育てて行きたい。そこで倫社は何をすべきか。

◎テーマ：何故青春はいけないか 「女子高校生が売春をしたという記事(注・夏休み中の新聞の記事)をみていてふと思った。私自身はもちろん、いけないことだと思っている。でも、どうして。確かに売春には多くの危険がある。性病の問題、からんでくる暴力団など。でもそれを必要とする男性の存在と、そうするより生計が立てられない、又はその仕事に自信があるという女性の存在、その間には被害者はいない。SF的だが、法律が売春を許すと仮定する。売春婦を登録制にして、健康診断を定期的に行ない、年齢や料金を定め、彼女らを法的に保護するとしたら。法が許しても、私たちはいやなものだと思うだろうか。私たちは先入観の上に立っている。友達はこの話で、私を賛成論者だと思ってしまった、がそれは違うのだ。私は考えつくあらゆる悪い面を除いても、やはりいやなのだ。一私の考えは恐らく何か大きなことが欠けているのだと思う。でもそれはさておき、これを考えている間、私はこのように自分なりの考えもはっきりしないまま、拒んでいるものが私には数多くあることに気がついた。何故、どうして?とつきつめて考えてみると、意外に自分の考えが浅いものだとわかるのである。(コメント)なかなかユニークな文だと思う。これなどは、物事をつきつめて考えていくことの大事さをよく理解しているのではないかと思う。

利己心と利他心

— ベンサムの功利主義を通して —

都立桜町高等学校 佐藤 勲

◎ テーマを設定した理由

すべての人々の人格の完成と幸福の達成を究極の目標とするのが民主主義であるならば、その基底には利己心と利他心との関連が常に抜きさしならぬ問題として横たわっているように思われます。

19世紀前半までのイギリスの学者、思想家には、利己心説または利他心説に立脚して社会政治的ないし経済的理論を展開しているものが少なくなかった。20世紀後半の現代においても、ますます利己心と利他心との関連、または対立が現実の問題になってきている。

これまでの「倫理・社会」の授業では、イギリスの功利主義はあまり扱われてこないか、とりあげられたにしてもその内容の扱いが非常に不十分か、また誤って指導されてはいないかという反省のもとに、このテーマを取り上げました。

◎ 功利性について

ベンサム (1748~1832) の代表作『道徳および立法の原理序論』(1823年版) の冒頭は「自然は人類を快および苦という二つの君主の支配下においた。われわれがなすべきところのことを指示するとともに、同じく、われわれがなすであろうところのことを決定するのは、ただ、これらの君主だけである」という有名な文句で始まっている。

ベンサムは「功利の原理」を「最大幸福」と言い換えているように、決して単に個人の行為を個人の快苦だけに結びつけて論じようとしたのではなく、社会全体の人々の、つまり公共の快苦(幸・不幸)と結びつけて論ずることになったにもかかわらず、「功利」ということばは必ずしも「幸福」ということばほどには「快苦」という観念に結びつかないし、また社会公共の立場

へのつながりを見い出せ得ないのが現状である。

「功利性」(utility) —すなわち快楽を生み出すという、人間にとって有用な性質—をもって人間の行為を道徳的に善なるものと判断する標準とする。

③「制 裁」

快楽や苦痛が人間の意志とは無関係に、自然の成り行きにしたがって生ずる場合、それは物理的制裁となる。例えば節制が健康を、従って快楽をもたらし、不節制が病気を、従って苦痛をもたらすような場合である。

快苦が社会のしかるべき権威（例えば裁判官）を通してくる場合、それは政治的制裁となる。世論の圧迫は、民衆の道徳的制裁となり、信仰は宗教的制裁となる。

④快苦の計算

快楽の増大と苦痛の排除ということが政治や道徳の目的になる。従って法律をつくるには快苦の価値の大小や量を正しくつかむ必要がある。

個人の場合には、快苦の価値は（１）強度（２）長さ（３）確実度（４）遠近度によって測られるが、その快苦を生じた行為の傾向をも評価する場合、（５）能産性（快ならば快を、不快ならば不快をさらに伴う性質）（６）純粋性（快が不快を、不快が快を後に伴なわないこと）を測らなければならない。個人の集合である社会の場合には、（７）快苦の範囲すなわちそれによって影響される人間の数を考慮に入れなければならない。

行為のおよぶ範囲とか、影響を受ける人々の数というようなベンサムの方の底にあるものは、個人主義も、それが理性によって指導されるならば、むしろ公共の幸福につながる事ができるのだという理論的な可能性に対する確信であった。

しかしベンサムは、快苦はどこまでもまず個人の快苦とみている。ベンサムにとって、この世に人間として実在するものは個人のみであって、社会とは単に頭の中でつくりあげられた、実体のないフィクション（虚構）にすぎなかったのである。

③利己心と利他心

以上のJ・ベンサムを指導者とするイギリスの功利主義者たちは、利己心の学説をとる著名なグループの一つであったと考えられている。彼らといえども、現実の人間が現実的に利他的行動に出る場合もある、という事実を否認はしていない。また、単なる合理的計算をもってすれば、その利他的行動が結局において自己自身の利益をもたらずかどうかは不明であり、むしろ自己の不利益をもたらず公算が大きい、と思われる場合にも、なお人間は利他的行動に出る場合がある、という事実を否定することはできなかった。

ただ彼らは、このような場合にも、それもまたいわば利己心の一変形にすぎないことを骨折って説明しようとした。彼らがこのような説明に当たって最も有力な武器としたのは、ジェームス・ミルやアレキサンダー・ペインなどによって打ち立てられた連想心理学であった。彼らによれば、他の個人または集団の怒りや刑罰を恐れるために、あるいはまた他人の賞讃や報償を欲するため、すなわち、要するに利己心の満足をかちうるためにのみ、なされていた「多数者の幸福」を目的とする行為が習慣づけられるに従って、その行為と自己自身の幸福とが直接に連想されるようになり、もはや合理的の考慮を行なうことなく、盲目的に利他的行為を行なうに至ったというのである。

しかしながら、この説明には、言う迄もなく多くの大きな漏れと欠陥があるのである。

(1) 法律や世論による制裁をどれほど完備しようとしても、逃れうる行為の領域は無数に存在し、それらの領域においては、外からの強制によらず自主的に決定する他ない。そしてこれらの自主的行為においては、常に利己的行為だけが横行するというのは、事実と反している。

(2) また外からの強制によってだけ利己心は利他的に動くことができると主張するとき、その外からの強制そのものが、利他的方向に向ってだけ強制するという必然性は一体どこから立証できるのだ。利己心によれば、外からの強制そのものは、力において優越する他の人々の利己心によって行なわれるは

ずであって、強制するこの利己心が、最大多数の最大幸福を願うという必然性は存在せず、少数者の利益の方向にだけ向かうかもしれない。

(3) また少数者ないし独裁者が、たまたま善意にもとづいて、少数者の利益とは矛盾する最大多数の最大幸福に合致するような良い制度を作り出したという場合には、利己心説は勿論これを説明できないであろう。

(4) なおまた、力ある人々の利己心が他の人々を統制する事実はしばしば見られてきたが、彼らの力を形成する要素の一つは団結である。この団結の力は、少なくともその集団内部の人々の相互愛着による犠牲の能力に基づく所が大きい。人は、他のために自己を投げ出すとき、死を恐れぬ活動と奇蹟的な力量の発揮とを可能とするのであって、ひたすら利己心だけにこり固まっているものは、いつもびくびくとして無力であることが多い。要するに、どこまでいっても、どこかで利他心の独立の芽が見られるのである。

(5) この種の利己心説は、習慣の力を過大視しているが、利他心という、利己心とは全く正反対の性格をもつところの属性が、何らの素質をも前提としないで、単なる強制による反復だけによって、利己心から生まれ出るとは考えられないのである。

●まとめ

ベンサム の利己心説の伝統の中に育ちながら、その矛盾に苦悩した J・S・ミルは「最初利他心は単なる萌芽状態において存在し、利己的な各種の傾向は、既に開化し繁茂している状態にあったのであるからして、各個人に潜在している利他心を開発することが、社会多数人の利益と一致し、従って力の限りその開発に努力するという事実がなかったならば、利他心の発達には到底見ることができなかつたであろう。何らの教育も強制もなしに、利他心が生まれながらに利己心よりも優越している個人が存在したか否かは勿論決定は困難であるが、このような場合が存在したとしても、極めて稀であつたろうということは確かである。この意味で利他心は依然として、自然的なものではなくて人工的なものである」と述べている。

合理論と経験論への導入の試み

都立小石川高等学校 田中正彦

① はじめに

理性、感性の両面においての人間の認識能力への信頼によって、人間中心の西洋近代思想は始まるといえるだろう。私はベーコン、デカルトを先駆する経験論、合理論を比較しながら認識への根拠を考えさせることができる17世紀の西洋思想は教え易いような気がしている。むしろ、めくらがへびにおじけないのと同じことだとは思いが。昨年より、私は下記のような劇の脚本のような、先生と生徒の対話形式で書いたプリントを生徒に黙読させたり配役を決めて読ませたりして、授業の導入やまとめに用いている。「T先生対話シリーズ」と称するこのようなプリントを今年は全部で7編（1編が4～8枚のプリント）作り、授業で用いている。

② 展 開

以下に紹介するのは昨年、合理論と経験論についての授業の導入のために作ったものである。私は授業の展開例として載せさせて頂くことにする。「はたして花ピンはあるか」という題で、登場人物、場所、情景の説明のあと、次のような対話が始まる。

「T先生『君、君、A子さん』 A子『はい』 T先生『君はここに花ピンが置いてあると思うだろう』 A子（けげんそうな顔で）『はい、そうですけど、それが何か？』 T先生『君は自分の前にこれは花ピンである。と君が考える物体があることを認めているわけだ』 A子（キッとなって）『先生、どうしてそんなまわりくどいこと言うんですか。私がこの花ピンをどうかしたんですか。ハッキリ言って下さい』 T先生『そ、そんなおっかない顔をしなくていいだろう。べつに君をとがめようとしてるんじゃない。そんな愛想のない口のきゝ方をしてると、君将来売れ残るよ』（氣勢を

そがれてしらせうになるのを必死に防いでいる) A子『おおきなお世話
ですよ。私が花ピンが置いてあると思っているからってどうなんですか』
T先生『とにかく君は君の前に、君が“これは花ピンである。”と思っている
物体が存在することを認めている。つまり、“ここに花ピンがある。”と思っ
ている。でもどうして“ここに花ピンがある。”と断言することができるんだ
い。』 A子(びっくりしてT先生の顔を見つめる)『えっ?何ですって先生
……。まあ、かわいそう。さっきテニスに見とれて柱にぶつかってらしたから、
きっと……。』 T先生『いや御心配にはおよばない。正気だよ。まじめ
な話さ。君と哲学的な問答を試みようと思っただけ。そんなキツネにつま
まれたような顔をしないでくれよ。君は何のためらいもなく、君の目の前に花
ピンという物体が“存在する。”と思っているようだが、そのように断言でき
る根拠は何だろう。そんなこと今までに考えてみたことはないだろうねえ』
A子『あたりまえですよ。そんなこと考えるより、いつも、どうして私の眼
の前にはボーイフレンドが存在しないんだらうってことを考えてしまっ
た。』 T先生『うん、きっとおっかななくてどの男性も敬遠するんだらうね。まあ花
ピンでがまんしなさい。君が“ここに花ピンがある。”という根拠は何ですか
』 A子『だって、見えるんだから、“ある。”と思わなきゃしょうがないわ
あほらしい質問』 T先生『なるほど、君が“ここに花ピンがある。”と断言
できる根拠は花ピンが“見える。”ということだね。だけど“見える。”からと
いって“ある。”ということになるかい。“見える。”ということと“ある。”と
いうことは同じかな』 A子『そりゃ意味はちがうけど、見えるものは何だ
ってあるじゃありませんか。なかったら見えるわけないでしょ』 T先生『
でも“見える。”ということがそのまま“ある。”ということにはならないだろ
う。そこに花ピンがあるように見えるからといって、実際に“ここに花ピン
がある。”と言えるのはなぜだろう』 A子『先生、どうしてそんなにややこ
しいこと言わなきゃならないんですか。見えるんだからあるでいいじゃない
の』 T先生『もっと掘り下げて考えるために、徹底的に理くつを並べてみ

るのさ。見えるから“ある。とはいえないことだっているいろいろあるんじゃない。たとえば君の目に幻覚が起っているとしたら』 A子『ま、失礼しちゃうわ。私、シンナーなんか吸ったりしないわよ』 T先生『そう単純に反応されちゃう困るな。まあ冷静に、いろいろ考えられることを考えてみようじゃないか。君は“花ビンが見える。というが、“花ビンが見える。というのは感覚であって花ビンそのものではない。我々は花ビンの色や形を目で感じているが、その色や形を我々に感じさせる原因そのものを感じているわけではない』 A子『えーっ、それじゃ、“花ビンの形が見える。ということは“花ビンがある。ということにはならないんですか』 T先生『君には花ビンの形や色は見えるかもしれないが、花ビンが存在するということはどうやって知るんだい。人間は色や形を見たり、音を聞いたり、香りを嗅ぐことはできるが、その色や音や匂いを出す物体そのものを感じることはできない。たとえば、寒い日に外から帰ってきてすぐ風呂に入るとお湯が熱いように感じ、しばらくするとだんだんぬるく感じたり、光の関係で白いと思っていたものが黄色く見えたり、月が太陽と同じ大きさに見えたり、丸い月が日によって半円に見えたりというように、我々の感じているものは、その感じをもたらすと思われる物体そのもののあり方と異っているものではないだろうか』 A子『そういわれてみるとそうですね。熱さ寒さとか色なんかその時のコンディションでちがうわね。味や匂いなんかも始めは強く臭っても慣れてくると感じなくなってくるわ』 T先生『そうそう。だから我々があるのままを感じているつもりでも、その感じられているものが感じられているように存在しているかどうかわかったものじゃない』 A子『でも、そんなようにややこしく考えるなんておかしいわ。そんなこと考える人みんな変人ね』 T先生『なんでも一生けん命つきつめて考える人はいつでも変人扱いなさ。常識の厚いペールをはがさなければものごとの本質に迫ることはできないものだよ。オッホン』 A子『なーんちゃって。先生それで本質に迫れたんですか』 T先生『それがねえ。いくら考えてもそれ以上進まないのさ。でもこ

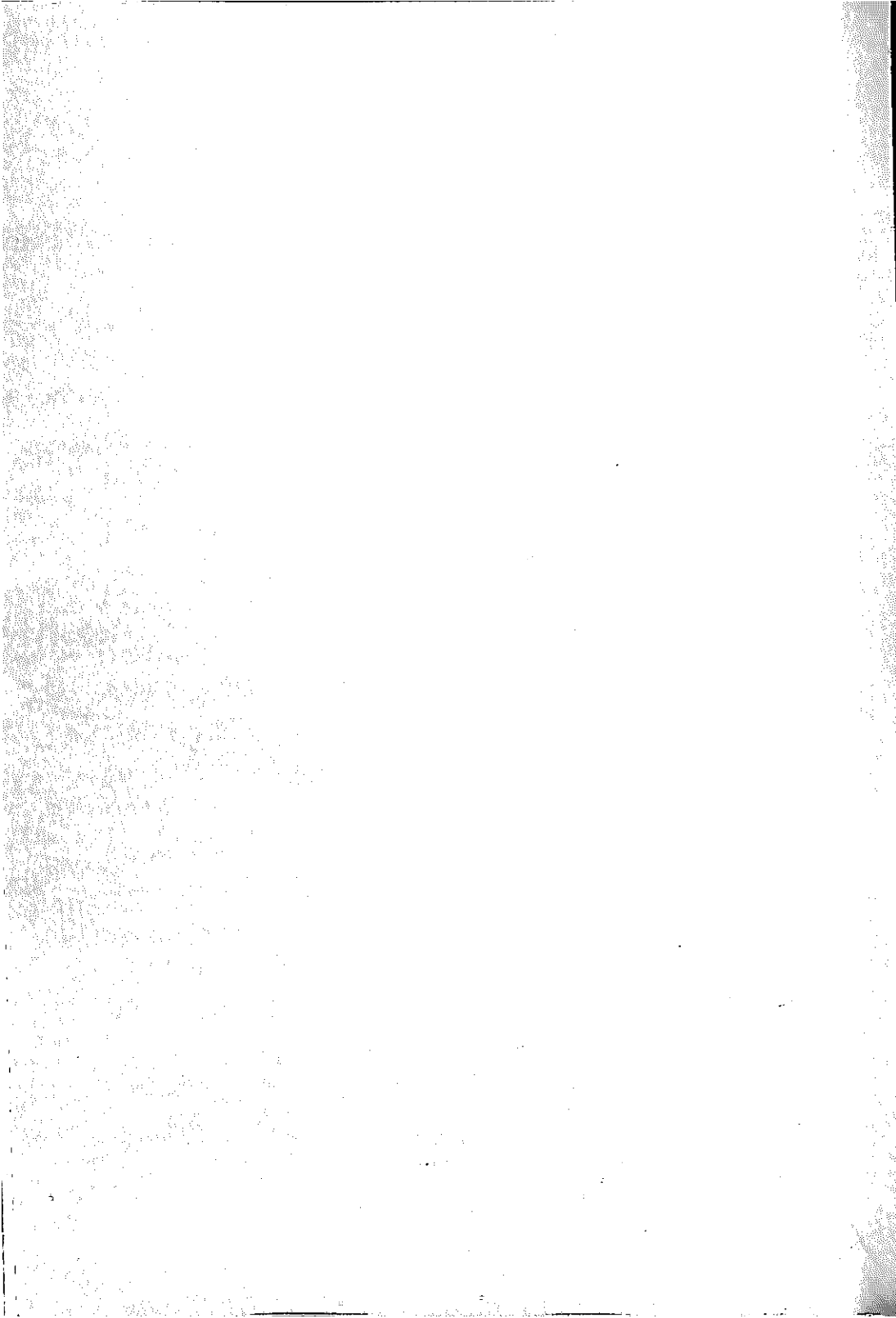
考えてみると、ものが『見える』ということがそのままものが『ある』ということにはならない、『花ピンが見える』ということから『ここに花ピンがある』というためには、それを理くつで説明することが必要だってことがわかったらろう』 A子『そうね。わかってきたのはそれだけね。でも先生、色や形や匂い熱さなんかはまちがって感じることはあるにしても、それが『存在しない』ってことは絶対ないんじゃないですか。まちがった色にしてもそれを私たちに感じさせる何かはあるんじゃないですか』 T先生『うーんいいところに気づいたね、さあすがあ』 A子『今度はおだてたりして、先生調子いいわね。私ほんとに頭いいんですよ。試験の時は遠慮してひかえ目に点をとることにしてるけど』 T先生『なるほどそうだったのか。ちっとも知らなかった。それじゃあねえ、君のしている花ピンの形や色の感覚がそこにある花ピンという物体からくるんだということがどうしてわかるんだい。説明してごらん』 A子『それは……よくわからないけど、なんでも光が反射して』 T先生『その光の反射というのはどうしてわかるんだい』 A子『それは、今まで科学者がいろいろ実験して……』 T先生『実験ね。科学者は目で確かめたわけだね』 A子『そうでしょ。ほかにどこで確かめるんです。まさか足の裏じゃあるまいし』(以下、紙面の都合でカットする)』

③ まとめ

まあ、こんな対話編(?)を書いて、生徒に読ませて、少しでも授業につき合ってもらおうと涙ぐましい努力をしているわけである。私の購読は自他ともに認めているが、まことに魅力に乏しく、生徒に聴かせる自信がないので、眠ってる生徒を叩き起こすことすらひげ目を感じる。文中のT先生はむしろ私自身の美化であり戯画化である。年度末に書いてもらった感想文には次のようなものもあったことで、自己満足しているのである。「T先生を通して知った田中先生と購読している時の田中先生はまるで別人だ。T先生シリーズを読んで始めて、先生の人間の豊かさを知ることができてよかったと思います」

第 4 分 科 会

〔宗教・自然と青年〕



第4分科会「宗教・自然と青年」

研究経過報告

本分科会は、十人足らずのメンバーではあったが、密度の濃い話し合いがもたれ実りある分科会であったと思われる。

年一回は、9月3日、育英工高専で行なわれた。本分科会は、宗教・自然の部会を合同で開き、両テーマを総合的に考えていくことを、まず確認した。まず、育英工専の長沢・木戸・並木の諸先生より、ミッションスクールにおける倫社教育の実情について、特に宗教教育という名を冠さず、倫社（4年次の倫哲を含む必修4単位）教育の中で、その背景にキリスト教精神を位置づけて実践しているという説明がなされた。次に、一般的なテーマに入り、特に、生徒の宗教の受けとめ方の問題に話がはずんだ。特に、日本という風土におけるキリスト教受容の難しさや、現代っ子のもつフィーリングによって受けとめるイエス像のあり方が問題となった。また、欧州旅行の体験を交えて、西欧文明の雄大さ、それを支えるキリスト教精神について、感じるところを述べられる先生のお話もあり、有意義かつ楽しい雰囲気の中に遅くまで続けられた。

第二回は、10月8日、教育会館で行なわれた。今回は、特に、吉沢先生の古今東西の自然観を鳥瞰されたレポートをもとに話しあった。古代ギリシアの自然哲学、キリスト教の神及び自然観レゲルマンの自然観、近世の自然哲学とその世界観、ゲーテにおける「生きた自然」、東洋における「天」「無為自然」等、また日本における「神ながら」、親鸞の自然法爾等、多様な自然観が示され、無=混沌=生命という考え方、日本人と西欧人の自然観の差異など話がはずんだ。また、ルソーにおける自然をテーマとして、生徒の自然に対する受けとめ方についても、発表がなされ、自然観の多様さと、その取り扱いにまで広範囲に話が広がっていった。

第三回は、11月26日に同じ教育会館で行われ、全倫研秋季大会の市川先

生の研究授業などを思いだしながら討論に入った。前回東洋の自然のところ
で禅に話題が及び、岡田先生が、「仏陀のさとりについてレポートされた。
すなわち、仏陀のさとりについて多くの倫社教科書の記述に不正確、不充分
な表現があると指摘され、その博識による資料をもとに説明報告があった。
例えば、八正道の正定とは「正しい瞑想。にあらずして、「正しい精神統一。
であることを看破された。また、宗教を理解させるに難しい所を生徒の感想
文を材料として述べられ、宗教の本質は原体験にあり、これが哲学、神学、
儀礼等により脚色されるため、真の姿を捉え難くする、等の意見が交換され
た。特に、鷲見先生は、独自の体験と理論によって、宗教経験の根本性を、
力説された。また、西欧のプロテスタンティズムと資本主義の形成について
も、報告がなされ、宗教と歴史、経済との関りについても、話が及んだ。筆
者は、これらを通じて、倫社で宗教（その創始者）を扱う難しさは、単に学
問対象として捉えた宗教を客観的に教えればよいのか、あるいは宗教体験に
基づいた主観的ではあっても、真の体験を伝えるべきなのかというところ
にあるように思われた。

第四回は、新年1月12日に、十文字高校において、一年間の活動をふり
かえり、談論風発、話の花が咲いた。特に、日本人の宗教性を、日本の文化
風土との関りでとらえ、話はずんだ。各先生とも、身近かな生活の中から
具体的な例を引きあいに話され、興味深く啓発されるが多かった。

以上ですが、筆者の力不足から分科会の経過報告が充分、正確に報告でき
なかつた点をおわびして筆をおきたい。

(木戸能史記)

宗教教育のむずかしさ

— 特にキリスト教について —

私立十文字高等学校 岡田 春生

1. 今年度、夏休みの宿題として、ギリシヤ思想、キリスト教関係、仏教関係、儒学老荘関係の4の中から1を選び、それに関する本を読み、感想をレポート用紙2枚に書かせた。

2. 生徒の選択の割合は キリスト教関係 47%、ギリシヤ思想36%、仏教9%、儒学老荘関係7%であった。(生徒数445名)

キリスト教関係が約半数を占めたのは、クリスマス等でしたしみが有り、新しい感じで何となく恰好がよいという理由で、殊に女子高校生は「愛」という言葉が受けたようである。この中でキリスト教関係の幼稚園や日曜学校の経験者は僅か2.5%にすぎない。

3. 読んだ本の種類 キリスト教関係73種類(読んだ生徒数208名)頻度の高いものより挙げると

- a 聖書25% (新約45名, 旧約7名)
- b キリスト教の人生論 桑田秀延著 8名
- c キリスト教とイエス 八木誠一著 7名
- d キリスト教入門 矢内原忠雄著 6名
- e イエス、人と思想 八木誠一著 6名

4. 感想の内容による分類

- a 自分の心の問題として受けとめた者 13%
- b キリスト教についての概論的要約 16%
- c イエスについて伝記的まとめ 16%
- d 新約聖書を読んだ感想 20%
- e 旧約及びユダヤ教について 15%
- f キリスト教批判 16%

5. 心の問題として受けとめた者（上記4）の内容

- a 信仰をもっている 8名 d 愛について考えた 8名
b 素朴に神も仏も拝む 5名 e 理解し批判している 5名
c 神や人生について考えた 8名

6. 生徒のもった疑問

- a 奇跡は信じられない。イエスは超能力者か。
b 処女懐胎は信じられない。
c 復活は信じられない。
d 神の子ならなぜ死ぬ前に悲鳴をあげたか。(エリエリヌ サバクタニ)
e イエスとキリストは別ではないか。
f 人類は皆兄弟なのに、なぜ神を信ずる者だけが救われるのか。
g 汝の敵を愛せよ、などは不可能。
h 回心は信じられない。
i 神を信ずるなどは不可能。

7. 教師の感じた困難（風土、歴史のちがいで理解できにくい点）

- a 唯一神、超魂神の思想
b イスラエル民族と神との強い結びつきについて、特に契約信仰
c 罪と罰の観念、特に原罪について
d 復活と贖罪についての考え方

8. 生徒感想文の抜粋 以下A Bは本の要約、Cは自分の考え。本校の代表的生徒で、いわゆる日本教で日本民族の健全な思想的消化力を示すもの

A それぞれの国にそれぞれの宗教を（その通有性を見て）

人間にのみ宗教はあり、人種、民族、生存の地域の文化的社会的差異に従った宗教があった。異った宗教が起こり、歴史的に流れた。その一つにキリスト教があります。

宗教は人間が「確実に生きる」「豊かに生きる」ことにかかわるもので、天災、人災を問わず、色々とくふうしてきたのが人間であり、これが今もな

お多くの人々に信仰されているキリスト教の根底に流れていると感じました。

日本列島には「一なる神」の信仰も「契約的信仰」もなじまないとなるとそれでは「一なる神」の信仰はどのような地で育ったのかと、創造神の成立とその展開を興味深く読みました。

B 日本と欧米の宗教の受けとめ方の相違

日本と欧米では宗教の表われ方が大部ちがうようです。

日本でも一応、習慣、現世利益、呪術的の三つの理由が⁴⁴大衆の宗教的行動を支えているといわれています。

しかし私たちの大部分はあまり重要視せず時々利用するものにしているようです。

ところが欧米の社会では全くちがうようです。宗教を信ずることは生きていくための根本的な大問題とされているのです。彼らにとっては社会生活の仕込みのすべてが、道徳も法律も教育も人間の人格的あり方も、すべて宗教から出て来ると考えられているのです。彼らは宗教を人生に根本的に必要な倫理的実践的な生命力をもつものとしてとらえているのです。

日本人はいろいろな面ですぐれているが、すぐに心が変りあきらめ易い欠点があるようです。美的センスはすぐれているが、じっくり物事を考え最後まで正しさを持ちこたえるということができないようにも思えます。このようなところから欧米との宗教の違いが生じてくるのかも知れません。

C 気軽にどの神でも敬えばよい

神社へ行けばそこの神様にお参りし、クリスマスになれば手を組んでキリストにおまいりしている。しかしキリスト教にしても仏教その他にしても神は神、教えは異なるにしても敬うことは当然です。

日本では一般的に信仰をもっている人が少ないと言われています。でもそれでいいのではないかと私は思うんです。皆やはり誰でも神をうやまう気持は持っているのだし、たとえそれが苦しい時だけであつたとしても、神様に手を合わせると言うことは大多数の人がしているのですから。

そういう意味で年中、頭の中で“神様”と一つの宗教のことだけを考へて信仰しているよりも、日本人みたいな方が気軽にいいのではないかしら……と私は思っています。

とにかく私は幅広く“宗教”というのを見て行きたい。

— 仏陀のさとりについて —

1. 教科書の説明には誤りが多い

授業中気がついたことは「仏陀のさとりに」についての説明が、教科書でまちまちでまた大半が誤っていることである。

たとえば私の使っている教科書では「仏陀は……6年間苦行につとめたが苦行の無意義であることに気づき、ブタガヤの菩提樹のもとで沈想・瞑想し、35才で悟りを開き、覚者（Buddha）となった。」とあり、また八正道の正定を「正しい瞑想」としている。（下線筆者）

この点は誤りであって、意識や思惟から離れることが悟りに入る要訣である。「観音流れをかえして所知を忘ず」とか「諸縁を放捨し万事を休息して善悪を思わず是非を管することなかれ。心意識の運転を停め念想観の測量を止めて作仏を図ること莫れ」（道元、普勸坐禅儀）とか言われているのも、このことである。道元は又言う。「ごつごつとして坐定して箇の不思議底を思量せよ。不思議底如何が思量せん。非思量定め乃ち坐禅の要術なり」

以上のような見地からすると教科書の大半は間違っている。それではこの辺の消息をどのように生徒に説明したらよいか。

2. 悟りと定（じょう）の関係

- A. 水の表面が波立っていると中は見えないが、波が鎮まって鏡のようになると中まですき通って見えてくる。

- B 水の表面は千波万波でそれぞれ形がちがいが、中に入れば一様に水である。両者は同一のものである。(色即是空、空即是色)
- C 波の形はさまざまな原因や関係から生じる。月の引力、風向、周辺の影響である。(縁起説 12 因縁)
- D ただ本質は同じで、すべて宇宙の真理のあらわれである。(梵我一如 天地と我と同根、万物と我と一体)
- E これがわかれば大安心が得られる。そのためには正しい定に入って修行しなければならない。(この法は人々の分上にゆたかにそなわれりといえども、いまだ修せざるにはあらわれず証せざるには得ることなし= 道元)

源流思想にみられる自然観

都立清瀬高等学校 小川 輝 之

1. とりあげた理由

現行の2単位時間内で教科書にある学習内容のすべてを消化することは困難である。また、「『倫・社』には興味がわかない」とか「むずかしい」という生徒の声もよく聞かれる。こうした現状を打開し、しかも学習指導要領の精神に則した授業展開として「テーマ学習」を行うとすれば、どのような内容構成になるかを考えてみようとした。

なお、本テーマは「思想」学習への導入として、「現代と人間」の中に位置づけた。内容構成にあたっては、「現代社会の特質」、「源流思想」、「現代の思想的課題」など、3分野を有機的に関連させるように心がけた。

＜学習のねらい＞

- ①現代社会の特質の学習を通じて、現代社会（現代文明）の問題点やそのあり方を考えさせる。
- ②西洋の自然観と東洋の自然観との相違を明らかにさせ、西洋の自然観の中に文明の発生を促す要因（考え方）があることを認識させる。
- ③現代社会の問題なり、現代の思想的課題を解決するための一視角が「源流思想」の中にあることを理解させ、それらを通じて「源流思想」が現代に生きていることを明らかにさせる。

2. 展開 — 文献資料を中心に

- (1) 現代社会の特質……現代社会の特質を産業社会化と大衆社会化の二側面から把握させる。
- (2) 現代社会の問題（現代の思想的課題）……(1)における理解と関連させて現代社会における問題点を下記の資料から読みとらせる。この場合、

現代の思想的課題に気づかせ、(3)への導入に心がける。

明日の世界

科学技術がなにをうみだそうと、官能的動物である人間は感覚によって生活し、それらを通じて世界を知覚し続けるだろう。その結果、人間は自らの存在を確認し、存在の意義を負っている自然諸力との直接的接触を再建するために過度の抽象化や機械化を拒否するだろう。

未来の世界を想像するひとたちがあまり議論したことがない実現しそうな将来像のひとつは、人間が自動化されたキッチン、高速旅行、電子機器によって人間同士の接触を操作することなどいやになるだろうということだ。西暦二千年のひとびとは、今日、アカデミーの刊行物や生活向上雑誌などに公表されている予言をナンセンスとたたき、人間の生物学的、精神的存在を形成した自然諸力とのじかのふれあいをとりもどしたいと望むだろう。生命の内在的決定要素はまことに永続的でなければならず、かつ不可欠なのだから人間はそれを無視したままながく安全でいられるはずはない。(R・デュボス、「人間であるために」P. 18)

(3) 源流思想にみられる自然観……源流思想にみられる自然観を概観し、現代社会の問題や現代の思想的課題解決への糸口を探求させる。

ギリシャの自然観

結局ギリシャにおける自然の概念は、イオニア的伝統のものであれ、イタリア的伝統のものであれ、それは等しく自らのうちに神や人間をも包み込んだ一つの全体的包括者であったといつてよい。……

そもそもギリシャ語で「自然」を表わす「*φύσις*」なる言葉は、こうした原子のようなもはや生成しない「存在」と、アリストテレスの自然のような自ら運動変化する「生成」との両義をもち得ていたが、そのいづれにもせ

よ、それは神・人間・靈魂を含めてあらゆる存在者を包括している全体を意味していた。

こうしたギリシヤ的自然観においては「自然」はなんら「人間」に対立するものではない。人間はそうした全体的自然の一部に包み込まれている。自然は人間に対し異質的対立的ではなく、むしろこれと同質的に調和する。

こうした自然観にあっては、人間が自然を認識するとは、我々に親縁な同質者を内から直接共感し直観し理解することであって、近代におけるように我々に全く無縁で異質的な自然を外から実験というような拷問をかけて白状させ、それを支配しようとするものではない。実際ギリシヤ人は自然の内的理解を求めこそすれ、その外的支配というものを一度も望んだことはなかった。(岩波講座「哲学」P.79~80,「アリストテレスの自然学」)

キリスト教の自然観

創世紀の一章の終わりには、人間が神の像に似せてつくられたと記されています。これは一体なにを指しているかという点、人間の知性と自由、人間独得なもの、動物にないもの、それを指しているのです。神と交わることを得しめるもの、具体的には知性と自由が、人間における神の像であるといっていでしょう。……………そればかりではなく、そこには人間はほかの動物などを治めると書いてあります。それからほかのつくられたもの(自然)を使うことを認められております。創世紀の一章だけではなく詩篇八篇にも、

「ただ少しく人を神よりも低く造って
榮えと誉とをこりむらせ、
これにみ手のわざを治めさせ
よろずの物をその足の下におかれました。
すべての羊と牛、また野の獣、
空の鳥と海の魚、海路を通りものまでも」

とあります。これは人間のつくり出す文明を意味しています。自然の資材、

エネルギーなどを用いて人間がなにかをつくり出すことが考えられている。知性と自由の賜物が与えられたということは、もらい放してはなくて課題を伴うのであって、ここには文明が示唆されています。(桑田秀延、「キリスト教の人生論」P. 111~112)

老子の自然観

青年期以後の私は人間無力論、あるいは「人間は自然に一方的に随順すべし」という主張に、だんだん強く反発するようになった。自然への積極的な働きかけによって人間が獲得した科学、そしてそれに基づく、人間のための自然の改造に、ますます大きな価値を認めるようになった。

しかし、原子爆弾の出現以来、私の考え方は、もう一度大きく変らざるを得なくなった。科学文明の中に生きる私たちは、もはや「なまのままの自然に対する無力感を持っていない。その代り人間のつくりだした「第二の自然」であるところの科学文明に、圧倒されはしないかと心配せざるを得なくなったのである。「天地は不仁、万物をもって獨狗となす」という老子の言葉が――天地を第二の自然もふくめた自然と解釈し、万物の中には人間もふくまれているかも知れないと危惧することによって、――新しい意味を帯びて私に迫ってくるのである。(湯川秀樹、「老子」『一冊の本・全』より)

3. 指導上の留意点

- ①本テーマは、「現代社会の特質」「源流思想」「現代の思想的課題」などを総合化して作成されたものであることに留意する。
- ②展開にあたっては、展開(1)の理解をもとに、(2)(3)を相互に関連させるような指導が行われなければならない。
- ③(3)の指導にあたっては、随時原典にふれ、学習のねらい②③が生きるように心がける。

東洋と日本の見なおし——人間と自然

必修「社会」のねらい「自己探究と自然愛、人間愛」のための教材研究へ

都立大森高等学校 吉 沢 正 晶

1. このテーマをとりあげる理由

教育課程の改善について、教課審より答申が文相に出され、必修「社会」のねらいと内容について、その方向が明らかになった。そのねらいとしての「自己探究を深めることと、同時に自然愛、人間愛を豊かに育て、日本文化についての認識と国際社会に生きる現代の日本人としての在り方について」という点をここにとりあげて考察すれば、従来の「倫・社」の内容を再検討し、もっと広い視野に立って社会についての考え方や学び方などの基礎が習得できるより配慮することが必要である。まず東西の自然観の相異や、自然とのかかわり方の相異、「自然」の用語の相異などについて、ここにスケッチして、今後の精選と教材化の研究への準備ともしてみたい。

2. さまざまな自然観について

(1)ヨーロッパ的自然

その 1 古代ギリシヤの自然

○自然哲学 物活論 (animism)

○自然学 (physika) — 質料対形相という考えで、主・客という対立を知らず、従って自然科学は起り得なかった。

その 2 ユダヤ・キリスト教の自然

「創世記」の天地創造神話によれば、神が人間と自然を創造し、しかも人間が自然を支配するものとしている。またノアの洪水の話の中にすでに神・人契約が見られる。「神は人間を生きた自然の中へ造り入れてくれたのに」というゲーテのワウストのモノローグは、自然から疎外された近代人の声であった。

その 3 ゲルマンの「自然」

ゲルマンにとって、自然は山・森・川・石などであり、それらの中に神々を飼った。ラテン語の *natura* が入ってから「自然」として総括された。ゲルマンは多神教であったが、ラテン語の神 *Deus* をゲルマン語 *gudam* (呼びかけられるもの — 対話の相手) と訳し、*Gott* (ド) , *god* (英) となっている。

その4 近代 — 自然科学的「自然」、デカルト以後

物理学的、理性主義・合理主義的な自然観であり、自然はそれ自身の法則に従ってそれ自身で動き働くものとして、人間の理性で説明できるメカニズムとして捉えた。これは対象化された自然であり、いわば死んだ自然である。人間対自然に心対ものとして主客対立が明確となる。特にカントでは、因果律の支配する自然となる。

ルソーの自然も、理神論が背景にあり、道理 (*raison*) として捉えられている。

ゲーテの自然になると、ヨーロッパの思想を背景にもちながらも、「永遠に活動している生成」(「ファウスト」天上の序曲)、「生命の潮」「誕生と死去」「永遠の海原」「変転する生動」「灼熱する生命」「時のざわめく機織」(以上「ファウスト第一部夜」)、その他一義的にまとめにくい、生きた自然になっている。ゲーテにおいては、原理ではなく、宇宙の根原現象 (*Urphänomen*) として、両極性 (極性連関) — 呼気と吸気、磁気の+-、男女の親和力等々、を捉えている。ゲルマン的錬金術、ミスティック、生命主義などの影響とともに、やがてシュヴァイツァーの「生命への畏敬」へとつながる。ヘーゲルの弁証法は、両極性 (極性連関) に、「歴史」性を加えたものとして理解できる。

(2) 東洋的・日本的「自然」

その1 インド

「リグ・ヴェーダ讃歌」—「ブラーフマナ」—「ウパニシャッド」の中に、自然への讃歌と畏敬と、宇宙の創造力と詩仙の詩的創造力との一如観、無 (カオス) から有への生成、そして「梵我一如」の主客対立を絶した境地

などを見ることができる。

仏教では、やはり自然を人間と対立させない。有情とは人間だけでなく生きとし生けるものを意味する。人間中心的キリスト教と異なる点である。

その2 中国

「論語」では「自然」の語は出ず、「天」という。「天何をか言わんや。四時行はれ百物生ず。天何をか言わんや」というが如くである。

「老子」には「自然」の語が出る。「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」という。また谷神、玄牝などという宇宙生成の根源をいひ、西欧と通じる点がある。

「莊子」や「易」にも、中国民族の宇宙観・自然観を知る。

中国仏教にはまた、「天地と我と同根、万物と我と一体」（「肇論」）というような、梵我一如的境地の表明もある。

その3 日本人の例

やまとことばに「自然」の語はない。「古事記」には「かん（神）ながら」といひ、また「うぶすな（産土）」の語に、古代日本人の自然との一体観を知る。

仏教が入ってからは、親鸞の「自然」は、「わがはからはざる」（我見の入らない）ことが「自然」（自ら然り）であり、行者の計らいでなく、如来の誓いによってしからしむことの故に「法爾」（法のままた）である。自然法爾とは本願即自然であり、神即自然というキリスト教とも近似するが、親鸞が本願にまかせきった受動的態度であるのに対し、キリスト教一般は、布教に能動的となる余り、異教徒迫害や自然征服に向かった。

世阿弥「花伝書」にも、芸術論において日本人の自然観を見ることができる。

芭蕉の風雅と造化についても、日本人の人間と自然との関係の例を見ることができる。

「……しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とする。……」

造化にしたがひ造化にかへれとなり。」(「笈の小文」)

「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。……習へといふは、物に入つてその微の頷れて情感するや、句と成る所也。たとへばものあらわにいひ出でて、そのものより、自然に出づる情にあらざれば、物我二つに成りて、その情誠に不至。私意のなす作意也。」(「赤冊子」)

漱石と自然は、晩年しだいに「則天去私」の境地に至ろうとする。「ここ3」「行人」そして「明暗」などにその心の跡をたどり得る。

3. まとめ

以上のような東西の主要な文献資料から、新しい必修「社会」、また選択の「倫理」に、その目標に照らして、精選と新しい教材化をはかることを考えてみたい。従来の「倫・社」が、だいたい倫理思想史の流れに添っていたために、文学的な文献資料に注目することが少なかった。教科書の人生観・世界観の分野も、概ね大学の倫理学の領域に添っていた。新しい必修の「社会」また「倫理」でも、そのねらいからすれば、もっと広い視野に立った人間学的用意が必要であると考え。そのためには、文学、文化、人類学、精神医学等にも眼を向け、それらの教示も受けた新時代の「社会」の教材化をはかるべきであると考え。

これまでの授業経験から、カント、ヘーゲルの哲学理論よりも、高校生には、たとえばゲーテのものの方がより深く彼らの心に浸透するものがあることも確かである。哲学理論は大学の哲学科に委ね、高校の「社会」、「倫理」では人生論的なものを古典に求めるようにする方がよい。空理空論にならぬよう、人物の体験からの表現にふれさせることを、教材を選ぶ視点としたらよいと考える。

「審議のまとめ」にいうねらい「日本文化についての認識」という点からも、従来の「倫・社」の内容を超えて、東洋と日本の見なかしが当然なければならないと考える。

「宗教学習における親鸞の意味づけ」

—親鸞の授業における強調点，その一例—

都立府中工業高等学校 関根 荒正

1. はじめに

先ず、本年度の追求テーマより若干はずれることをお許し願いたい。私は、宗教の学習で（はっきりとしたテーマ学習として位置づけているわけではないが）、キリスト教と仏教を取り扱っている。その中で、キリスト教と仏教の間の異質性をいかに結びつけて教えようかという関心も大きい。信仰の問題についてつこみが足りないのではないだろうかという意識をもっていた。確かに、人間が神・仏にすがる過程は内面的なものであり、理解させにくい。とは言っても、信仰の実感をわずかなりとも理解させるのは、宗教学習の重要なテーマであるはずだ。又宗教学習を行っている時、それを結果的に知識の問題としてしまっていると感じることがある。宗教家達の考え方やその考えが受け入れられた背景だけを学習するにとどまってはいけないと思っしながら、その枠をこえて信仰の意味、現代の教団としての宗教を考えさせるまでにはいたっていなかった。今年は以上の問題意識・反省をもとに人間としての苦悩の中から仏にすがる過程がよく出されている点から重要だと考えた親鸞の思想を宗教学習のまとめにもってきて、しかも、個人的に寺院にかかわりのある体験をもとに、教団の現実と親鸞とのギャップを示しながら宗教の意味を考えさせることにした。以下、親鸞の意味づけ・強調点に焦点をあてて書いてみたい。

2. ねらい

宗教学習において、ねらいとして上げているのは次の3点である。

A. キリスト教・仏教の基本的な考え方を、それらが受け入れられてゆく時代背景と共に確実に把握させる。

B. 社会の墜落、人間の不安・苦悩の中から、神や仏にすがる過程を実感としてつかませる。

C. <精神>のない墜落した現代仏教の姿を例示しながら、開祖たちの思想といかにへだたりをもっているか理解させ、その意味を考えさせる。

3. 昨年度の反省と親鸞の位置づけ

キリスト教学習において、ユダヤ民族・ユダヤ教の歴史、イエスの宗教改革者としての活動・その思想は、平明化した例や言葉でもって比較的生徒の中に入っていると思われる。しかし、神の姿・神と人間との関係についての説明は、私が実際に神=絶対者をよくわかっていない点があって、生徒にはあまり理解されていないように思う。よく、神を太陽に、人間を地球にたとえて、太陽なき地球の存在は考えられないし、太陽と地球の間の距離も適切でなければ両者の良い関係はないなどと図示して説明しているが、生徒にとっては神=全知全能者・万物創造者という理解の枠を出ず、神の<実像>、人間が神にすがる過程は茫洋としている。又仏教学習においても、四諦・四法印・中道・八正道などについての理解は示されるが、仏陀の生老病死という苦の人生観に対しては異議がとなえられ、人生は欲望を中心に楽におくればよい、苦の人生は現実であるが悟りを開く必要はない、という意見をよく聞く。それはそれとしても、何かにすがってゆく過程を実感としてわずかながらでも理解させてゆく必要があると感じていた。

親鸞思想のもつ、相対者=人間として「弥陀の本願」に救済を求めた存在のふかみ（絶対他力・悪人正機など）は、私が宗教学習においてむづかしいと思っていることにこたえてくれると確信し、本年は親鸞を強調してとり上げることにした。

4. 親鸞学習における強調点

親鸞学習において強調しているのは次の点である。A. 親鸞自体、<欲>に苦しむ相対者=人間でありながら「弥陀」を選びとった絶対他力の考え。B. いわゆる「悪人正機説」、C. 親鸞の平等観。本来ならば、「歎異抄」

「歎異抄入門」を読むような形で進めてゆけば良いのであるが、本校の学力水準からみてとつていやり切れぬことである。ごくわずかな抜粋の資料（主に第13条までを使用。現代語訳で）を使って、用語・親鸞の心境を説明しながら購読する形をとった。資料の一部を、説明の観点をコメントして紹介しよう。

○ 「彌陀」にすがった絶対他力の立場について（第2・9・13条）

煩惱があるが故に、「念仏をと覚えても、踊り上がるような歓喜の心がわいてこず、又いぢずに浄土へゆきたい心がおこらないのはどうしたことなのでしょか」（9）という唯円と同じ親鸞の心境は、たぶん、大方の宗教的見解によっては、まだ信心が足りない、修行が足りないと片づけられそうである。しかし、むしろ、その心境は、欲に悩むのが<自然>である普通の人間に共通するものである。そこを出発点にして、親鸞が、踊る心・喜ぶ心がわいてこないのは凡夫のしるしで、「きっと往生できる」と思ふべきことだ。「念仏をすると踊りあがるような歓喜の心もわき、いぢずに浄土へゆきたいと思ふようだったら、かえって、仏は『煩惱がないのだから』といぶかるにちがいない」（9）という確信に至っている仏への信頼をまず重要な点としてみる。次に、「往生のため千人殺せと言われれば、そのように殺すだろう。けれども、一人でも殺すべき業縁がないからこそ殺すことをしないのだ。これは自分の心が善だから殺さないのではない。又逆に殺害などしないと思つても、百人千人殺すこともありうるはずだ」（13）という、親鸞の世界を業縁（二不可避・必然のもの）でみる見方を説明し、その不可避・必然の世界の中で、弥陀がその不思議な力によって我々を助けてくれるのだという主張を把握させる。そして、信心は知識でないとし、「どういふ修行も全うすることができそうにないわが身であるから、どうみても地獄へ行くことに決まっている」（2）と自分の現実をみる親鸞が、凡夫を救おうとした弥陀にすがる論理（釈迦→普導→法然）を信仰の深みにあるものとしてみさせる。

○ 「悪人正機」について — 「弥陀の本願」にもふれて（第1・3条）

「弥陀の本願」について、それが、「老少善悪のひとを選ばず(1)、つまり、年令、身分、職業などの差別なく、一切の人を包摂する広さをもっており、罪深く、煩惱をまつわりつかせた現実の人間(=衆生)を救う性格を具備していることにまずふれる。又後序の「弥陀の五劫思惟の願をよく考えてみると、もっぱら親鸞一人のためである」という言い方が、親鸞を特別扱った弥陀の「選び」ではなく、弥陀の本願はすべての人にかかっているものであることをおさえておく。その上で、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」(3)を取り上げる。ここでは、弥陀の救いの対象が、自分で善事をつみ他力にかけるところがある「善人」より、愛憎に悩む「悪人」にあること、従って、他力にすぎる「悪人」の方が往生できる契機をもっており、丸裸の相対的人間こそ救われやすいことに注目させる。ただ、「悪人」ということで、罪を肯定したり、人間の現実に行う悪が往生できるものだという誤解は避けるように注意したい。

○ 平等観について — 親鸞の模索した人間関係(第2・6条)

「親鸞は弟子一人ももってはいない」(6)の文章の中に、絶対他力の立場から集団における平等観がよくあらわれている。指導—被指導という縦の関係は弥陀の本願にかなわず、念仏の行者は同朋であるべきだとした考えは仏教の平等観をよくあらわしている一例としてとらえさせておきたい。又親鸞自体、指導者としての布教を拒否しており、これを「念仏をえらびとり信じるのも、又すててしまわれるのも、皆様の心にまかせる他ない」(2)という文章の中で着目させたい。

5. まとめ

「歎異抄」を現代語で示したとはいえ、現在の高校生の水準ではむづかしい。従って、親鸞の信仰思想が生徒に意図通り伝わったかどうかあまり自信はない。しかし、それが実感としてわずかでも理解されていることを期待する。授業の時には、必ず聖書・教典をもってゆき、時にはそれらを読んで聞かせて、宗教を考えさせる環境づくりをしてはいるものの、やはり現実の中

にある具体的な例をふんだんに出してやらないと理解はむづかしいように思う。宗教の学習を、その「知識」的分野と同時に、宗教家たちの信仰の実感を理解させるように、今後肉づけをしてゆきたい。

「俗」の構造

都立高島高等学校 葦名次夫

生徒の作文をみて、最近気になることがある。それは「先哲の思想や生き方は確かに立派だが、しかし、自分には…」 「それは、もっともだけど、現実には、しかし…」といった「けど、しかし」型が多いことである。すなわち、理想（理念）と現実とを切り離して、原理的に、理念、純粋さ等の真理の世界を相対化し、実際には、それらを否定していると思われる態度が強くみられることである。ちなみに「最近の高校生は、しらけている、情熱や理想が希薄で、いやに現実的だ」といわれてから久しい。そこで、ここでは、倫社先哲の思想や宗教を「それはもっともだが、しかし」と相対化するあり方の構造を、日本の文化風土の中にさぐってみたい。いいかえれば「倫社の思想は立派だけど俺には関係ないよ」といわしめる「現実的で俗な」生き方、考え方、或いはその立脚する価値観、感覚を考えてみたい。

その考察の意義と考えられる第一は、人間のあるべき姿（光）だけでなく、現にある人間の弱さ、イヤラシサ、ドロドロしたもの（影）を直視していくことが、倫社の一つの出発点であると思われるからだ。第二に、先哲の思想や宗教が、現実と格闘し、それを克服する中から形成されてきたとするなら理念と現実との緊張関係や、俗と非俗のはざまから考察していくことは、大切なことである。第三に、現に根強く存在する内なる俗と現実主義の生き方を自ら対象化して自覚していくことは、その克服の手がかりとなる。特に、「先生は言うこととすることが、違うではないか」という生徒のまなざしを常に感じざるをえない倫社教師の私としては、それは、切実なる課題である。

しかし「現実」といっても、エゴという人間の内面から、社会体制上の諸問題まで、さまざまである。そこで、ここでは、前述したように、真理や価

値の世界を相対化して否定する日本的俗の精造に焦って考えてみたい。(その際、政治学者京極純一氏の著書とお話を特に参考とした)それ故、社会思想における現実直視の思想や社会科学的なものの考え方というテーマは、別の機会に譲りたい。また、本年度分科会で問題とされた「授業そのものになりたない現実をどうするか」というまさに現実的な問題は、今後の課題とした。また、紙幅が限られているので、考察は、羅列的なコメントの形をとるため、雑然として読みにくいことを御容赦いただければと思います。

1. まず、いくつかの日本的俗のあり方を列挙し考えてみたい。

1. 生きるとそのものの切実さの世界……花より団子。命あっての物種。
「私には老いた母と病める妻子がいる。とても…」という生活派の感覚。
2. 人間万事、色と欲という世界……大衆週刊誌の発想 — 飲ませて抱かせりゃ人間皆同じ。大人なら、ノム、ウツ、カウもしゃあないという発想。
3. 便宜の世界……ピーナッツ、わいろは必要悪だ。教育予算の充実は、競輪、競馬のテラ銭でという便宜的発想。
4. 事大主義、権威主義、立身出世主義……出世したいは人間の本性。ゴマスリ、ス〜ダラ節、大勢順応。日和見・便乗主義者。長いものには、まかれる。
5. 義理の世界……世話をうけたらあいさつ欠かさず、ex. 法に触れた落ち目の政治家にあいさつせぬのは、私の気持ちが悪くないと言って辞職となった元会長。中元、歳暮、年賀状、結婚式等の儀式の序列。いわゆる世間。
6. 人間教、人間味の世界……①バカ話やワイ談できて、宴会での特技がなければ人間味がないという発想 ②柔肌の熱き血潮にふれもみで寂しからずや道を説く君という感じ方 ③堅物、生真似目人間一酒ダメ、タバコダメ、ギャンブルやらず、女性嫌い、趣味は倫理の本読むこと — への敬遠。その人に対する、人間的でない、ものわかりが悪い、あんな人は息がつか

る、話せないという感じ方。

7. 野暮で泥くさく生活のアカにまみれた世界……最近の新聞漫画の主人公像。例えばアサッテ君、フジ三太郎—グヤジイ〜。僕ってダメネ〜、しかし偽善に厳しく意地もある主人公への親愛観。ちなみに、かつての頃の家族派の「サザエさん、クリちゃん、フクちゃん」と比較すると移り変わりが興味深い。

さて、以上のような「俗」の感覚からすれば、倫社の理念、特に西洋先哲の思想や宗教は敬遠さるべきものと考えられ「けっこりだが難しく現実には非力」とされる事は、我々が日常よく耳にするところである。本当の生きた思想や理念はそうでないと言われつつ、大多数の日本人が「立派な思想！」をそのように受けとめることは、今も変わらぬ事実である。このように根強い見方に対し、倫社の授業はどのように処すべきなのだろうか。

Ⅱ もちろん日本でも、この「俗」を否定、超越しようとする生き方は、西洋とは異なる形であれ存在するであろう。そこで、次に、それを「純粋・無私」というあり方の中に、みてみたい。

1. 純粋、清潔さの世界……ここにおける純粋さは、現実の生活の俗な生臭さから極力遠ざかることを意味する。例えば、御誠実、御清潔な方（美智子妃の言葉）という皇室イメージ。世間しらずのお嬢さん、子供のように純真うぶな芸術家のイメージ。

2. 無私、去私の伝統……私心去った人柄が近代日本史上で人気一番の西郷隆盛。また則天去私（漱石）から、無私精神（小林秀雄）まで「私」を去り無にして超える所に価値を見出すあり方は、私や自我を原点とする西洋道徳・倫理・カントの人格主義と比較して独特か。

3. 誠、至誠の世界……①誠実という主観的心情の価値化。例えば、「愛と誠」、「真実一路」。教育関係における誠実さという言葉の多用。②思い

つめ、つきつめの清冽さ。例えば、「かくなれば、かくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」（吉田松陰）。潔さと無鉄砲、無計算が魅力の『坊ちゃん』。思いつめの激しさそれ自体が、純粹さの証であるとされる。例えば特攻隊、二・二六事件の青年将校。また、いじらしさもそれに含まれようか。女心のいじらしさの歌謡曲「北の宿」。

4. 「道」の世界……①日本では、道がつくと精神的求道を意味する。茶道、華道、剣道然り、ゴクゴク飲み、ドサッと投げこむだけでは、茶道、華道といわない。また、求道故に人を斬る宮本武蔵は剣聖といわれる。②求道の文学の伝統 — 西行の和歌、芭蕉の俳句、真実追求の自然主義的私小説等。

5. 「馬鹿になる」事が、正直で純粹なことの証とされる考え方……聖なるものとしての馬鹿、逆に、秀才、切れ者、やり手は、俗的な否定の意味あり。以上、俗と対比される純粹、無私のあり方をみた。果たして、現代日本では、それが、どのような形で表われ、変容してきているのか。さらに脱俗、超俗のあり方は、日常の俗意識とどのように関わっているのか、倫社の教科書ではあまり展開されることがないだけに、その考察は大切なことと思われる。

Ⅱ 最後に、上記の俗と非俗を共にわけしり、無限抱擁しつつ、ねれていくあり方を考察したい。それは、「わけしりのねれた苦勞人」という人間類型が、成熟した人間として、現実の世間では、高く評価される一面があるからだ。特に、理念や純粹さが、現実社会では、無力として敬遠されることと比較して、ねれた人間が期待されているという面は、無視できない事である。そして、それ故に、倫社の先哲の思想、理念と最も拮抗するのは、このあり方でないかと思われる。

1. 度量、太っ腹の世界……清濁あわせのむことが、少くとも、日本のリ

ダーの要件であることは確かだ。これは、無と肚の伝統によるものだろうか。

2. 自己抑制のある人間……目くじらをたてない。キッと、カッとならない、その意味で成熟した人間。
3. さらに、それがねれると、分別をわきまえて、粋も甘いもかみわけた、わけしりで、できた人となる。日本で「大人になれ、あいつは、ひとかどの人物だ、最近、人がいない」という場合のヒトとは、これを指す。また、「あいつも、ようやく世間がわかるようになったか」という意味あいは、これに含まれよう。
4. 寛容と忍耐の量が、一つの価値、正義であるという考え方。相手の甘えやわがままを、じっとこらえてくみどって行く人間。「あれだけ言われても、じっと我慢したのはえらい」といわれる世界、こらえている人を、なお難詰するのは、その方が悪いと考えられる世界。

以上、日本の文化士の中に、理念と現実の緊張関係という視点から「俗、純粹、ねれた」あり方をさぐってきた。最後に、それをふまえて、倫社授業との関りにおける課題を述べてみたい。

その第一は、倫社の教材の中に、我々がふだんの生活の中で生きている感覚や価値観が十分とりいれられていないという反省である。確かに、それは、「イデア、アガペー、仁、慈悲のような偉大な先哲の思想」ではないかもしれぬ。しかし、我々が、現にこの日本で生きている「義理、甘え、人間味、野暮、無私、誠実、道、ねれた」等のあり方は、日常身近な感覚や価値故に、考察に価することと想うのである。特に、我々は、先哲の思想を、日常の俗的な感覚や価値との関りにおいてどう受けとめているのか、それを明らかにする意味でも大切なことである。また、先哲の理念や価値を相対化して否定する文化風土が前述したようにあるだけに、そのような俗の感覚や価値観を考察していくことは、重要なことである。

第二に、最近の生徒の中に、新たな「俗」の生き方、考え方がみられることである。例えば、「真似目を茶化してひやかかにながめ、露悪的などぎつさを好む」生徒がふえてきたように思われるが、それは、マスコミの影響だけだろうか。それがもし、「現実、世間は…という浅薄なわけしりの大人」をつくりだし、理想主義や純粋さを希求する芽を摘んでいるとするなら、そのような「俗」の構造も、また、問題としていかねばならないであろう。特に、高校生の時期は、理想と現実との緊張に激しくゆれつつ、純粋さや、理想に燃える時である。それが、自己陶醉や独善という形でなく形成されるためにも、否定的な俗の構造を、厳しく考察することが必要であると思う。

さて、以上今まで述べてきたことをまとめてみれば、「俗と現実と内在しつつ、かつそれを超えていくような倫社の探究」ということになるだろうか。その事を比喩で示せば、船（理念）は、水（俗・現実）から離れても、水に沈んでも動きだすものではないし、水と接しつつ、その摩擦の中に、力強く前進するものであるといえよう。そしてこのようなあり方の探究は、「そんなもってもらしいことを脅かなくたって、ま〜、どうでもいいことではないか」という声を内に聞きつつこの原稿を書き、俗の世界に気楽さと親近感を抱きながら希求する私自身の探究と課題でもある。

〔 特 集 〕

『 わたしはこのような課題を
出している』



(1) 「私の理想の生き方」と「ソクラテスの弁明」の読後感

清瀬高 小川 輝之

今年度は『歴史における青春群像』（奈良本辰也『歴史における青春群像』から抜粋してプリントしたもの）と『ソクラテスの弁明』を読ませ、それらに対する感想文の提出を課題とした。『青春群像』は、「青年期」のところで、『弁明』はギリシヤ思想の授業でとりあげた。そして、前者では10名の青年たちの青春の生き方を通じて、自らのあり方を考えさせ、また後者では、授業で学習したギリシヤ思想を原典を通じて肉づけし、古典のよさを味わわせようとしたものである。

なお、提出された報告書は3段階で採点した。各学期ごとの評価は、試験を6割として、残り4割を課題、ノートの活用状況（ノート使用のしかたをあらかじめ指定してある）、授業態度などを勘案して、できるだけ総合的にを行っている。

(2) 昭和51・倫社夏季課題

葛飾商高 浅香 育弘

①平生、よく聞く、よく読む、よく話し合い等の他、ノートに授業内容に並行して意見感想をよく書く（学期毎2回提出）、或いは単元に応じ出された課題プリントを記入提出する等の要求をし、実施している。

夏休みには、秋以降6人の思想を重点的に学習する前提として、生徒各自が1人の思想家について調べる課題を出し、考えまとめる力を養う。

②「弁明」（講談社）「人生について・ゲーテのことば」（教養文庫）。

「論語」・「ブッダのことば」（岩波）「古事記現代語訳付」（角川）

「心・行人」の中から1冊を選び、それぞれいくつかの検討事項を示して調べさせる。レポート用紙5枚以上とし、9月始めに提出させる。

③レポートは2学期の重要な評価対象とする。ノート等も同じ。授業の際検討事項毎に発表させ、感想を言ってもらう。そのあと私が説明する。

③(3) 夏休み課題 — テーマ読書から小論文へ

大森高 吉沢正晶

①課題のねらい

古典などに親しみ、読書によって思索を深め、そして自分の考えを表現する力をつける。

②課題の内容・方法

(1) 自主研究テーマによる文献研究

i) 自分のテーマに該当する教科書の内容を閲読する。→研究すべき主要事項をつかむ。

ii) 参考図書を閲読する。中心にする本と、あわせて参考にする本がある。

(「参考図書目録」をプリントにして配布する。)

以上を、1学期授業の中で、机間巡回による個人指導も加えて、進めさせておく。

(2) 小論文の書き方 (プリントにして示す。)

○題目 自分が立てたテーマから、その趣旨を表す適切な題をつける。主題に副題をつけることもよい。

○はじめに として、自分がその文献・思想家をえらんだ主体的、研究的な動機と、研究のねらいを書く。そしてとりあげる思想家について、生歿年と人物紹介的な略伝を書く。(本の解説の項その他から要約して書く。)

◎本論に入って、自分のテーマに応じて、主要項目につき、中・小の項目を立て(論文の中の章・節などにする)、文献からいくつかの内容をとりあげそこからどんなことを読みとり、どんな意味を見出したかを、できるだけ自分の生活体験にも即して、自分のことばで述べ、そのことについて自分はどう考えるかを、できるだけ明確な論拠をもって書く。この辺が論文としての主要部分であるから、全体の枚数の大部分をとり、なるべくくわしく書く。理解しにくかったところがあれば、そこがどのようにわからないか、どのように疑問なのかを述べる。

○全体として、その本を読んで得たこと、感想などを書いて、まとめとする。

○末尾に、自分がえらび読んだ本、また一部分でも参考にした本を、参考文献として、主要なものから順に、書名・著(編)(訳)者名・発行所・発行年を書く。

(注意) 文献を引用したあとに、必ず自分の論評をつける。どの部分が本からの引用で、どこからが自分の考えなのかを明瞭に書く。引用は「」でくくるか、長文になるときは一段さげて書くなど、はっきり分けて書く。引用文の末尾に、() 書きなどで、その本の編章など引用箇所を明示しておく。

③評価・授業における活用のしかたなど

1) この小論文はつぎのように評価する。

- A すぐれる (主要事項の理解と思索、表現力等、その内容充分)
- B^o ややすぐれる (Aに次ぐ)
- B ふつう (高校2年生の平均的水準 ← 例年の例から見て)
- B[△] ややおとる (重要事項の読み取り理解、思索、表現等に不足あり)
- C おとる (同上の内容につき、はなはだしく不足) → 個人指導を加える。

この小論文は第2学期中間考査代替等、年間の学習成績にくり入れる。その割合は、読み・書き・思索の面で、相当に重要視できる。

ii) 第2学期授業の中で、小論文からえらんで研究発表をさせる。

iii) 提出は9月初頭。もし提出がないときは、相当に成績は低くなる。

付) 授業の進度とともに、そのテーマ別に、2学期中間考査の時期までに、教師はこの小論文を閲読し評価する。また個人指導をする。

以上のほか、細部については年毎に気がつく点を改善していく。

単なる読書感想文ではなく、論拠をもった論文を書くことを体得させることが主眼である。

(4) 倫社学習のまとめにふさわしい考査問題の作成

国分寺高 菊地 堯

1. 課題のねらい

本年度は隣義中心の授業形態をとり、生徒自身による学習展開の機会を多く設定できなかったため、その面を補う学習形態として、期末考査の範囲について、生徒に問題案を作らせてみた。そのねらいは、問題案作成という形で、学習内容理解の自己確認、問題案の内容による生徒の倫社観や日常の授業の受けとめ方（主体的か対象知的か）の察知の2点においた。

2. 課題の内容・方法 B4版用紙1枚に出題趣旨・条件を初めに記し、記載らん一杯を最大限として、問題と解答を書かせ、提出させた。条件としては、生徒が倫社の考査として最もふさわしいと思う内容・形式を工夫せよ、という点を強調した。優秀作は期末考査に採用することもあり得るといって意欲を喚起した。実際には採用しなかったが、評価には加えた。

(5) 「江戸時代以降の日本の思想」

白鷗高 徳久 寛

- ① 与えられた項目につき、教科書を参考に自分で調べ、考えをまとめる。
- ②(1)朱子学が幕府の官学に採用されたのは何故か。(2)中江藤樹の説く孝の倫理とは具体的にどのようなあり方をいうのか。(3)山鹿素行は武士の心がまえはどのようにあるべきだと考えたか。(4)伊藤仁斎が特に重要視した書物は何か。(5)荻生徂徠は中国古代の聖王の政治の目的は何であったかと考えたか。(6)封建社会の中で石門心学が重要視されるのは如何なる点にあるか。(7)福沢諭吉はどのような学問を勉強するように強調したか。(8)内村鑑三の示す2つの丁とは何のことか。(9)純粹経験とはどのような心の状態をいうのか。仰和辻哲郎の説く人間の二重性とは何か。
- ③ 上記10項目にわたり全員に授業時間中に答えをつくらせる。その後、1項目1時間の配分で、生徒に発表させ、それをもとに授業をすすめる。

(6) 写真課題

高島高 荏 名次 夫

1. 課題のねらい……現代日本のかかえている諸問題を、身近かな日常生活の中に探究し、写真という映像でとらえさせる。それによって、自己の問題意識の表現化をはかる。
2. 内容と方法……A 4レポート用紙一枚に、テーマと問題意識が浮き彫りにされるようにレイアウトを工夫させる。形式一切自由。夏休み明けまでに提出（或いは5月末、冬休み明け）。その際、自己の写真も添付する。（宮崎先生の示唆による）そして、同型のファイルに整理して、クラス・学年間に回覧する。これは、生徒の名前覚えと、クラス生徒間の親密さを、増す副次的効果がある。
3. その他……5年続けているが生徒の評判も良好に思う。集積されれば、写真にみる現代日本問題意識史(?)ともなり、授業教材としても使える。

(7) 単位修得小論文

上野高 海野省治

授業が3年生のためもあって課題というものは現在実施していないので、小論文（レポート）についてここでは書いておきたい。

①ねらい 小論文は本の孫引きではないのであるから私の小論文でのねらいは当然のことなのだが、「君でなければ書けない文章を書け、自分の言葉で書け」といつも生徒に言っている。

②方法・内容 ④自分でテーマを設定して書く（*et.愛*、自由）。⑤思想家の著作を読んで内容のまとめ、感想、批判などを書く。いずれかを選択させる。7月に小論文の説明。10月下旬にテーマの提出。11月下旬に小論文提出。

③評価 A、B、Cで行い、A、Bを多くつける。3年なので授業ではほとんど利用できない。提出時期 1月位がいいのだが、これも仕方がない。

(8) 夏季読書課題

新編 高等学校 国語 第二分科

鷺宮高 佐々木 誠 明

①課題のねらい

生徒のひとりひとりに、じっくりと考えさせ、その思考の過程を順序だてて表現させる力を養うこと。

②課題の内容・方法

下記のうち一冊を読み、感じたこと、考えたことを原稿用紙（400字詰）5枚以上にまとめて、9月1日に提出すること。

・「ソクラテスの弁明」「釈迦」「聖書」「キリスト教の人生論」「考えるということ」「カント」「歎異抄」「正法眼蔵随聞記」「鎌倉仏教」「共産党宣言」「マックス・エンゲルス小伝」「福翁自伝」「われいかにして基督信徒となりしか」「こころ」

③評価

A・B・C・Dの4段階に区分して2学期評定に援用。

(9) 「現代社会と青年」の分野における課題

新編 高等学校

府中工高 関根 荒 正

1. 「老いた両親扶養の問題とマイホーム主義の傾向について自分の意見を述べよ」 — 家族集団についての課題

2. 「現在の労使関係と職業に対する生きがいの喪失について自分の意見を述べよ」 — 職場集団についての課題

以上1と2は、生徒の身近な集団の現代的問題をこちらから提示説明して、それに対して対自化させ、自分の意見を体系的にするのをねらいとする。

3. 「どんな大人になりたいか」「理想の大人とはどんな人か」「大人の条件とは何か」の内、1つを選んで自分の意見を述べよ。

これは、大部分の生徒が就職して社会に出てゆく現状をふまえて、自分のこれからの生き方、及びその決意を現実の大人というものを媒介にしてまとめさせることを目的としている。

10 思想の源流についてのレポート

桜町高 佐藤 勲

- (1) 課題のねらい…思想に関する本を強制的に読ませるため。
- (2) 内容・方法……古代ギリシャ思想（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）ユダヤ教からキリスト教、原始仏教、儒教（孔子、孟子）のうちのどれか1つを選んでそれに関する本を、「倫理・社会資料集」第一学習社の読書案内の中から見つけ読ませる。感想文ではないレポート10枚以上を提出させる。
- (3) 評価……A、B、Cの三段階評価をしている。Aのついた生徒は、総合評価を1段階アップさせる。特に秀れたレポートは発表させる。

(1) 「読書指導を併行した授業の展開」

成城高 野村 誠

マスコミ文化や受験中心の学習による知識の分断化・拡散化を強いられ、何事にも無気力、無関心にみえる生徒の思考態度に対し、私は倫理・社会の学習の目的を、まず、社会とその中に現在生きている私たち人間に対する問題意識を喚起させること、に置いています。具体的な接近方法としては、教科書での授業と併行させて、各單元ごとにそれと関連する本を選び、それを生徒全員に購入させて読んだ感想を授業の中で発表させたり、期末にレポートとして提出させるということを行っています。読んだ本は、1学期に亀井勝一郎「愛の無常について」、中根千枝「タテ社会の人間関係」。夏休み中の課題として、2学期からの〈思想の源流〉に入る下地の意味もあって「論語」、「マタイ福音書」、「ソクラテスの弁明」のうちから1つ選び、原稿用紙5枚にまとめて提出させる。3学期は、主な思想家（50年度はルソー、マルクス、ニーチェ、親鸞の4人）を各自1人選び、グループで研究する学習形態をとり、最終の授業日に小論文集としてまとめ、印刷して生徒に配るようになっています。

(12) 私の倫社課題

駒場高 細谷 斉

今年度の読書課題からその要点

一学期の課題 その一 次の書物の中から一冊選び精読し、別紙所定用紙<記入のポイント ①この本を選んだ理由 ②この本を読んで重要だと思ったところの説明 ③この本を読んでわかりにくかったところ、疑問点 ④この本を読んだ感想、意見)に意見をまとめて提出する。課題図書 ①ヘッセ「デミアン」 ②同「知と愛」 ③ラクルテル「反逆児」 ④ルソー「告白」 ⑤エッカーマンとゲーテとの対話」 ⑥ツヴェイク「人類の星の時間」

この課題は一学期前半の授業の内容である「青年の生き方」と合わせ、青年の人生観や生き方について書かれているものを選んだ。結果的には、ヘッセのものを読んだ者が多かったが、「デミアン」と「知と愛」の2冊とも好評であった。その二「ソクラテスの弁明」と「クリトン」を読んで、別紙所定用紙の課題に答えて提出せよ。課題①哲学とは知恵を愛することであるといわれるが、ソクラテスの愛知の精神とはどのようなものかまとめよ。また、今日の高校生における愛知の精神の状況について考えるところを述べよ。②法とは何か、何であるべきかという問いはかなり難しい。昔から、悪法の問題と言われるものがある。すなわち、「悪法も法である」とする考えと、「悪法は法でない」とする考えがある。ソクラテスは「法」というものをどのように考えたかまとめて説明せよ。そして更に、君は「悪法の問題」についていかに考えるか、理由を明らかにして論ぜよ。

夏休みの課題 次の三題より一題選び作成せよ。

- ①自由読書課題—古典や名作といわれるものを一冊選び感想文を提出せよ。
 - ②夏休み中の体験記—旅行、見学記、紀行文、合宿記等を提出せよ。
 - ③写真課題—現代の人間の状況をリアルに撮って提出する。
- 結果的には3分の2位の者は①を提出した。かなり良い出来の作文もあった。②では友人との旅行記と合宿の体験記が多かった。

三学期読書課題

倫理社会の最後の課題として、各クラスごとに授業の内容と密接に関連をもつ古典・原典を主とした読書課題を出題中である。(今年度の三学期の授業は、クラスの希望をとって、三方面に分けている)

㊤日本の思想の学習クラスの課題図書 ①丸山貞男「日本の思想」 ②ベネディクト「菊と刀」 ③「歎異抄」 ④「正法眼蔵随聞記」 ⑤「日蓮文集」 ⑥内村鑑三「代表的日本人」 ⑦「福翁自伝」 ⑧「善の研究」 ⑨「余はいかにしてキリスト信徒なりしか」 ⑩家永三郎「日本文化史」

㊦西欧近代思想の学習クラスの課題図書 ①「ベーコン随筆集」 ②「ダ・ヴィンチの手記」 ③「ルネサンスの思想家達」 ④モンテーニュ「エッセー」 ⑤パスカル「パンセ」 ⑥「方法序説」 ⑦「リヴァイアサン」 ⑧ルソー「人間不平等起源論」 ⑨「社会契約論」 ⑩「道徳形而上学原論」

㊧現代の思想の学習クラスの課題図書 ①フロム「自由からの逃走」 ②オーエン「新社会観」 ③大内兵衛「マルクス・エンゲルス小伝」 ④「空想より科学へ」 ⑤「共産党宣言」 ⑥「経済学・哲学草稿」 ⑦サルトル「実存主義とは何か」 ⑧「死に至る病」 ⑨「ツアラトウストラ」 ⑩松浪信三郎「実存主義とは何か」 ⑪カフカ「審判と変身」 ⑫カミュ「シジフォスの神話と異邦人」

倫社の課題について

英語や数学などのように毎時間が具体的な問題の練習に当てられる教科と異なり、自己の人生や人生観についての思索や反省の契機となることをねらいとする倫社においては、即問即答式の機械的問題練習は本来意味を成さず、この点において課題を与えること自体がむずかしい。結局のところは読書させ文章を書かせることに落着いて行く。私もそのようにしている。全く平凡だが他に名案も浮かばない。選ぶ課題図書や書かせ方に若干の自分なりの工夫をしているつもりである。

13 研究発表・年間レポートなど

志村高 木村正雄

①課題のねらい。倫社教育のねらいは倫社の学習内容の知的理解と内面化にあると考える。したがって、課題のねらいもそこにおく。

②課題の内容・方法。(ア)年間レポートの作成、20枚(800字)以上、単行本2冊以上は必ず読む。4月に出題し1月に提出。ソクラテス、マルクス主義、実存主義、天皇制、部落問題等各自選択。(イ)研究発表各自年1回、15分位。テーマは年間レポートと同じ。模造紙で図示、プリント、録音テープ、スライド、写真、8ミリなど利用し、多角的に行なり。

③評価とその活用。(ア)年間5回の定期ペーパーテスト、知識理解の問題と小論文。35点未満の者は追試を繰返す。(イ)研究発表の方法、態度を他の生徒も評価(10点法と文章で)する。(ウ)年間レポート。(エ)授業中の学習参加態度、欠時の場合は減点。(オ)ノート点検、発表資料やレポート等次年度にも活用。

14 わたしはこのような課題を出している

両国高 小平 克

わたしは、課題作文を、かなり多く書かせている。

まず、例年、学期に2回、計6回、課題作文を、グループ内の生徒が評価し合う。「回し読み」作文の形で提出させ、それを学期末の10段階の評価に1点づつ繰り込み、内容的にすぐれているものは更に1点づつおまけしている。時には、そうした作文をプリントして学年全体の生徒に読ませている。

次に、二学期以降グループ発表学習をとり入れているので、夏休み中の研究を、グループの報告書として提出させ、発表後は反省記録を提出させている。以前、これらを集めて整本し、図書館に寄贈したことがあった。

更に、三学期は、毎年、「単位修得レポート」を作成させている。自由題であるが、字数は1600字に制限している。これは、わたくしが作成して使用している資料集1頁分に当り、生徒のレポートのなかの優れたものを厳選して、同じ規格の「資料集(文集篇)」を作れたら、と思ったからである。

(15) 倫社ノートと学位論文

府中高 永上 肆朗

①倫社が他科目と異なることは、学ぶ生徒が教師の一方的な注入に終始することなく自らも主体的に考え且つ自己形成に役立ちうるものに己れが高められねばならない点にある。これは究極的には、集団 → 個人に深められるべきものである。この立場から「倫社ノートに自己を表現しよう」をモットーとする。

②ノートには、スピーチからの発展的エッセー、社会や自己の生き方、授業からえられたテーマを自由にかかせる。年間三冊の読書感想文もありこんで学期に1～2度提出を義務づける。とくに学年末には、「学位論文」と銘打った研究レポート（10枚以内）を出させる。12月に仮テーマ → 2月未完成で指導している。テーマは広範囲にわたっている。

③スピーチはテーマ表をプリントして参考に供する。

(16) 高校生の意識・行動

本所高 勝田 泰次

① 生徒は悩みや不安を自らのものとして自覚し、自分をつきつめていく問題意識に弱い。したがって、深く思考して、人間らしく生きるためのよりどころを形成しようとする、主体的態度を育む訓練がなされなければならない。

② 「チェッ、ツイテネエヤ、キョウハ」「メッカンナキャイインダロ」「オレバッカリオコッテヤラ、オレダケヤッタンジャネエヤ、アタマニキチャウナ」「オトナナンカ、汚職ヤインチキナコトバカリシテゴマカシテイルニ、オレタチダッテ、ショウジキニナンカデキルカイ」「ショウジキニシテソンスルヨリ、ウソツイテトクシタハウガイイ」

③ 現代社会の状況を反映した、問題事例について批判させ、傾向の異なる何編かを印刷配布し、討論させて、「現代と人間」のしめくりとした。

現代人にとって、自己と他者とが共に、ひとしく成長してゆくものであることが必要である。

(17) 読書課題と研究論文課題

青山高 小川 一郎

1. ヘッセ「デミアン」

倫社の最初の時間に一週間以内に読んで原稿用紙2枚程度に感想をまとめてこさせる課題を出す。青年期の自我のめざめを扱うに当って、一人の青年の生き生きした具体的な描写から、自己の内面への眼を開かせたいから。感想文は4～5人のものを教室で読ませる。そのほかに、全員に感想を発表させる機会をつくる。すでに7～8年続けている。

2. プラトン「ソクラテスの弁明」

夏休みの課題。2学期はじめのギリシヤの思想で扱う。

3. 研究論文 — 単位修得論文 —

提出は2月末日。課題は12月末に出した。10月から今年度は全員に発表課題を出し、個人発表させることにした。この自分の課題に関連して原稿用紙10枚程度にまとめさせる。発表を契機に思想や思想家についての関心が高まるので、発表をおさなりに終らせたくないので、本年度はじめての試み。

(18) 倫・社グループ研究報告書

江北高 宮崎 宏一

①課題のねらい……年度初めに自主的につくったグループ(4～6人)を積極的に活用させるために、特に一学期から夏休みにかけてグループ内共通読書を選定させ、研究テーマを決め二学期より研究発表を開始する。

②内容、方法……読書感想文と各自の顔写真(いつどこで撮ったものでもよい。自由な写真を貼付)が書けたり、貼ったりすることのできる報告書をこちらであらかじめ印刷しておき、班長に渡す。一枚の上質紙に4人書きこめるようにしてある。ここで400人近い生徒の顔と名前が一致してくる。

③活用……二学期からグループ研究がはじまるので、その報告書と感想文などをみながら、勿論、写真をみながら、思いついたことを報告書の評価欄に書き込むようにする。この方法は二年目になるが楽しいものである。

(19) 夏休み読書課題

<ねらい>

鷺宮高 井原茂幸

高校生に読書、とくに思想書に親しむ機会を与え、同時に倫社の発表学習に役立たせることをねらいとして、毎年夏休みの読書課題を出している。一学期末に3人一組の発表グループをつくらせ、主題を決定させた後、その主題に関する図書一冊を選ばせて、夏休み中に読書させ、二学期初めに所定の様式に従って読書感想文を提出させることにしている。

<内容と方法>

各主題別の参考図書の一覧表を配布し、図書選択の一助としている。感想文の形式は、学年組氏名、選んだ書名、著者、出版社、読後の感想、感動又は面白く感じたことがら、疑問点、意見および批判となっており、400字づめの原稿用紙に書かせて提出させる。

<評価、授業への活用>

感想は丁寧に読み、所見をあとがきし検印を押して返却する。評価は5段階で行ない、発表の評価と共に倫社の評価に加味する。発表は主題別に印刷した1枚の用紙に要項を記入提出させ、打合わせを経た上で行なわせることにしているが、読書課題は発表内容の理解に大いに役立っており、一番印象に残るようである。

未提出の生徒も数名出るが、催促して全員に提出させるようにしており、読んで所見を書き加える仕事も労力のいる仕事であるが、生徒一人一人の見方考え方を知る上でも大いに参考になる。

(20) 卒業を前にして(作文)

化学工高 矢島賢二

- ① 卒業を前にした生徒の気持ち把握したいこと。講義一本やりで来たので、その反省の意味も込めて、自由に書かせる。
- ② 授業時間に、ワラバン紙半裁を与え、時間内に書かせる。多く書く生徒

で半載いっぱい、いっぱい。大部分は、半分程度。中には、二、三行とい
うものもある。

- ③ 読んで、A・B・Cのランクに分け評価する。代表的な作文を集めて、
ガリバン刷りの文集を作成。これには、部分的に引用する場合も多い。生
徒には刷った物を授業時間内に読ませる。友人の作文を読むのは、結構楽
しいようだ。学期の途中には、「このごろ考えること」という題で、同様
にやることもある。

(2) 読書課題

保谷高 杉原 安

- ① 1学期に〈現代と人間〉の分野を講義中心で行ないますので、手軽に入手
できる本を指定し夏休み中に読ませ、〈現代と人間〉の分野をより深く考
えさせる手掛りとした。
- ② 2学期始めに400字詰め5枚以上のレポートを提出させた。本年の課題
図書は現在使用している教科書の内容構成と照らし、以下の通りとした。
- 『イデオロギーを超えて』(潮新書) 『新しい社会』(岩波新書) 『二十
世紀の意味』(岩波新書) 『現代をどうとらえるか』(講談社新書) 『情
報化社会』(講談社新書) 『菊と刀』(社会思想社・教養文庫) 『二つの
顔の日本人』(中公新書) 『日本人とユダヤ人』(角川文庫) 『近代人の
疎外』(岩波新書) 『人間と労働の意味』(中公新書) 『組織の時代』(潮
新書) 『タテ社会の人間関係』(講談社新書) 『グマインシャフトとゲ
ゼルシャフト』(岩波文庫) 『人間の集団について』(角川文庫) 『詩と
反逆の死』(文春文庫) 『二十才のエチュード』(角川文庫) 『甘えの構
造』(角川文庫) 『社会科学入門』(岩波新書)
- ③ 2学期に同じ本を読んだグループの中から適当なものを発表させ、全体で
意見交換を行なう。評価は年間5回のテストに加えて1回分とし、ABC
で採点する。

② 「倫・社」修了論文

板橋高 小河 信 国

- ① 自己の問いとテーマを発見させ、持統一貫して思考させ、思考と言葉のかかわりを体験させると共に、あらゆるテーマが最終的総合的に、「如何に生きるか」という世界に帰着することを知らしめる。
- ② 論題 — 自由課題（8クラス全員）
形式 — 400字詰原稿用紙50枚以上。（楷書、ペン書き）
条件 — 論文提出を単位修得要件とする。
〆切 — 課題案内 — 5月1日。第1次〆切 — 9月2日（「テーマ」及び内容の説明。レポート用紙1枚以上。）
第2次〆切（最終〆切）— 完全原稿—翌1月8日12時。
- ③ 翌年、卒業式に批評を付して返却。論題集と分析を製本して全員に配布。新2年生にも配布し、論文指導に活用している。

③ 自習時の「課題」

羽田高 津田 信一郎

本年度は夏、冬など一切の課題を出しませんでした。読書感想とかいったものを考えたのですが、昨年度の失敗を思い出し「どうしようか」と思っている内に出さずに終わった訳です。しいていえば自習時の「課題」となります。「自由について」「集団と個」「神について」「最近のニュースから印象に残るもの」「マスコミについて」「家庭科男女共修問題」等々をテーマに生徒に意見を寄せさせます。これは生徒理解、授業内容や方針の設定にかなり役立ちます。あるいは意見をひろい集めてプリントにし次の時間に使ったりします。意見の相違点を明確にし生徒に提示し更に議論を深めて一定の方向を出すこともできます。なお教科書を参考に寄せたもの（例えば「実存主義とマルクス主義の違いを書け」）は失敗でした。何をもとにして生徒は書いて行くのか、おさえておく必要があるでしょう。

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といえます。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
 - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
 - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
 - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任役におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
 - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
 - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を奨励する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
 - (1) 会長 (1名)
 - (2) 副会長 (若干名)
 - (3) 常任幹事 (若干名)
 - (4) 幹事 (若干名)
 - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が招集し、次のことを行ないます。
 - (1) 役員を選任
 - (2) 決算の承認、予算の議決

事務局より

東京都立保谷高等学校 杉原 安

4月に事務局を「清水の舞台」から飛び下りる心境でお引き受けしましてから、早いもので1年が過ぎようとしています。その間、会長の岡本先生、前事務局長の坂本先生はじめ多くの先生方に助けられて何とかやってきました。チーム・ワークの賜物と心から思っています。例年と同じように、各分科会での地味な、しかも非常に大事な相互の研鑽の結晶として、立派な紀要が出来あがろうとしています。第1集から並べてみますと研究に徹した都倫研ならではの伝統の重みを感じます。と同時に各分科会に若い新しい先生方が数多く参加され、夜遅くまで活発な討論を展開され、「新しい酒は新しい革袋に盛れ」の謠にあるように、ユニークな発想を聞くにつけ私のようにマンネリ化した者にとって非常に勉強になりました。これらの分科会活動を三位一体となって支えてこられた研究部長の宮崎宏一先生をはじめ市川弘乗先生、草名次夫先生また各分科会の世話人の先生方の御苦勞は本当に大変だったことと思います。心から御礼申し上げます。

さらに今年度は教育課程審議会での教育課程の審議が大詰めの段階を迎えていましたので、昨年度からの継続として特別分科会が数多くもたれました。そこでは倫社の存続をかけて熱っぽい討論がなされ、その成果は全国大会、秋季大会に永上肆朗、菊地堯、吉沢正晶の諸先生により発表されました。また全国大会に、各地から参加された先生方の意を受けて「倫社の存続と道徳教育の充実に関する要望書」をまとめ、関係方面に陳情しました。この事に關しましても会長、世話人の先生方のお骨折りには感謝の外ありません。

思えば東京という所は狭いようで案外不便で、研究会の裏方の作業の度に放課後1～2時間かけて多くの先生方が保谷にかけつけて下さいました。特に事務局次長の小川輝之先生を始め事務局の佐藤照、浅香育弘、海野省治、細谷斉の諸先生及び、研究部の先生方と楽しく仕事が出来ました事を感謝しますと共に、今後のご協力をお願い致します。

あ　と　が　き

“三人寄れば文殊の知恵。ということばがある。これはなにごとにもあてはまる含著ある言葉ではないだろうか。人間一人で悩んでいては、決してよい解決法は得られない場合がある。本年度の研究部トリオ、市川、章名、宮崎も、実はこのことばにぴったりな一年間を共に歩んできたように思う。

人間味あふれる杉原新事務局長のもと、昭和51年度の事務局員一同なんとかここに都倫研、研究活動の裏方の任務を果たし終えようとしている。こうして、第15集の紀要のあとがきを書きながら静かに時の流れを噛み締めるのもまたいいものである。

思えば、年度はじめの研究主題の設定や、研究体制、特に分科会の構成には、並々ならぬ諸先生方のご協力と情熱の賜によって、昭和51年度の柱が組み立てられ、ボツと胸をなでおろしたあの日のことがまず頭に浮んでくる。

あれから一年、総会、例会、分科会、夏・秋の全倫研大会、発送作業等々、盛り沢山で、内容豊富な研究会活動を今日まで積み重ねることができたことを、会員共々喜び合々と同時に、都倫研のためにご尽力下さった諸先生方に心より感謝申し上げます。

さて、研究部が一番苦勞したことといえば、各分科会の世話人選出、決定ということではなかったか？……結局、最終的にはこちらから無理にお願いするということかたちになってしまったことが一部にあり、来年度はこの点を大いに反省すると共に、積極的に分科会の世話人を希望していただきたい。

本年度の分科会活動では、特に第一分科会「社会と青年」が活発で、世話人の津田氏による『分科会通信』は、手づくりの味そのまゝの「読紙」で、分科会々員の貴重な絆となり、分科会の雰囲気を高揚していたようである。また昨年より継続している、特別分科会も「教育課程審議会の審議のまとめ」をうけて、世話人の吉沢氏（前研究部長）を中心に、具体的な必修「社会」

の内容についての検討がなされ、将来の倫・社を考える大切な礎となった。

今回の都倫研紀要では、「特集」のページを設け『わたしはこのような課題を出している』—を紙上で交換しようというものである。日頃のそのままの姿をお互いに出し合い、これからの倫社の授業の参考にしていこうというアイデアである。お陰様で、かなりの反響があり、原稿も続々集まり研究部一同喜んでおります。これも「三人寄れば……」のたまものである。

本年は、「テーマ学習」、「主題別学習」というもので、これまでの思想史学習中心の分科会構成をとらずに、ある人生の基本的主題を追求する型をとって見たが、なかなか思うように「テーマ学習を中心とした授業展開例」がみつからず、どの分科会でも、その具体的内容に苦勞していたようである。テーマ自体があまりにも広い領域すぎて、どこから導入し、どう教材化すべきか、戸惑われたのではないだろうか。「倫・社」という教科に対しての、さまざまな試みは、無限にあると思う。わかりやすい、そして新鮮な授業展開をお互いに考えていかねばならない。これが今日の大きな課題ではないだろうか。

では終りにあたり、公開授業者、研究発表者、各分科会世話人の諸先生方、及び紀要原稿執筆者等々の労とご協力に対し、厚く感謝申し上げます。

(官 崎 宏 一 記)

SECRET

CONFIDENTIAL

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

SECRET

